茨城県友部町

小原（おばら）遺跡

県営畑地総合整備事業小原地内北区　平成15年度調査報告

2004年

大成エンジニアリング株式会社

友部町小原遺跡発掘調査会

茨城県友部町

小原（おばら）遺跡

県営畑地総合整備事業小原地内北区　平成15年度調査報告

2004年

大成エンジニアリング株式会社

友部町小原遺跡発掘調査会

調査区全景　南から

SI-1　出土土師器一括

序　文

友部町は、茨城県のほぼ中央部に位置し、東京から約100km、県都である水戸市から17kmの距離にあります。北西部に八溝山系が連なり、東南部の涸沼川沿いに東茨城台地と呼ばれる平坦な台地、北西部には友部丘陵と呼ばれる緩やかな丘陵地帯が広がります。現在では町内を高速道路や鉄道が走り、活気にあふれています。また、涸沼川・枝折川・涸沼前川などの水に恵まれ、豊かな可耕地であり、古代より人々が生活しやすい環境であったと思われます。

今回の調査は県営畑地総合整備事業にかかわる発掘調査であります。この調査の結果、弥生・古墳時代の遺跡が確認され、地域の歴史を知る上で貴重な資料を得ることができました。

この報告書が研究資料としてはもとより、教育・文化振興の一助として多くの人々に広く活用されますことを強く願っている次第です。

最後になりますが、発掘調査・整理作業・報告書の刊行に際し多大なるご指導・ご協力を賜りました関係各機関ならびに各位に心より厚く御礼申し上げます。

平成16年３月

友部町教育委員会

教育長　坂倉　弘國

例　言

1．本書は、茨城県西茨城郡友部町小原1159番地外10筆に所在する小原遺跡の埋蔵文化財発掘調査の報告書である。

2．本調査は「県営畑地総合整備事業（一般型）小原地内北区」に伴うものであり、埋蔵文化財の記録保存を目的として実施された。

3．本調査は友部町教育委員会および同調査会指導のもと、大成エンジニアリング株式会社が実施した。

4．調査期間・調査面積は下記のとおりである。

調査期間　発掘調査　平成16年１月15日～16年３月12日

　　整理期間　平成16年１月26日～16年３月25日

調査面積　1,260㎡

5．本書の編集・執筆は友部町教育委員会および同調査会の委託を受け、大成エンジニアリング株式会社埋蔵文化財調査部（調査担当：吉田寿）が実施した。なお文責については執筆者名を文末に記した。

6．本調査において検出された諸資料は、友部町教育委員会の責任において保管・活用を図るものとする。

7．発掘作業および整理作業にあたり、次の方々・諸機関からご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表す。（敬称略）

池田晃一　川井正一　比田井克仁　枝川永男　茨城県教育庁　株式会社阿部建設

株式会社キガ

8．発掘調査・整理作業参加者は次のとおりである。

（発掘調査）

飯田　昭　小薗江とき　小薗江なみ　小薗江道代　佐藤利男　佐藤八重子　塩田昭子

塩畑勝利　鈴木正　須藤かね　中村伊重

（整理作業）

岩田修　海老原三緒里　作田美奈子　佐藤利男　佐藤友子　鈴木眞智子　長井亜紀

原孝子　松元美智子　山下範子

目　次

巻頭図版
例言
目次／挿図目次／表目次／図版目次
凡例
組織名簿
Ⅰ　調査概要
　1　調査にいたる経緯……1
　2　地理的位置と歴史的環境……1
　3　調査方法……6
　4　調査経過……7
　5　基本層序……11
Ⅱ　検出遺構
　1　遺構の分布状況……12
　2　各時代の遺構……12
　（1）　縄文時代
　　陥穴……12
　（2）　弥生時代
　　竪穴住居跡……13
　（3）　古墳時代
　　竪穴住居跡……13
　（4）　近世
　　土坑／溝／不明遺構……13
　（5）　時期不明遺構
　　土坑／不明遺構……18
Ⅲ　出土遺物
　（1）　縄文時代
　　土坑……29
　（2）　弥生時代
　　竪穴住居跡……29
　（3）　古墳時代
　　竪穴住居跡……30
　（4）　遺構外出土遺物……31
Ⅳ　まとめ……38

報告書抄録

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図（1/75000）……3
第２図　周辺遺跡分布図（1/25000）……4
第３図　調査地点位置図（1/4000）……5
第４図　グリッド設定図（1/1000）……6
第５図　遺構配置図（1/200）……9．10
第６図　基本層序……11
第７図　SK－20・21・22・23・25実測図……20
第８図　SI－２実測図……21
第９図　SI－１実測図……22
第10図　SK－１・２・３・４・５・６・７・Ｐ122実測図……23
第11図　SK－8・9・10・11・12・13・15・16実測図……24
第12図　SK－17・18・19・26・27・28・29・30実測図……25
第13図　SD－１・２、SK－14実測図……26
第14図　SD－３・４実測図……27
第15図　SX－１・３、時期不明遺構SK－24・SX－２実測図……28
第16図　SI－２出土遺物実測図……29
第17図　SK－20・SI－２・SI－１出土遺物実測図（１）……32
第18図　SI－１出土遺物実測図（２）……33
第19図　SI－１出土遺物実測図（３）……34
第20図　遺構外出土遺物実測図……35

挿　表　目　次

第１表　周辺の遺跡……4
第２表　調査工程表……8
第３表　ピット一覧表……19
第４表　遺物観察表（１）……35
第５表　遺物観察表（２）……35
第６表　遺物観察表（３）……36
第７表　遺物観察表（４）……37

図　版　目　次

図版１　1.調査区遠景　2.調査区遠景
図版２　1.調査区近景　2.調査区近景
図版３　1.調査区北部　2.調査区南部
図版４　1.調査区北部　2.調査区北部　3.調査区南部
図版５　1.作業風景　2.作業風景　3.作業風景
図版６　1.SI－1全景　2.SI－1全景　3.SI－1全景
図版７　1.SI－1遺物出土状況　2.SI－1遺物出土状況　3.SI－1遺物出土状況
図版８　1.SI－2全景　2.SI－2全景　3.SI－2炉跡土層断面使用面
図版９　1.SK－1完掘状況　2.SK－2完掘状況　3.SK－3完掘状況　4.SK－4完掘状況
5.SK－5完掘状況　6.SK－6完掘状況　7.SK－7完掘状況　8.SK－8完掘状況
図版10　1.SK－9完掘状況　2.SK－10完掘状況　3.SK－11完掘状況　4.SK－12完掘状況
5.SK－13完掘状況　6.SK－14完掘状況　7.SK－15完掘状況　8.SK－16完掘状況
図版11　1.SK－17完掘状況　2.SK－18完掘状況　3.SK－19完掘状況　4.SK－24完掘状況
5.SK－25完掘状況　6.SK－26完掘状況　7.SK－27完掘状況　8.SK－29完掘状況
図版12　1.SK－20土層断面　2.SK－20遺物出土状況　3.SK－21土層断面　4.SK－21完掘状況
5.SK－22土層断面　6.SK－22完掘状況　7.SK－23土層断面　8.SK－23完掘状況
図版13　1.SD－1完掘状況　2.SD－3完掘状況　3.SD－4西壁土層断面
図版14　1.SD－2完掘状況　2.SD－2西壁土層断面　3.SD－2東壁土層断面
図版15　1.SX－1完掘状況　2.SX－2完掘状況　3.SX－3完掘状況
図版16　SK－20･SI－2出土遺物
図版17　SI－1出土遺物
図版18　SI－1･遺構外出土遺物

凡　例

1．　本遺跡の略号はTOBである。
2．　検出遺構は下記の略号で表した。
　SI……竪穴住居跡　　SK……土坑　　SD……溝跡　　SX……不明遺構　　P……小穴（ピット）
3．　遺構実測図の縮尺は基本的に下記のとおりとし、図中にスケールを示した。
　遺構配置図……1/200　　竪穴住居跡・土坑・不明遺構実測図……1/40　　溝跡実測図……1/80
4．　調査にあたっては、10m間隔で国家座標に合わせてグリットを設定した。
5．　遺構実測図中に付した方位は、国家座標の北を示す。
6．　遺構断面図中の水糸ラインに付した数字は、標高（単位m）を表す。
7．　遺構実測図中に示した網目（スクリーントーン）は、炉の焼土範囲と土器の赤色塗彩を表す。
　焼土　　赤色塗彩
8．　ピットに関しては一覧表を掲載した。
9．　遺物実測図の縮尺は下記のとおりとし、図中にスケールを示した。
　土器類……1/3　紡錘車……1/2
10．　遺物観察表中の計測値の単位はセンチメートル（cm）である。また、（　）を付した値は推定、＜　＞を付した値は残存を表す。
11．　出土遺物の写真の縮尺は以下のとおりである。
　SK－20の図版16－１、SI－１の図版17－１～６・図版18－１～７、遺構外の図版18－21……1/3、左記以外……1/2

友部町小原遺跡発掘調査会組織名簿

会　長　……坂倉　弘國（友部町教育委員会教育長）
副会長　……白田　清郎（友部町文化財保護審議会会長）
理　事　……深谷　　忠（友部町文化財保護審議会委員）
理　事　……友部平重郎（友部町文化財保護審議会委員）
理　事　……寺内　　寛（友部町文化財保護審議会委員）
理　事　……高野　克巳（友部町文化財保護審議会委員）
理　事　……檜山　成勇（友部町文化財保護審議会委員）
理　事　……南　　秀利（友部町文化財保護審議会会員）
理　事　……鈴木　　登（友部町教育委員会教育次長）
監　事　……岡本　規雄（友部町教育委員会生涯学習課課長）
幹　事　……島田　武夫（友部町教育委員会生涯学習課課長補佐）
幹　事　……橋本　祐一（友部町教育委員会生涯学習課）
幹　事　……深澤　　充（友部町教育委員会生涯学習課）

Ⅰ　調　査　概　要

1　調査にいたる経緯

畑作地帯総合整備事業は、農業に伴なう道路・灌漑施設・農地などの生産基盤を総合的に整備することによって、作物品質の向上、生産作物の拡大、反収の増加、輸送費の削減、荷傷みの防止など、より高い生産性と品質のさらなる向上を目指している。

友部町では基本施策を第四次総合計画で６つの目標を定め、農林業の振興を図ることを目的とした産業振興プロジェクトが重点的に進められている。それに伴なう農業生産基盤の整備の一環として、友部町小原地区土地改良組合が設立され、県の指導の下、効率的な畑作農業地域を作るための整備事業が実施されている。

この整備事業の計画地は常磐線をはさんで南北に分かれている。とくに北地区には町内最大級の山王塚古墳を有する一本松古墳群があり、重要な遺跡の包蔵地である。このことから町教育委員会は平成15年３月に笠間市文化財審議委員会の能島清光氏に依頼して、小原地内区画整理（北区）計画地内の試掘の確認調査を依頼した。その結果、埋蔵文化財確認調査報告書として平成15年３月に友部町教育委員会教育長に提出された。それによると住居跡・道路跡などの遺構が検出され、土師器・弥生土器などが出土しており、弥生時代から古墳時代の集落があることが推定された。その結果、県教育委員会の指導を受けて、予定地内の発掘調査を実施することになり、町をあげて遺跡発掘調査会を組織するとともに、大成エンジニアリング株式会社に調査を委託した。これを受けて平成15年１月から２月には小原地区（南区）三本松遺跡が調査され、多大な成果が得られている（同調査会2003）。今回の小原地区（北区）小原遺跡はその後を続けて平成16年１月末から３月に実施されたものである。

（山木　久）

2　地理的位置と歴史的環境

地理的位置　友部町は茨城県のほぼ中央部に位置し、北西部を笠間市、東部を内原町・茨城町、南部は岩間町と行政域を接している。町域内の地形は、北半の丘陵地と南半の台地に区分される。前者は標高228mの金毘羅山を最高所にして北へ100～200m前後の峰が続いており、友部丘陵と呼ばれている。一方後者の台地は標高30～40mで東方へ続き、涸沼川に沿って大洗町方面にまでその広がりをのばしており、東茨城台地と呼ばれている。

笠間市の国見山付近に水源を持つ涸沼川は町域の南端を流れ、枝折川、涸沼前川を合せて東流し、涸沼にそそいでいる。これらの河川は流域に沖積地を発達させ、現在では豊かな水田が拓かれている。古代にあっても良好な可耕地として利用されたことはあきらかである。また、暖地性植物分布の北限に近い友部町では、丘陵地域の植生では照葉樹と落葉広葉樹林が混交しており、カシ類、ツバキ類、イヌシデ・コナラ群類などの樹種が確認される。これは必ずしも原始・古代の植生を反映したものではないが、留意される点である。

小原遺跡は、茨城県遺跡分布図では友部町小原1153番地外として所在が記録されており、涸沼前川が形成した沖積地にのぞむ丘陵先端部に立地する遺跡である。遺跡は東西に500mの広がりをもつ包蔵地とされているが、この西半部には２基の前方後円墳を含む古墳群があり、一本松古墳群として周知されている。

今回の調査区はこの小原遺跡の範囲の西側にあたる地点で、小原字清水1158番地外にあたっている。ここは小原遺跡の立地する丘陵平坦地とは浅い谷でへだてられた位置にあり、現在は畑地となっている。当初、小原遺跡の範囲には含まれていなかったが、この度の事業に伴ない試掘されたところ遺跡の存在が明らかになり、本調査

につながったものである。

歴史的環境　ここでは、発掘調査によって確認された弥生・古墳時代に関連する周辺の遺跡群を中心にみておきたい。

茨城県では弥生時代後期以降に遺跡の増加が見られる。ひたちなか市東中根や茨城町長岡遺跡などを代表とするもので、北部地域には東中根土器、南部地域には長岡式土器が分布し、南関東地方の久ヶ原・弥生町式期と併行する。遺跡の多くは集落跡であり、使用された土器は壷形を主体とする組成で、土器の文様には沈線・刷毛目を多用する北関東独自のものを示している。やがて北部地域では弥生末期に成立する十王台式土器に、南部地域では縄文施文の複合口縁をもつ上稲吉式土器に引きつがれていくようである。

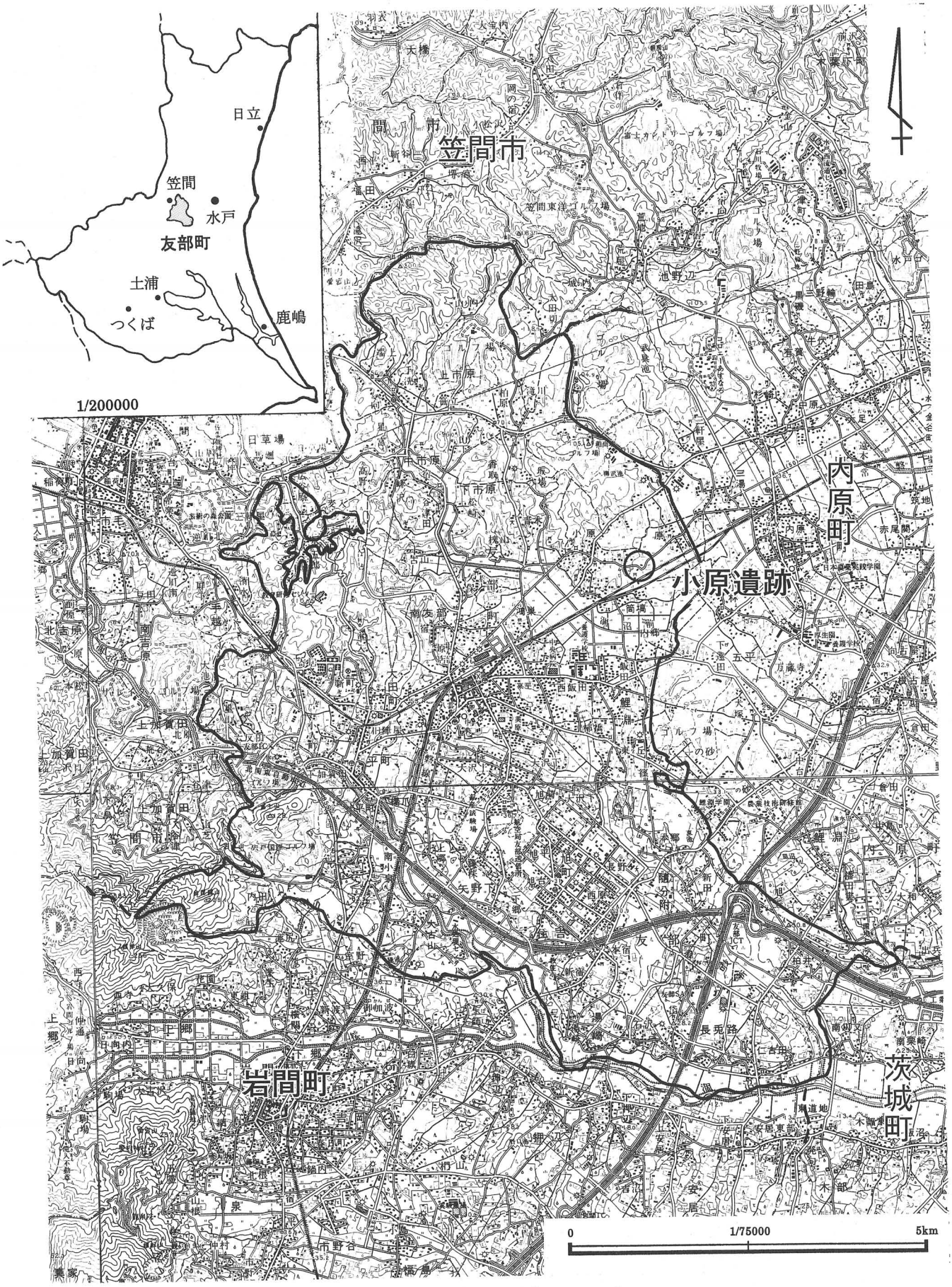
友部町内に所在する弥生時代遺跡は、1990年の町史作成の段階で、８ヶ所の散布地が知られていた。その後2000年の茨城県教育財団の調査で、久保塚遺跡ではじめて弥生後期の住居跡が発見されるにおよんで、その内容が知られるようになってきた。さらに、平成15年１月から２月に調査された小原地内南区の三本松遺跡でも15軒の住居跡が発見され、弥生後期の良好な集落跡の存在が明らかになった。今回の小原遺跡の例も含めていずれも弥生後期後半の十王台式の集落跡である。

古墳時代では、茨城県下は関東地方でも群馬・千葉県につぐ古墳、古墳群が存在しているところである。とくに常陸太田、ひたちなか、石岡周辺、そして霞ヶ浦の北岸・南岸には、古墳群が集中して形成された。茨城県における古墳の特徴は、前方後円墳の造営が７世紀代にまで引きつがれることであり、東国でも特異な事象となっている。また、方墳の発達や組合式箱式石棺の埋葬施設を多く採用するなどの点にも特色がある。

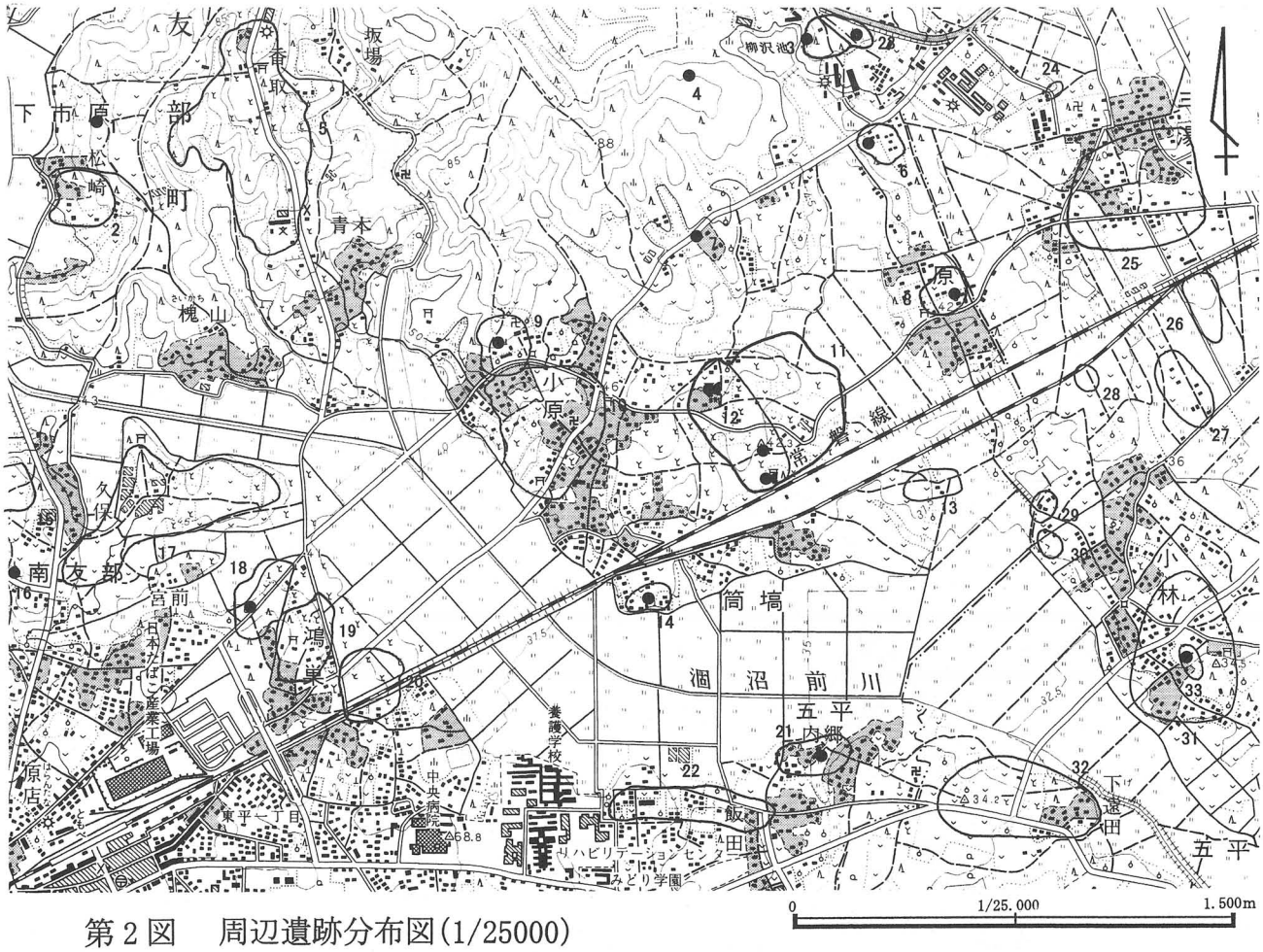
友部町の古墳は涸沼前川流域に多く集中しており、柳沢古墳群・一本松古墳群などの例が確認される。また東部に芝沼古墳群、南部に佐藤林古墳群、善九郎古墳群などが所在している。

さて、これらを造営した集団の集落跡は古墳群と対応するように存在していると思われるが、その分布は必ずしも明確ではない。町史によれば、涸沼前川、涸沼川流域の丘陵台地上にはそれぞれ10個所近くの散布地が認められており、古墳時代前・後期の集落跡が存在するとみられる。1997年からはじまった北関東自動車道関係の遺跡調査や翌年の総合流通センター事業地内の遺跡調査により、涸沼川沿いの地域で、小峯Ａ・Ｂ遺跡、仲丸遺跡、久保塚遺跡などの当該期の集落が明らかにされた。このうちとくに仲丸遺跡では、後期に属する住居跡22軒が検出され、町域では最大の集落跡となっている。前記三本松遺跡でも６世紀代を中心として14軒の住居跡が発見されている。前期に属する遺跡はこれまでは資料的にめぐまれていなかったが、今回の小原遺跡の調査で住居跡が確認されて良好な資料となった。

（服部　敬史）



第１図　遺跡位置図(1/75000)



第２図　周辺遺跡分布図(1/25000)

友部町

遺跡番号	遺跡名	種類	時代・時期			備考
			縄文	弥生	古墳	
1	四十八塚	塚				平成10年発掘調査
2	松崎台遺跡	包蔵地	○			
3	柳沢古墳群	古墳群			○	円墳7基
4	大日山古墳群	古墳群			○	
5	香取，坂場遺跡	包蔵地	○			平成6年発掘調査
6	原古墳	古墳			○	
7	喜平塚古墳	古墳			○	
8	原坪古墳群	古墳			○	
9	高寺古墳群	古墳群			○	円墳8基，昭和50年発掘調査，町指定史跡(2号墳)
10	小原城跡	城館跡				町指定史跡(本丸跡のみ)
11	小原遺跡	包蔵地	○	○	○	
12	一本松古墳群	古墳群			○	021と同地域，前方後円墳2基，円墳1基，町指定史跡
13	三本松遺跡	包蔵地		○		
14	塚崎古墳	古墳			○	
15	久保遺跡	包蔵地	○			
16	丹後塚古墳	古墳			○	
17	北平遺跡	包蔵地	○			
18	掃部塚古墳群	古墳群			○	円墳7基
19	家前遺跡	包蔵地	○	○	○	
20	田端内遺跡	包蔵地	○	○	○	

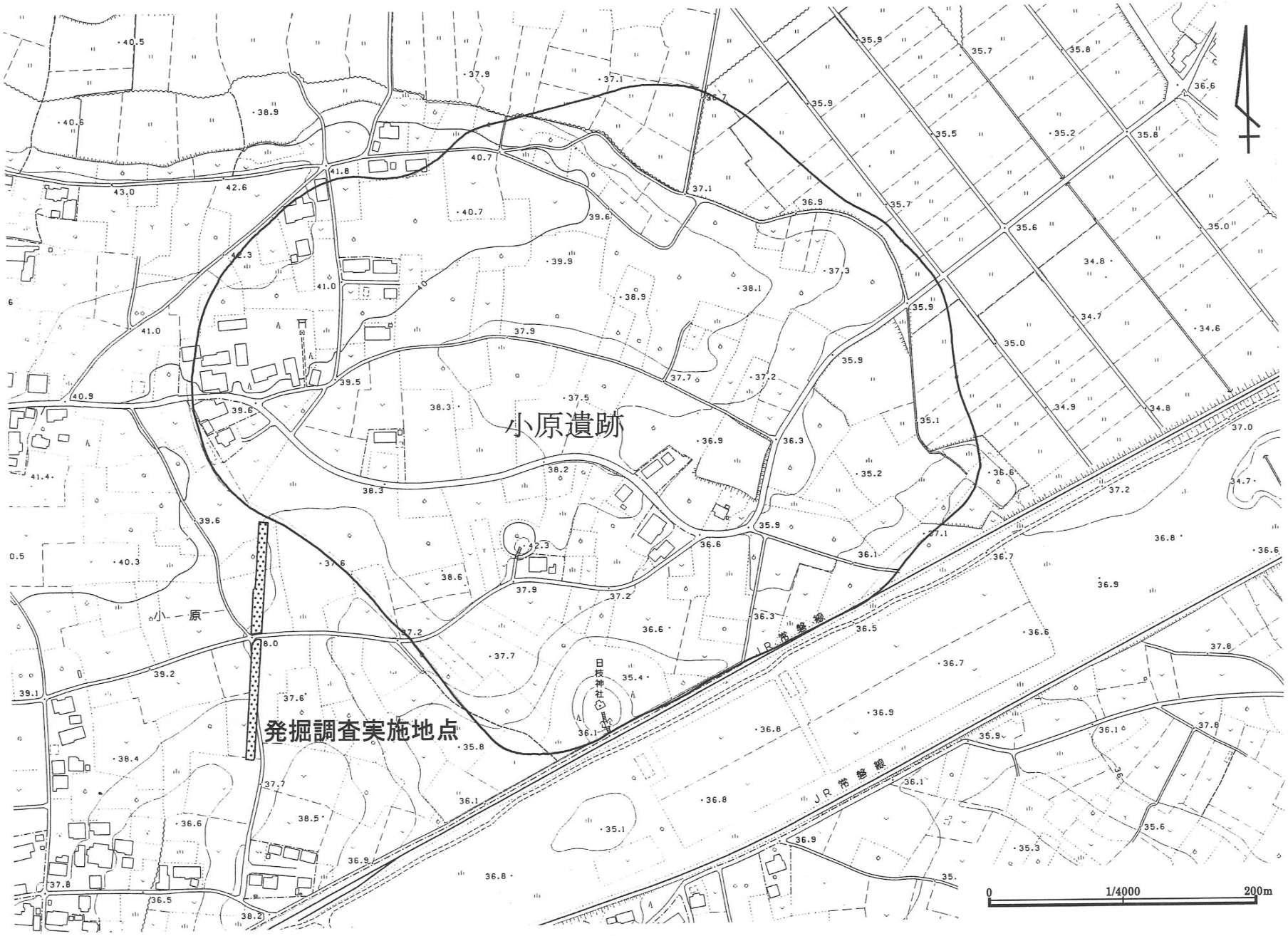
友部町

遺跡番号	遺跡名	種類	時代・時期			備考
			縄文	弥生	古墳	
21	五平古墳群	古墳群			○	円墳6基
22	五平内郷遺跡	包蔵地	○	○	○	

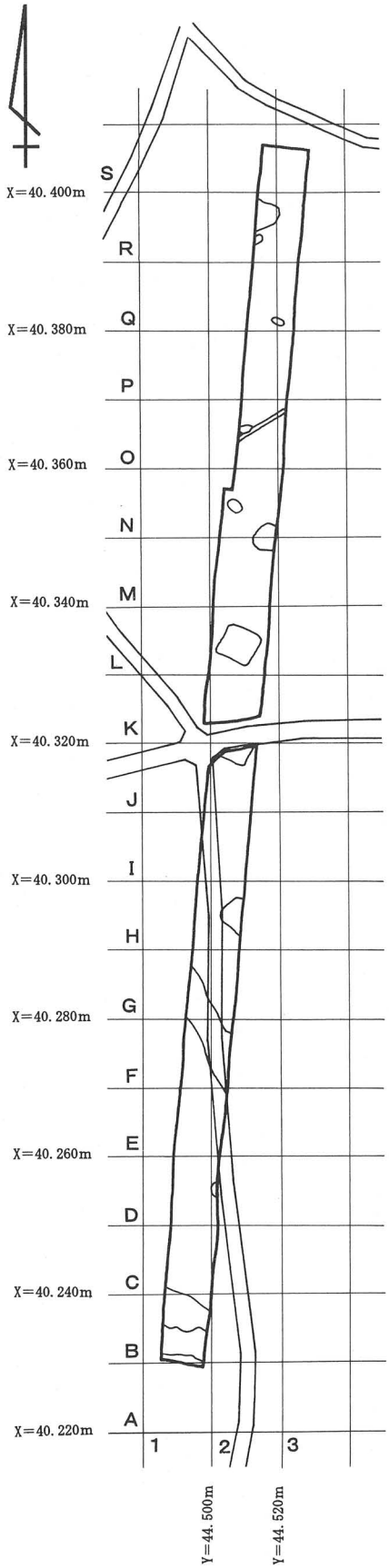
内原町

遺跡番号	遺跡名	種類	時代・時期			備考
			縄文	弥生	古墳	
23	三軒屋古墳群	古墳群			○	4基
24	宮前遺跡	包蔵地	○			
25	舞台遺跡	包蔵地	○		○	
26	西川遺跡	包蔵地	○		○	
27	竜開遺跡	包蔵地	○			
28	向山遺跡	包蔵地	○		○	
29	新道池南遺跡	包蔵地	○	○	○	
30	達中前遺跡	包蔵地	○		○	
31	小林遺跡	包蔵地			○	
32	下遠田遺跡	包蔵地	○		○	
33	大塚古墳群	古墳群			○	2基

第１表　　周辺の遺跡



第3図　調査地点位置図(1/4000)



第４図　グリッド設定図(1/1000)

３　調査方法

今回の調査対象地区は涸沼前川の沖積低地に北から舌状に延びる微高地上に立地している。発掘区は、道路域内のため南北180m東西７～８ｍの線状を呈する。現況は畑地である。表土掘削作業は大型重機により行い、試掘調査の所見にもとづきローム層直上まで掘り下げとした。その後人力による精査を行った。その結果、調査区の北東方向に高度の下がる旧地形が確認された。

調査の便宜上、調査区の南端から20mごとに区画して第１～９区とし、測量作業は適宜調査区の外形に合わせた方眼を設定して平板により行った。

遺構確認作業の結果、第６区で比較的遺存状態のよい古墳時代前期の住居址、第７区で縄文時代中期の土坑が各々調査区西壁にかかる状態で出土した。このため全容を把握すべく第５区から第７区にかけて調査区を西に1.3m拡幅し、両遺溝を完掘した。遺構番号は調査順に連番を付した。なお、住居SI、土坑SK、溝SD、不明遺構SXの略号を冠し、記述にはこの略称を用いた。

出土遺物は基本的には遺構一括とし、完形の土器・大型破片などは位置を記録して取り上げた。

写真記録は35㎜モノクロフィルムとリバーサルフィルムにより撮影を記録化した。

本遺跡の標準レベルは当遺跡に隣接する「一本松古墳」墳頂の四等三角点より標高を引き入れて使用した。

（山本　久）

4　調査経過

平成16年１月22日

表土掘削を開始。0.7バックホーにより調査区南端から北へ向かって掘り進める。南端部の地権者の委頼により、未収穫の農作物を可能なかぎり傷つけずにバケットに掘り取り、調査区横に移植する。本日120m進捗。調査区中ほど、地権者がかつて大型の土器を採取した地点で住居跡（SI-1）を検出。古墳時代前期の土器を伴うことを確認する。その他、調査区を横断する溝状遺構３条、小ピットが多数確認された。

１月23日

表土掘削終了。調査区北部は広範囲に黒色土で覆われており、前年の試掘調査によって遺構が存在するとされていたが、本日の所見では旧地形の落ち込みであることが判明した。

作業員11名、調査員２名で遺構検出作業を開始する。調査区南端より北へ向かってジョレンにより精査を進める。幅２～３ｍの溝が３条（SD-1・2・3）調査区を東西に横切るように検出され、このうちのSD-2にトレンチを入れ、溝の状況を観察する。深さ50～60㎝、平底である事を確認。覆土からみて近世以降のものだが、流れ込みと思われる弥生土器片１が出土する。調査区中部の道路にかかる住居跡（SI-2）を確認。弥生後期の土器を伴う。

１月26日

第６区西壁にかかる土坑（SK-20）覆土中より大型の縄文土器片が出土する。縄文中期のものである。

１月28日

SK-1、土器片を残した状態でセクション写真撮影。つづいて実測、土器出土状況図をとる。SD-1完掘。深さ10～15㎝ の浅い溝である。完掘状態写真撮影を行う。調査区南端をあらためて精査。ピットはNo.70まで検出される。

２月６日

SK-20、縄文土器片を土柱状に残して掘削。出土状況の写真撮影を行う。引き続き調査区内の確認面の精査を続け、ピット多数を検出する。SD-1・2の調査を開始。発掘区中央部の古墳時代住居跡（SI-1）を土層調査用のベルトを設定して発掘を開始する。覆土、床面上から土器片多数出土。住居跡南半に現代の耕作等による撹乱があるが、概ね遺存状態は良く、原形を保つ。

２月10日

SK-2発掘をはじめる。深さ1.6m、湧水のため判然としないが、もはや底に達したとみる。SI-1はベルトを残してほぼ発掘終了。土師器３個体ほど床面上に出土。セクションの写真撮影。その他作業は土坑等の調査を進める。

２月12日

重機で第５区から第７区にかけて調査区西側を1.3m程拡幅し、SI-1・SK-2の土坑プランを完全に検出。また、調査区北部の黒褐色土を重機で掘削、北東へ向かって落ち込む地形を検出する。調査区北部を精査し、SK-2類似の土坑３基（SK-21・22・23）を検出。SI－２、土坑観察ベルトを設定して発掘を開始。弥生末期の土器片少量を出土する。

２月13日

SI-1のセクション写真撮影。つづいて実測を行い、ベルト掘削してとりのぞく。この住居跡の炉跡は非常に残りが悪く痕跡を確認しづらい。ベルトセクションから位置を割り出すほかなさそうである。SI-2の掘削を終了する。柱穴２本、炉址を検出。SK-22の半裁調査を実施する。

2月16日

SI-1の住居内遺物出土状況の写真撮影。さらに測量写真撮影を行う。

2月17日

SI-1の遺物取り上げ。SI-2のセクション写真撮影。実測、ベルト除去掘削を行う。

2月19日

SK-21・23の半裁。その他土坑等調査を進める。ピット群の検出作業。

2月20日

SK-21・22・23のセクション写真撮影および実測し、調査を完了する。縄文時代の遺構群の調査終了。

2月26日

SI-1・2の住居床面を精査し、ピット、炉跡を検出。全景写真を撮影する。

SI-1は周溝らしき溝を検出したが全周しない。弥生・古墳時代の遺構群の調査終了。

3月2日

調査区が長大であるため、全景写真は南半部・北半部に分けて撮影することにし、準備に入る。午前、調査区南半部清掃・水まき、午後、南半部写真撮影。

3月3日

午前、調査区北半部清掃・水まき、午後、北半部撮影。

3月9日

ラジコンヘリによる航空撮影を行う。ラジコンヘリでも真上からの俯瞰では調査区全体は納まらないため、やはり南・北に分けて撮影する事となった。午前全調査区清掃・水まき、12：30～14：00、ラジコンヘリによる空撮。作業員の方たちの仕事は本日で終了。

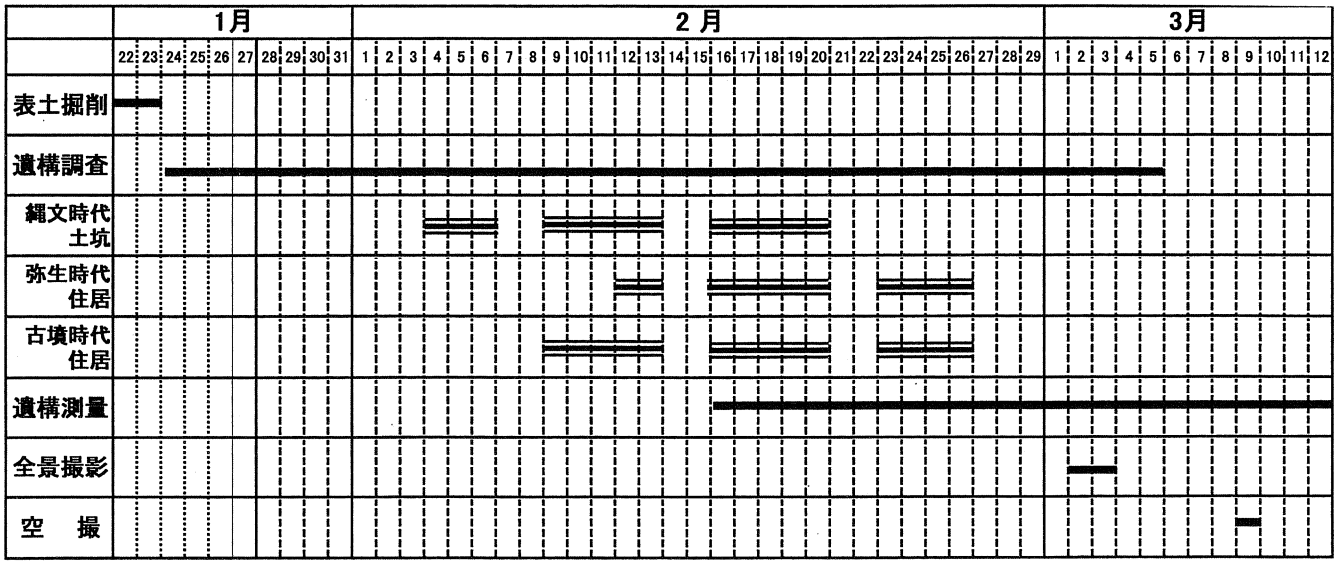
3月10日

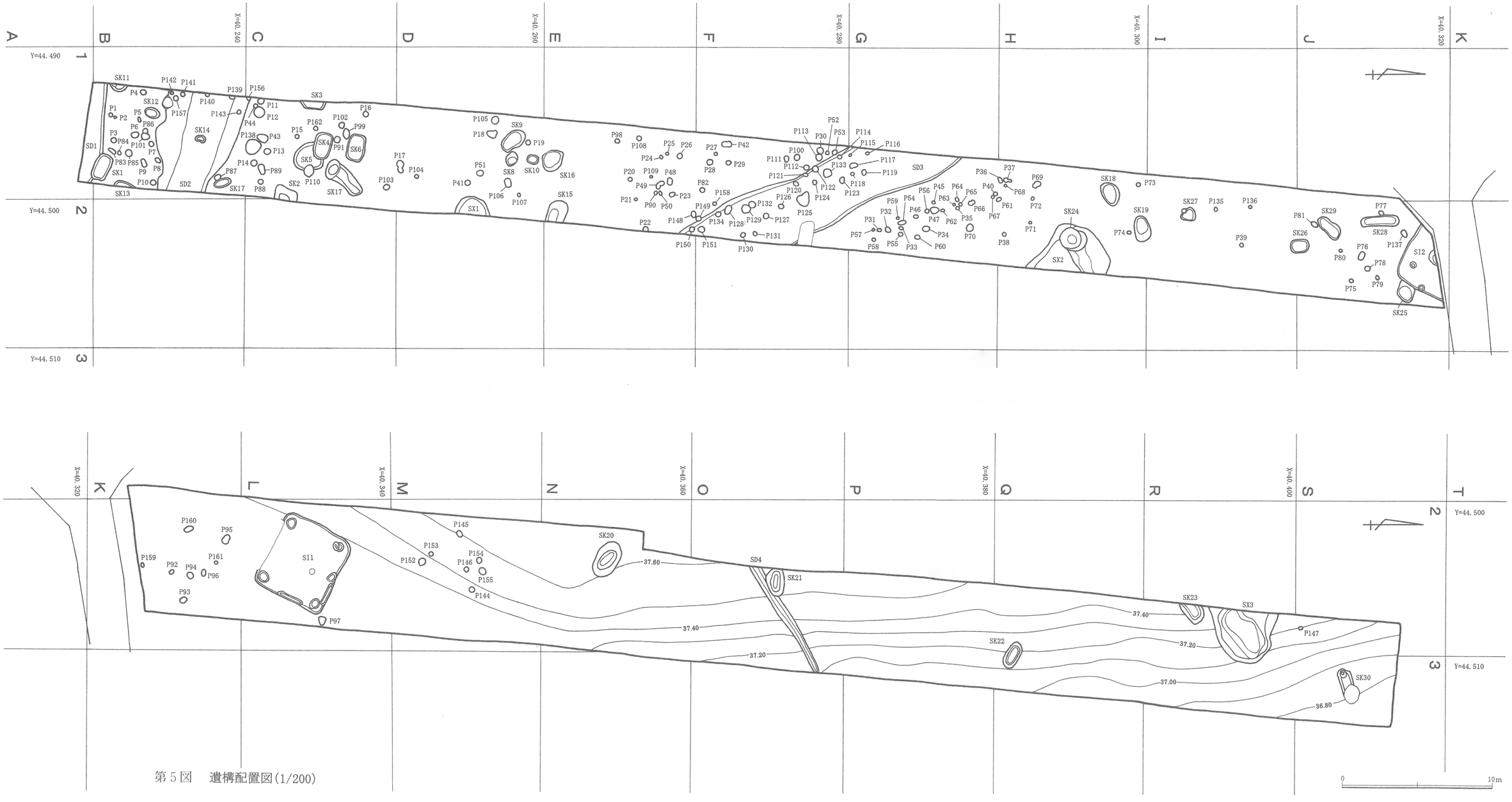
全遺構を第1区より順に平板測量開始。縮尺1/40。

3月12日

地形測量により調査区北東部が落ち込み、中央第6区付近が最も標高があり、南半部はほぼ平坦である事が確認できた。すべての遺構と調査区の測量を終え、全調査終了。

第2表　調査工程表





第５図　遺構配置図(1/200)

5　基本層序

現状では地表はほとんど平坦であるが土層の堆積は一様ではなく、基盤となるローム層の堆積状態をみると、調査区南半部はほぼ平坦、中央部でわずかに高まり、北部では北東側に傾斜する旧地形である。

土層の堆積を見ると２層以上は近現代に人為的に整地されたらしく再堆積土となっており、このことは近世の遺構が第３層上面から掘り込まれていることが壁面で観察された。

また本遺跡の調査区は耕作・道路工事等の際の撹乱が随所に認められる。近世以下遺構はすべて第６層のローム上面で検出された。

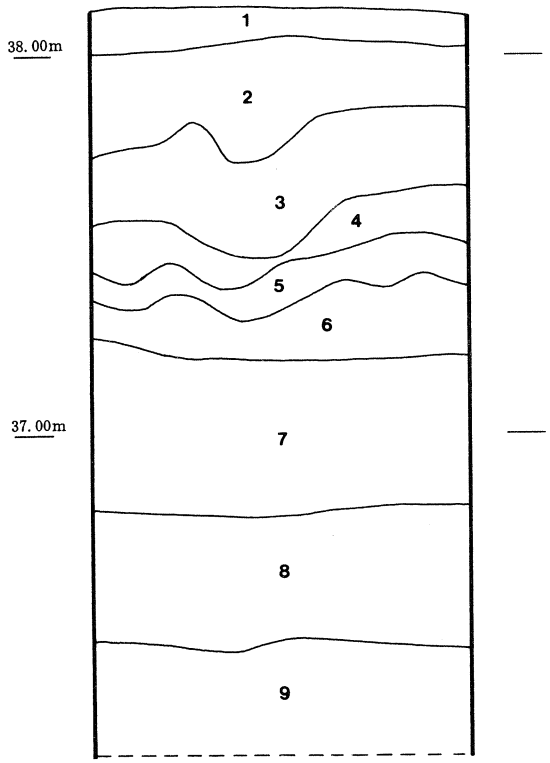
第１層は現在の耕作層であり、ほぼ平坦に現地を覆っている。

第２層は含有するローム粒・ロームブロックの密度と大きさが地点によっては変化し、近世の遺構の覆土となって現地を覆っている。下層上面の凹凸を埋めならす状態であり、人為的な堆積層と思われる。

第６・７・８層は南関東における立川ローム層に相当する風成火山灰層。

第９層はこの地域の鍵層となっている。約３万年前の赤城火山を給源とする鹿沼軽石層である。

（山本）



1 暗褐色土	表土層粘性弱く、しまりやや強い。
2 暗褐色土	粘性・しまり弱い。
3 黒褐色土	ローム粒少量含む。粘性・しまり弱い。
4 黒褐色土	ローム粒少量含む。粘性・しまり弱い。
5 暗黄褐色土	粘性・しまり弱い。
6 黄褐色ローム	
7 暗黄褐色ローム	
8 暗黄褐色ローム	9 層の粒子を少量含む。
9 黄褐色火山灰土	アワ土。

第６図　　基本層序（Ｒ区西壁）

Ⅱ　検　出　遺　構

1　遺構の分布状況

小原遺跡の西縁部にあたる今回の調査区からは、弥生時代の竪穴住居跡と、古墳時代の竪穴住居跡がそれぞれ１軒ずつ検出された。どちらも調査区のほぼ中央に分布している。また、縄文時代の陥穴４基が主に調査区北部の傾斜部分に分布している。さらに近世の溝３条がSD－４を除いて調査区南部の平坦地に所在する。同じく近世の土坑・ピットが調査区南部の平坦地に分布する。とくにピットは溝の周辺に集中しており、溝の中からも多数検出された。不明遺構・時期不明の遺構が調査区南部から３基、北部から１基検出されている。

地形は、調査区のほぼ中央部が標高37.60mとやや高くなっており、それより南部は標高37.20mを測り平坦である。調査区北部は東に向かって低くなっており、低いところでは標高36.80mを測る。それらのことから、本遺跡の西側は微高地形、東側は浅い谷部になっていると推察される。したがって、小原遺跡の中心部とは、小支谷でへだてられている可能性がある。

調査区中央より南部にかけて弥生・古墳時代の竪穴住居跡が検出されたが、遺構の遺存状態が良好とはいえず、壁高は10～15cmを測る。このことは本発掘区西側の微高地が後世の耕作によりいくぶん削平されたためとみられる。これら竪穴住居跡は微高地の東縁部にあたる地点で検出されており、そうすると、集落の本体は西側に広がっている可能性が考えられよう。

2　各時代の遺構

調査の結果、本遺跡から縄文時代の陥穴４基、縄文時代の土坑１基、弥生時代の竪穴住居跡１軒、古墳時代の竪穴住居跡１軒、近世の土坑24基、溝跡４条、不明遺構２基、ピット162基、時期不明遺構２基が検出されている。

（１）縄文時代

SK-20（第７図）

本遺構は調査区中央部よりやや北のＮ２グリッドに位置する。規模は長軸2.5m、短軸1.6m、確認面からの深さ1.58mを測る。検出された土坑上面の平面形は楕円形を呈し、断面形はロート状である。底面も楕円形で平坦である。覆土は３層に分けられる。第３層は暗褐色土を主体とし、ローム粒・ブロックを多く含み、南から流れ込むような堆積が見られた。１・２層では微量であるが炭化粒が含まれる。第１層では縄文中期の土器が出土した。土坑の形状から見て陥穴遺構と思われる。土器および検出面、覆土の状況から縄文時代中期に比定される。

SK-21（第７図）

本遺構は調査区北部のＯ２グリッドに位置する。西側は調査区外、南東部分をSD-4に切られているため正確な規模は不明だが、長軸1.8m、短軸1.15mを測るものと推定され、確認面からの深さは1.26mである。開口部および底面が楕円形、断面形はロート状を呈し、底面は平坦である。覆土は３層に分けられ、レンズ状の堆積が見られた。第３層は暗褐色土を主体とし、ローム粒・ブロックを多く含む。１・２層では微量であるが炭化粒が含まれる。検出面および覆土の状況から縄文時代中期に比定できると思われる。SK-20同様の陥穴であろう。

SK-22（第７図）

本遺構は調査区北部のＱ２・３グリッドに位置する。規模は長軸1.8m、短軸0.92m、確認面からの深さ1.0mを測る。開口部および底面が楕円形、断面形はロート状を呈し、底は平坦になっている。覆土は３層に分けられ、レンズ状の堆積が見られた。第３層は暗褐色土を主体とし、ローム粒・ブロックを多く含む。１・２層では微量であるが炭化粒が含まれる。検出面および覆土の状況はSK-21に類似することから、縄文時代中期に比定できる。

SK-23（第７図）

本遺構は調査区北部のＲ２グリッドに位置する。西側は調査区外のため、正確な規模・形状は不明だが、長軸1.75m、短軸1.21m、確認面からの深さ1.2mと推定される。開口部および底面が楕円形、断面形は逆台形を呈し、底は平坦である。覆土は３層に分けられる。第３層は暗褐色土を主体とし、ローム粒・ブロックを多く含む。１・２層では微量であるが炭化粒が含まれる。検出面および覆土の状況から縄文時代中期に比定できると思われる。

SK-25（第７図）

本遺構は調査区ほぼ中央部のＪ２グリッドに位置し、SI-2により切られる。規模は長軸1.15m、短軸1.12m、確認面からの深さ0.24mを測る。形状は不整円形を呈する。覆土は暗褐色土を主体とした単層である。粘性・しまりともに弱い。遺構の切りあい関係により縄文時代の所産と思われる。

（２）弥生時代

SI-2（第８図）

本遺構は調査区ほぼ中央のＪ２グリッドに位置し、南東部の一部分がSK-25を切っている。北西側が調査区外のため、正確な規模・形状は不明だが、現長軸4.3m、現短軸3.6m、確認面からの壁高は0.1mを測る。住居プランは残存部の形状から隅丸方形を呈すと思われる。炉はほぼ住居中央に位置すると思われるが、北西部が調査区外のため不明である。ピットは、東壁下に１個、南東隅の内側１mに１個検出された。住居覆土は５層に分けられる。このうち第１層は床面、２～５層は暗黄褐色土主体の炉覆土である。第５層は焼土粒を多く含みしまりがある。ピット１・２は暗褐色土主体の単層でしまりがある。出土した土器の年代および検出面・覆土の状況により、本遺構は弥生時代の住居跡である。

（３）古墳時代

SI-1（第９図）

本遺構は調査区ほぼ中央のＬ２グリッドに位置し、南壁が撹乱を受けている。規模は長軸5.4m、短軸4.9m、確認面からの深さ0.15mを測る。形状は隅丸方形を呈する。北壁東寄り、東壁北寄りの一部に床面から約７㎝ほど掘り込まれた周溝が検出された。炉は住居中央やや北東寄りに検出された。四隅にほぼ等間隔でピットが検出されたが、ピット２以外はどれも深さ10～15㎝ と浅い。また北壁寄りにも１個検出された。住居覆土は４層に分けられる。第４層は暗褐色土を主体とした焼土粒を中量含む炉覆土である。第１層は暗褐色土を主体とし、炭化物が少量含まれる。第２層はロームブロックを多量に含んだ褐色土である。ピット１～５の覆土は暗黄褐色土を主体とした単層だが、ピット１は焼土粒・炭化粒を微量に含む。住居の年代はピット１と２近くの床面直上で出土した土器により、古墳時代前期と認定される。

（4）近世

SK-1（第10図）

本遺構は調査区南端のＢ１グリッドに位置し、南部分をSD-1と切りあうが新旧関係は不明である。規模は長軸1.5m、短軸0.75m、確認面からの深さ0.3mを測る。形状は隅丸長方形を呈する。覆土は暗黄褐色土を主体とした単層で、ローム粒を多量に含む。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SK-2（第10図）

本遺構は調査区南部のＣ１グリッドに位置する。東側は調査区外のため正確な規模は不明である。長軸1.73m、短軸1.46m、確認面からの深さ0.54mを測ると推定されるが全体の形状はつかめない。覆土は２層に分けられる。１・２層とも黒褐色土を主体とし、粘性・しまりともに弱い。検出面および覆土の状況から近世の所産であろう。

SK-3（第10図）

本遺構は調査区南部のＣ１グリッドに位置する。西側は調査区外のため正確な規模と形状は不明である。およそ長軸1.64m、短軸0.51mと思われ、確認面からの深さは0.4mである。４層の土層を把握できるが、遺構の覆土は３・４層であり、粘性はともに強い。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SK-4（第10図）

本遺構は調査区南部のＣ１グリッドに位置し、南東部がSK-5を切っている。規模は長軸1.71m、短軸1.07m、確認面からの深さ0.28mを測る。形状は隅丸長方形を呈する。覆土は暗褐色土を主体とした単層である。ローム粒を少量含み、粘性・しまりともに弱い。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SK-5（第10図）

本遺構は調査区南部のＣ１グリッドに位置し、北東部をSK-4に切られている。またＰ122と切りあうが、本遺構の方が新しい。規模は長軸1.95m、短軸1.8m、確認面からの深さ0.11mを測る。形状は不整円形を呈する。覆土は暗褐色土を主体とした単層である。ローム粒・ブロックを多量に含み、粘性・しまりともに弱い。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SK-6（第10図）

本遺構は調査区南部のＣ１グリッドに位置する。規模は長軸1.76m、短軸1.11m、確認面からの深さ0.21mを測る。形状は隅丸長方形を呈する。覆土は暗褐色土を主体とした単層である。ローム粒を少量含み、粘性・しまりともに弱い。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SK-7（第10図）

本遺構は調査区南部のＣ１グリッドに位置する。南東部に35cm ほどの掘り込みがある。規模は長軸3.86m、短軸0.98m、確認面からの深さ0.21～0.37mを測る。形状は不整楕円形を呈する。覆土は２層に分けられる。第２層は暗黄褐色土を主体とし、南東部の掘り込みの底部で確認された。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SK-8（第11図）

本遺構は調査区南部のＤ１グリッドに位置する。規模は長軸0.97m、短軸0.76m、確認面からの深さ0.26mを測る。形状は楕円形を呈する。覆土は２層に分けられる。第１層は黒褐色土を主体とし、粘性・しまりともに弱い。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SK-9（第11図）

本遺構は調査区南部のＤ１グリッドに位置する。規模は長軸1.86m、短軸1.05m、確認面からの深さ0.29mを測る。形状は不整楕円形を呈する。覆土は４層に分けられる。第４層はロームブロックを多量に含んだ暗黄褐色土が主体であり、北へ流れ込むような堆積状況が見られた。第３層は暗褐色土を主体とし、ローム粒を多量に含む。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SK-10（第11図）

本遺構は調査区南部のＤ１グリッドに位置する。規模は長軸0.74m、短軸0.68m、確認面からの深さ0.14mを測る。形状は楕円形を呈する。覆土は２層に分けられ、１・２層とも暗褐色土を主体とする。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SK-11（第11図）

本遺構は調査区南端のＢ１グリッドに位置する。西側は調査区外のため正確な規模は不明だが、長軸1.22m、短軸0.46m、確認面からの深さ0.16～0.55mを測る。南部に50cmほどのピット状の掘り込みがある。全体の形状は不明である。土層は３層に分けられるが、遺構の覆土は第３層のみの単層であることから、本遺構と南側の掘り込みは同時期に存在したものと思われる。ローム粒・ブロックを少量含んだ暗褐色土を主体とし、粘性は強い。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SK-12（第11図）

本遺構は調査区南端のＢ１グリッドに位置する。規模は長軸1.0m、短軸0.6m、確認面からの深さ0.18mを測る。形状は楕円形を呈する。覆土は暗褐色土を主体とした単層である。ローム粒を多量に含み、粘性・しまりともに弱い。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SK-13（第11図）

本遺構は調査区南端のＢ１グリッドに位置する。東側は調査区外のため正確な規模・形状は不明だが、長軸1.0m、短軸0.3m、確認面からの深さ0.28mを測る。土層は３層に分けられるが、遺構の覆土は第３層のみの単層である。この層は暗褐色土を主体とし、ほぼ水平に堆積している。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SK-14（第13図）

本遺構は調査区南端のＢ１グリッドに位置し、SD-2の底面から検出されている。おそらくSD-2と同時期に存在したと思われる遺構である。規模は長軸0.69m、短軸0.43m、確認面からの深さ0.11mを測る。形状は不整円形を呈する。覆土は暗褐色土を主体とした単層である。ボソボソした感じで粘性・しまりともに弱い。遺構の切りあい関係および検出面、覆土の状況から近世の所産であろう。

SK-15（第11図）

本遺構は調査区南部のＥ１グリッドに位置する。東側は調査区外のため正確な規模は不明だが、長軸1.47m、短軸1.23mと推定され、確認面からの深さ0.46mを測る。全体の形状は把握できない。覆土は暗褐色土を主体とした単層であり、粘性・しまりともに弱い。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SK-16（第11図）

本遺構は調査区南部のＥ１グリッドに位置する。規模は長軸1.54m、短軸1.30m、確認面からの深さ0.21mを測る。形状は不整円形を呈する。覆土は暗褐色土を主体とした単層であり、粘性・しまりともに弱い。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SK-17（第12図）

本遺構は調査区南端のＢ１グリッドに位置する。規模は長軸1.12m、短軸0.58m、確認面からの深さ0.08mを測る。形状は楕円形を呈する。覆土は暗黄褐色土を主体とした単層であり、粘性・しまりともに強い。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SK-18（第12図）

本遺構は調査区中央部よりやや北のＨ１グリッドに位置する。中央が撹乱される。規模は長軸1.57m、短軸1.07m、確認面からの深さ0.12～0.27mを測る。形状は楕円形を呈する。覆土は暗褐色土を主体とした単層であり、ローム粒を多量に含み、粘性・しまりともに弱い。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SK-19（第12図）

本遺構は調査区中央部よりやや北のＨ２・Ｉ２グリッドに位置する。規模は長軸1.64m、短軸1.05m、確認面からの深さ0.28mを測る。形状は楕円形を呈する。覆土は暗褐色土を主体とした単層であり、ローム粒を多量に含み、粘性・しまりともに弱い。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SK-26（第12図）

本遺構は調査区ほぼ中央部のＩ２・Ｊ２グリッドに位置する。規模は長軸1.16m、短軸0.85m、確認面からの深さ0.13mを測る。形状は隅丸長方形を呈する。覆土は暗褐色土を主体とした単層であり、粘性・しまりともに弱い。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SK-27（第12図）

本遺構は調査区ほぼ中央部のＩ２グリッドに位置する。南西部にピット状の掘り込みが検出された。規模は長軸0.95m、短軸0.85m、確認面からの深さ0.27mを測る。形状は不整円形を呈する。覆土は暗黄褐色土を主体とした単層であり、ローム粒を多量に含み、粘性・しまりともに弱い。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SK-28（第12図）

本遺構は調査区中央部のＪ２グリッドに位置する。規模は長軸2.50m、短軸0.68m、確認面からの深さ0.58mを測る。形状は隅丸長方形を呈する。覆土は暗褐色土を主体とした単層であり、ローム粒を多量に含み、粘性・

しまりともに弱い。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SK-29（第12図）

本遺構は調査区中央部のＪ２グリッドに位置する。規模は長軸1.80m、短軸0.76m、確認面からの深さ0.25mを測る。形状は不整楕円形を呈する。覆土は暗褐色土を主体とした単層であり、粘性・しまりともに弱い。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SK-30（第12図）

本遺構は調査区北端のＳ３グリッドに位置する。西側にピット状の掘り込みがあり、東側は撹乱により切られる。規模は長軸1.65m、短軸0.77m、確認面からの深さ0.2mを測る。形状は不整楕円形を呈する。覆土は３層に分けられ、１～３層ともに砂を多量に含む。第３層は黄灰色土を主体とし、焼土粒を微量に含む。粘性・しまりともに強い。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SD-1（第13図）

本遺構は調査区南端のＡ１・Ｂ１グリッドに位置し、南東方向から北西へ走っている。SK-1と切りあうが新旧関係は不明である。東・西・南側は調査区外のためこの溝の正確な全体像はほとんどつかめないが東西方向に延びると思われる。発掘区内の検出部分の規模は、長さ7.0m、確認面からの深さ0.05～0.12m、溝幅は現状では不明である。土層は３層に分けられるが遺構の覆土は暗褐色土を主体とした第３層のみの単層である。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SD-2（第13図）

本遺構は調査区南端のＢ１グリッドに位置し、南東方向から北西へ走っている。東・西側は調査区外のため正確な規模は不明だが、東西に延びると思われる。発掘区内の検出部分の規模は、長さ7.28m、確認面からの深さ0.15～0.7m、溝幅3.20m～5.30mを測る。西側にピットが７個検出された。また底面からSK-14が検出されており、本遺構に伴うものと思われる。土層は４層に分けられるが、遺構の覆土は３・４層のみである。どちらも暗褐色土を主体とする。ピット139・140・156には第３層が入り込んでいることから、本遺構と同時期に存在したと思われる。遺構の切りあい関係および検出面、覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SD-3（第14図）

本遺構は調査区中央部よりやや南のＦ１・２・Ｇ１・２グリッドに位置し、南東方向から北西へ走っている。東・西側は調査区外のため正確な規模は不明だが、南東から北西方向に延びると思われる。発掘区内の検出部分の規模は、長さ12.0m、確認面からの深さ0.4m、溝幅3.8～4.2mを測る。南側にピットが23個検出されている。分布状態から本遺構に伴うと思われる。土層は４層に分けられるが、遺構の覆土は３・４層のみであり、ほぼ平坦に堆積する。どちらも暗褐色土を主体とし、ローム粒・ブロックを少量含む。第３層は粘性が強い。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SD-4（第14図）

本遺構は調査区中央部よりやや北のＯ２・３グリッドに位置し、北西部がSK-21を切っている。東・西側は調査区外のため正確な規模は不明である。南西から北東方向に延びる溝と思われる。発掘区内の検出部分の規模は、長さ8.6m、確認面からの深さ0.38m、溝幅0.40～0.75mを測る。断面形は丸みを帯びた逆台形を呈する。覆

土は２層に分けられる。どちらも暗褐色土を主体とし、第２層はロームブロックを多量に含み、粘性・しまりともに強い。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SX-1（第15図）

本遺構は調査区南部のＤ２グリッドに位置する。東側は調査区外のため正確な規模・形状は不明である。発掘区内の検出部分の規模は長軸2.42m、短軸1.18m、確認面からの深さ0.30mを測る。土層は２層に分けられるが、遺構の覆土は第２層のみの単層と考えられる。暗黄褐色土を主体とし、粘性は強い。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

SX-3（第15図）

本遺構は調査区北端のＲ２グリッドに位置する。西側は調査区外のため正確に規模・形状は不明となっている。発掘区内の検出部分の規模は、長軸4.3m、短軸3.36m、確認面からの深さ0.45mを測る。形状は不整形を呈すると思われるが、検出部分の中央部は掘り込まれておらず、深さ10～15cm ほどの環状の溝のようにも見える。土層は５層に分けられるが、覆土は４・５層のみである。第４層はローム粒・ブロックを多量に含んだ暗黄褐色土を主体とし、粘性が強い。第５層は黒褐色土を主体とし、しまりが強い。検出面および覆土の状況からみて近世のものと思われる。

（５）時期不明遺構

SK-24（第15図）

本遺構は調査区中央部よりやや南のＨ２グリッドに位置し、SX-2と切りあう。本遺構の方が新しいが明確な時期を特定できず不明となっている。規模は長軸1.65m、短軸1.30m、確認面からの深さ1.15mを測る。形状は不整円形を呈する。覆土は２層に分けられる。第２層が壁の立ち上がりに沿って底部へ流れ込むような堆積状況が見られた。暗黄褐色土を主体とし、微量だが炭化粒を含む。粘性・しまりともに強い。第１層は黒褐色土を主体とし、しまりが強い。時期不明としたが、検出面および覆土の状況からみて近世以前の遺構ではないかと思われる。

SX-2（第15図）

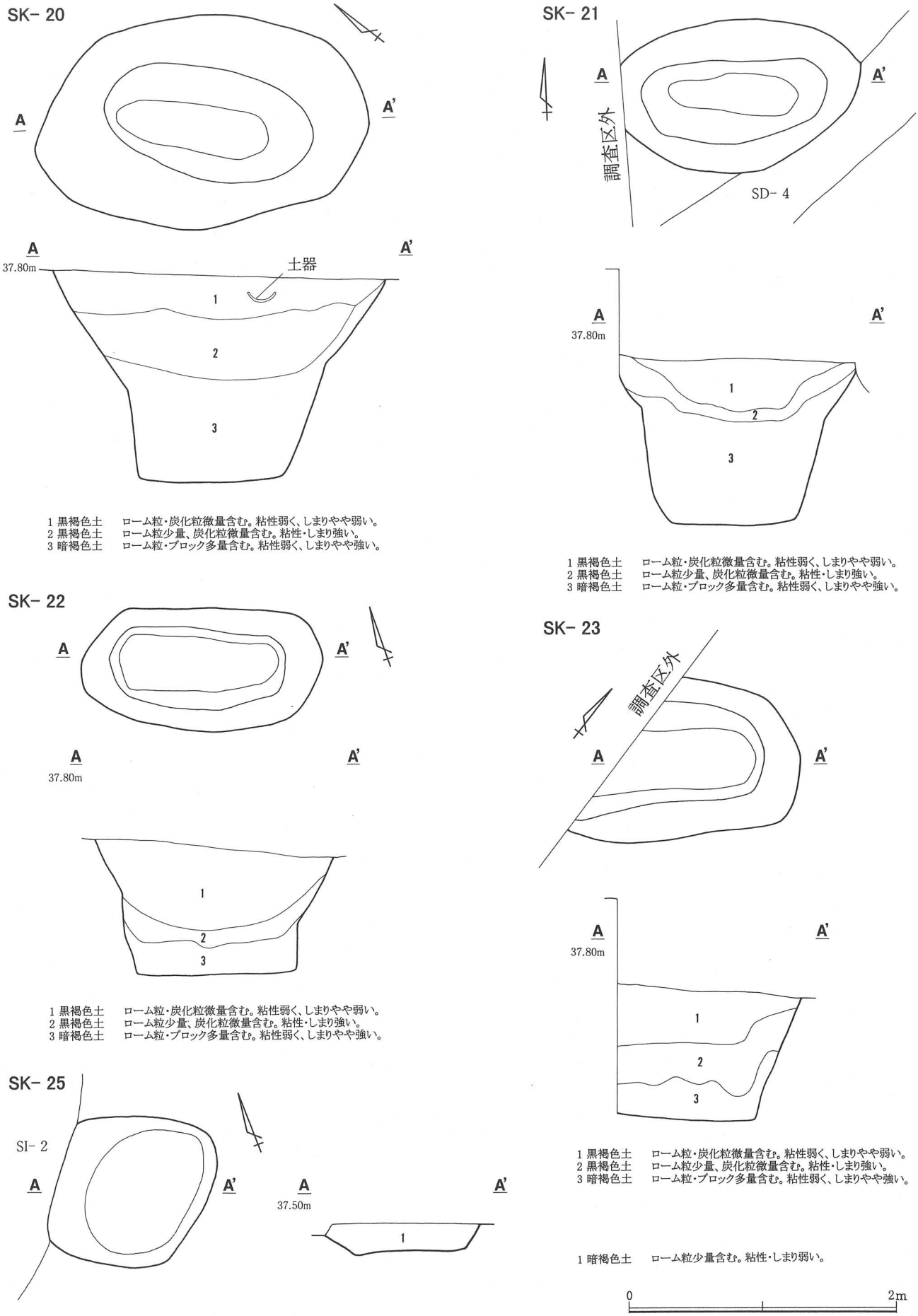
本遺構は調査区中央部よりやや南のＨ２グリッドに位置し、SK-24により切られている。東側は調査区外のため正確な規模・形状は不明だが、発掘区内の検出部分の規模は、長軸5.34m、短軸3.06m、確認面からの深さ0.4～0.68mを測ると推定される。中央よりやや北に掘り込みが見られる。全体の形状を知ることはできない。土層は７層に分けられるが、遺構の覆土は４～７層である。北側の掘り込みの底部に６・７層が堆積している。第５層は暗黄褐色土を主体とし、ロームブロックを多量に含む。時期不明としたが、検出面および覆土の状況からみて近世以前の遺構ではないかと思われる。

（萩原　明美）

第３表　ピット一覧表

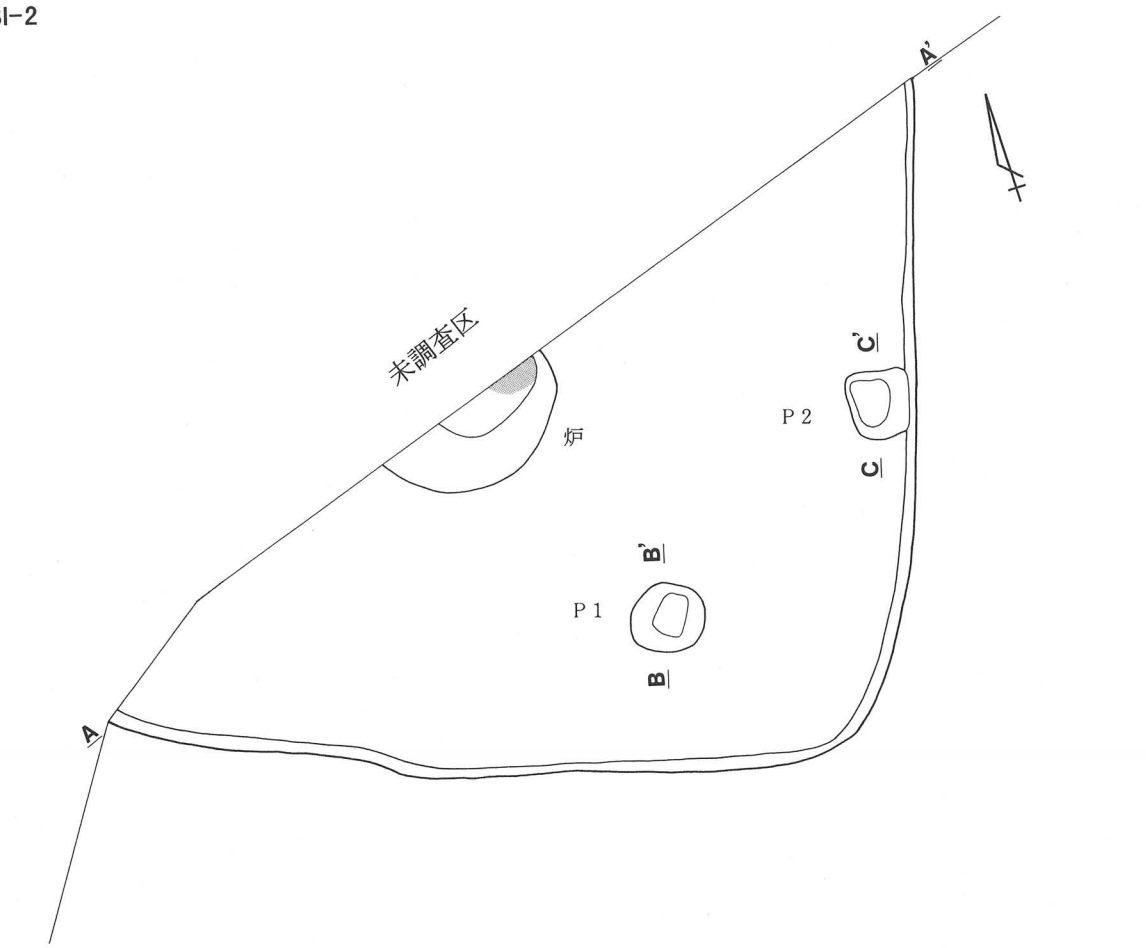
ピットNo.	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	グリッド
1	25	25	11	B1
2	20	17	26	B1
3	40	34	21	B1
4	37	35	46	B1
5	40	25	38	B1
6	42	36	34	B1
7	38	34	18	B1
8	42	27	43	B1
9	55	30	37	B1
10	38	31	74	B1
11	42	35	44	C1
12	70	68	62	C1
13	45	40	23	C1
14	40	35	16	C1
15	20	19	28	C1
16	50	50	25	C1
17	84	44	49	D1
18	62	62	27	D1
19	34	29	22	D1
20	26	23	15	E1
21	18	18	12	E2
22	30	25	22	E2
23	41	24	24	E1
24	30	18	19	E1
25	28	20	26	E1
26	43	32	11	E1
27	23	23	15	F1
28	38	35	20	F1
29	30	26	18	F1
30	55	55	44	F1
31	30	18	20	G2
32	42	33	31	G2
33	32	20	22	G2
34	45	37	25	G2
35	26	25	35	G2
36	40	20	21	H1
37	32	27	20	H1
38	28	20	20	H2
39	22	22	18	I2
40	32	30	40	G1
41	31	28	34	D1
42	75	44	44	F1
43	74	55	23	C1
44	33	30	46	C1
45	24	21	38	G2
46	30	18	33	G2
47	58	40	36	G2
48	52	37	36	E1
49	62	26	23	E1
50	30	22	20	E1
51	45	35	14	D1
52	30	30	38	F1
53	40	45	16	F1
54	60	28	25	G2
55	27	22	13	G2
56	32	28	17	G2
57	24	20	14	G2
58	28	22	17	G2
59	20	18	21	G2
60	35	23	10	G2
61	30	20	10	H2
62	30	18	28	G2
63	22	15	23	G2
64	34	18	24	G2
65	23	22	22	G2
66	46	33	30	G2
67	23	20	24	G1
68	20	13	22	H1
69	52	40	24	H1
70	50	40	16	G2
71	18	14	16	H2
72	25	1	18	H1
73	30	20	28	H1
74	22	13	24	H2
75	26	24	21	J2
76	50	36	17	J2
77	35	26	36	J2
78	38	30	14	J2
79	26	15	11	J2
80	22	22	15	J2
81	50	30	20	J2

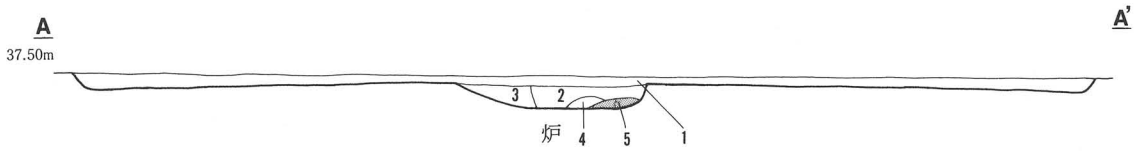
ピットNo.	長径（cm）	短径（cm）	深さ（cm）	グリッド
82	28	25	20	F1
83	58	22	21	B1
84	27	20	28	B1
85	40	40	43	B1
86	33	33	45	B1
87	40	33	24	B1
88	30	26	29	C1
89	70	40	41	C1
90	24	22	13	E1
91	45	40	22	C1
92	38	23	13	K2
93	44	34	13	K2
94	48	36	4	K2
95	60	40	8	K2
96	40	24	21	K2
97	52	36	16	L2
98	36	30	25	E1
99	72	44	34	C1
100	42	32	28	F1
101	60	42	30	B1
102	42	35	22	C1
103	44	32	11	C1
104	32	20	23	D1
105	53	51	22	D1
106	63	41	9	D1
107	20	18	14	D1
108	30	28	15	E1
109	25	25	17	E1
110	38	27	39	C1
111	42	30	25	F1
112	38	32	54	F1
113	50	35	47	F1
114	25	25	52	F1
115	22	13	25	G1
116	20	15	22	G1
117	52	34	28	G1
118	20	20	16	G1
119	32	20	28	G1
120	40	25	32	F1
121	30	20	34	F1
122	45	34	29	F1
123	46	25	17	F1
124	30	24	21	F1
125	94	60	41	F2
126	40	35	56	F2
127	37	30	49	F2
128	60	34	52	F2
129	60	53	46	F2
130	32	28	48	F2
131	26	22	45	F2
132	52	50	53	F2
133	62	50	36	F1
134	35	30	46	F2
135	22	15	14	I2
136	18	18	7	I2
137	45	25	30	J2
138	110	100	82	C1
139	43	18	33	B1
140	26	20	12	B1
141	28	26	25	B1
142	24	22	34	B1
143	23	20	32	B1
144	34	33	58	M2
145	42	33	31	M2
146	32	32	15	M2
147	27	15	28	S2
148	47	27	26	E2
149	40	32	35	F2
150	34	28	21	E2
151	42	30	39	F2
152	50	42	33	M2
153	32	27	36	M2
154	35	28	10	M2
155	50	35	43	M2
156	22	18	45	C1
157	32	32	43	B1
158	26	23	17	F2
159	30	20	16	K2
160	56	30	33	K2
161	22	18	20	K2
162	30	27	27	C1

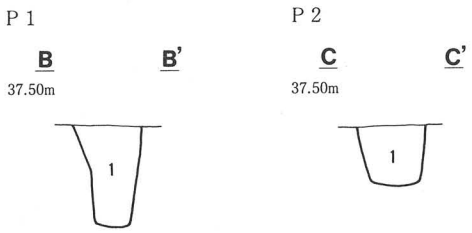


第７図　SK－20・21・22・23・25 実測図

SI-2







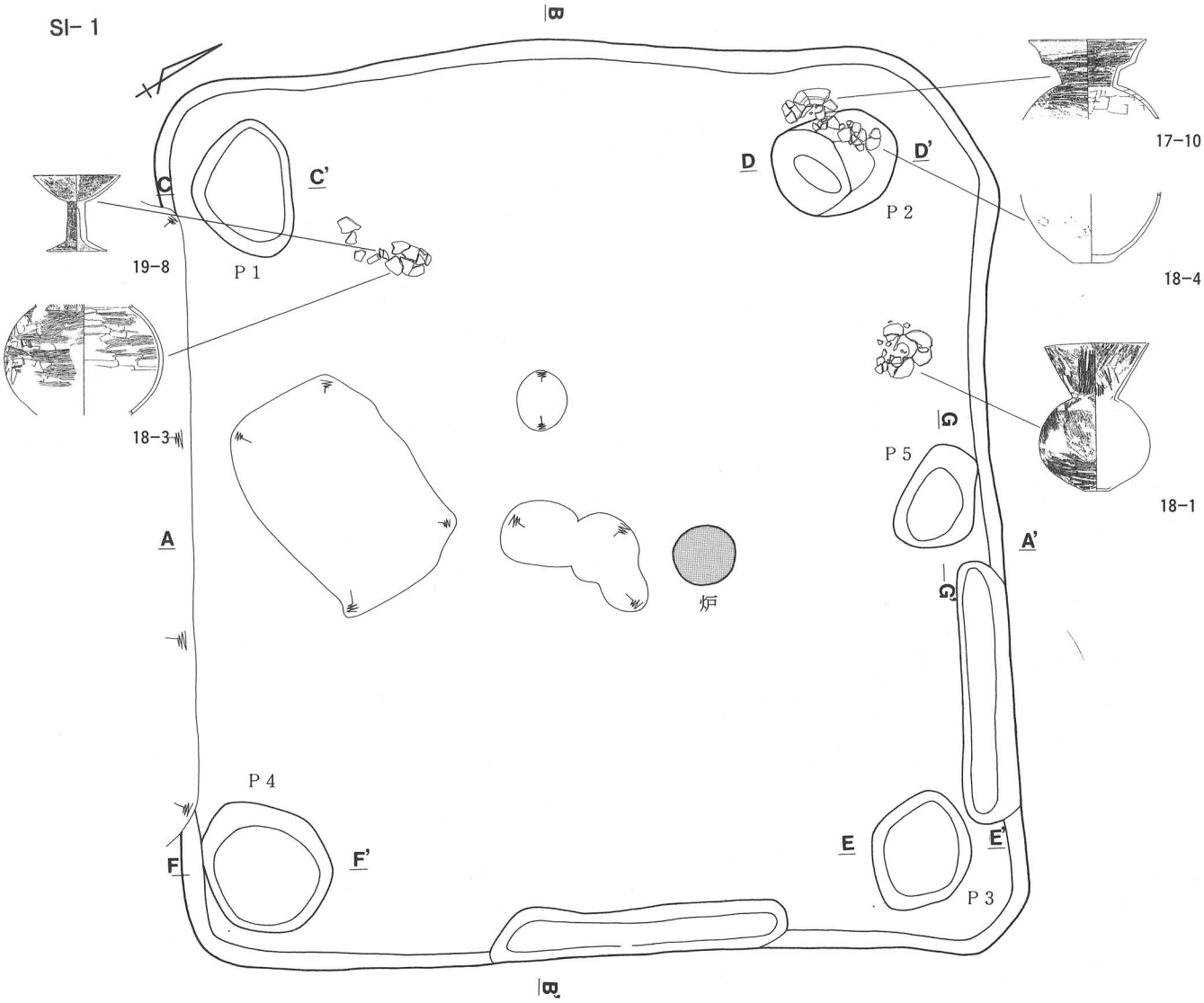
1 暗褐色土　ローム粒・焼土粒微量含む。粘性・しまり弱い。
2 暗黄褐色土　焼土粒微量含む。粘性・しまり強い。
3 暗黄褐色土　ローム粒少量、焼土粒微量含む。粘性なし、しまりやや強い。
4 暗黄褐色土　焼土粒少量含む。粘性なし、しまりやや強い。
5 暗黄褐色土　焼土粒多量含む。粘性なし、しまり強い。

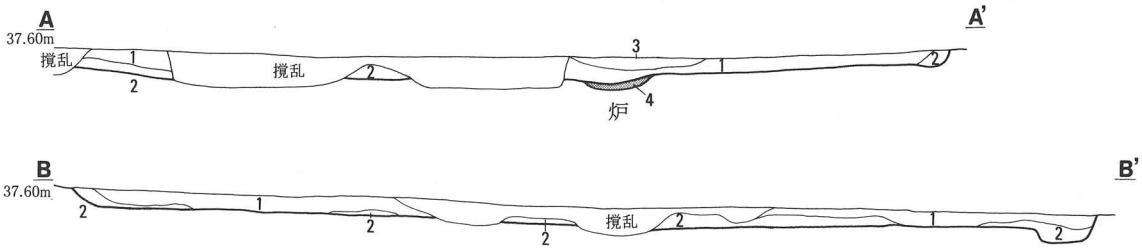
P1
1 暗褐色土　ローム粒少量含む。粘性弱く、しまり強い。

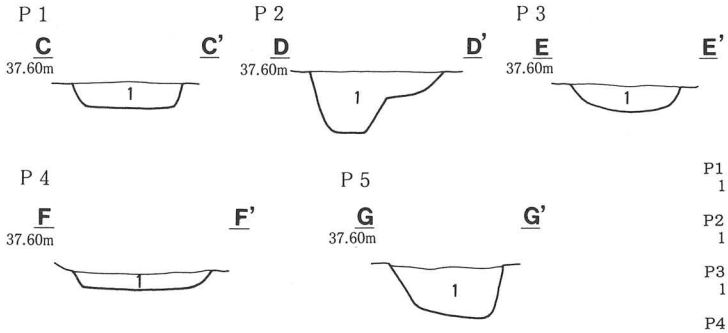
P2
1 暗褐色土　ローム粒少量含む。粘性弱く、しまり強い。

0　2m

第8図　SI−2 実測図







1 暗褐色土　ローム粒・炭化物少量含む。粘性弱い。
2 褐色土　ロームブロック多量含む。粘性やや強く、しまり強い。
3 暗褐色土　焼土粒少量含む。粘性・しまりなし。
4 暗褐色土　焼土粒中量含む。粘性なし、しまり弱い。

P1
1 暗黄褐色土　ローム粒少量、焼土粒、炭化粒微量含む。粘性、しまり強い。

P2
1 暗黄褐色土　ローム粒・ブロック少量含む。粘性・しまり強い。

P3
1 暗黄褐色土　ローム粒少量含む。粘性・しまり強い。

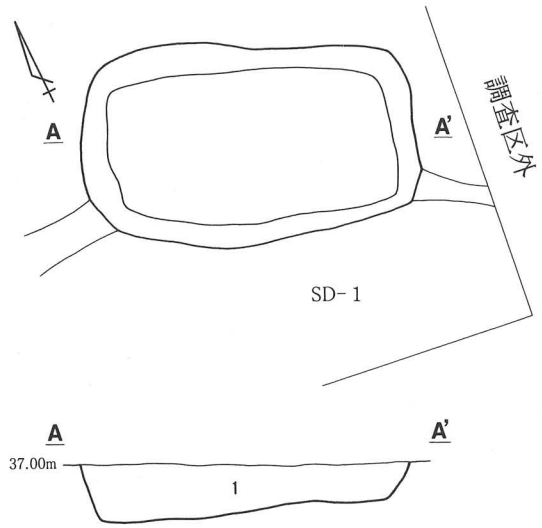
P4
1 暗黄褐色土　ローム粒・ブロック少量、炭化粒微量含む。粘性・しまり強い。

P5
1 暗黄褐色土　ローム粒・ブロック少量含む。粘性・しまり強い。

0　2m

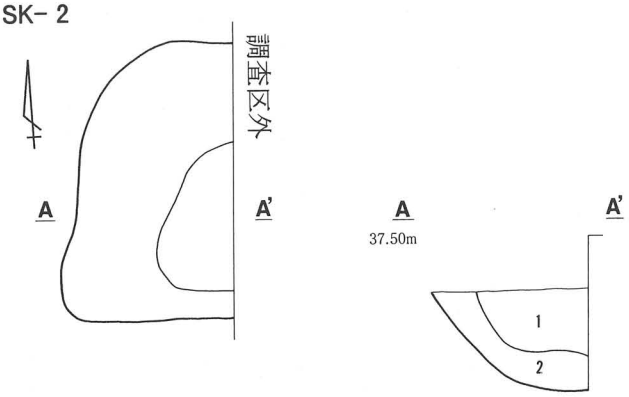
第9図　SI−1 実測図

SK－1



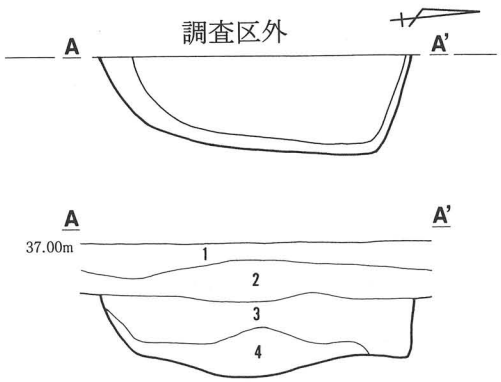
1 暗黄褐色土　暗褐色土少量、ローム粒多量含む。粘性・しまり強い。

SK－2



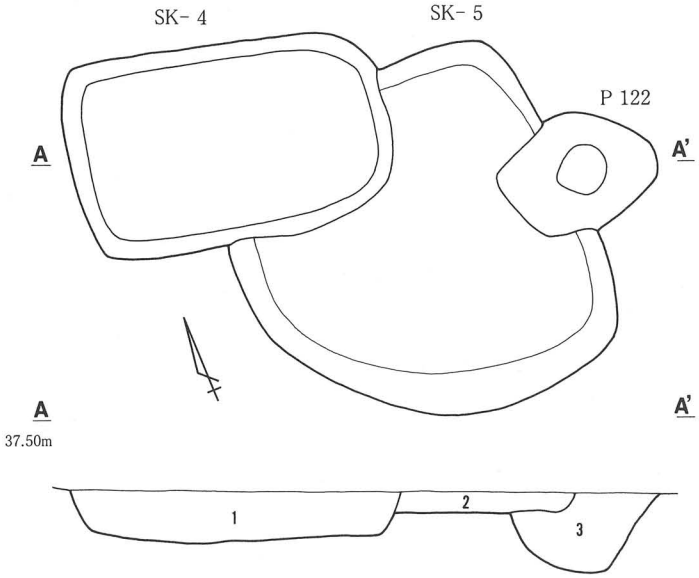
1 黒褐色土　ローム粒微量含む。粘性なく、しまり弱い。
2 黒褐色土　ローム粒・ブロック少量含む。粘性なく、しまり弱い。

SK－3



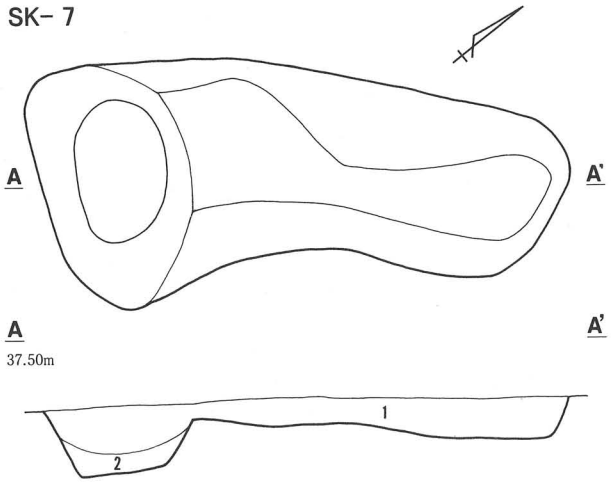
1 暗褐色土　ローム粒微量含む。粘性弱く、しまり強い。
2 暗褐色土　ローム粒微量含む。粘性弱く、しまりやや強い。
3 暗褐色土　ローム粒・ブロック少量含む。粘性強く、しまり弱い。
4 暗黄褐色土　粘性強く、しまりやや弱い

SK－4・5・P122



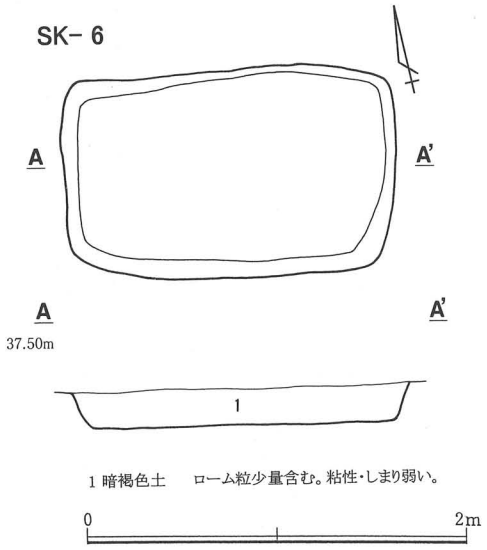
1 暗褐色土　ローム粒少量含む。粘性・しまり弱い。SK4覆土。
2 暗褐色土　ローム粒・ブロック多量含む。粘性・しまり弱い。SK5覆土。
3 暗黄褐色土　ローム粒多量含む。粘性強く、しまりやや強い。P122覆土。

SK－7



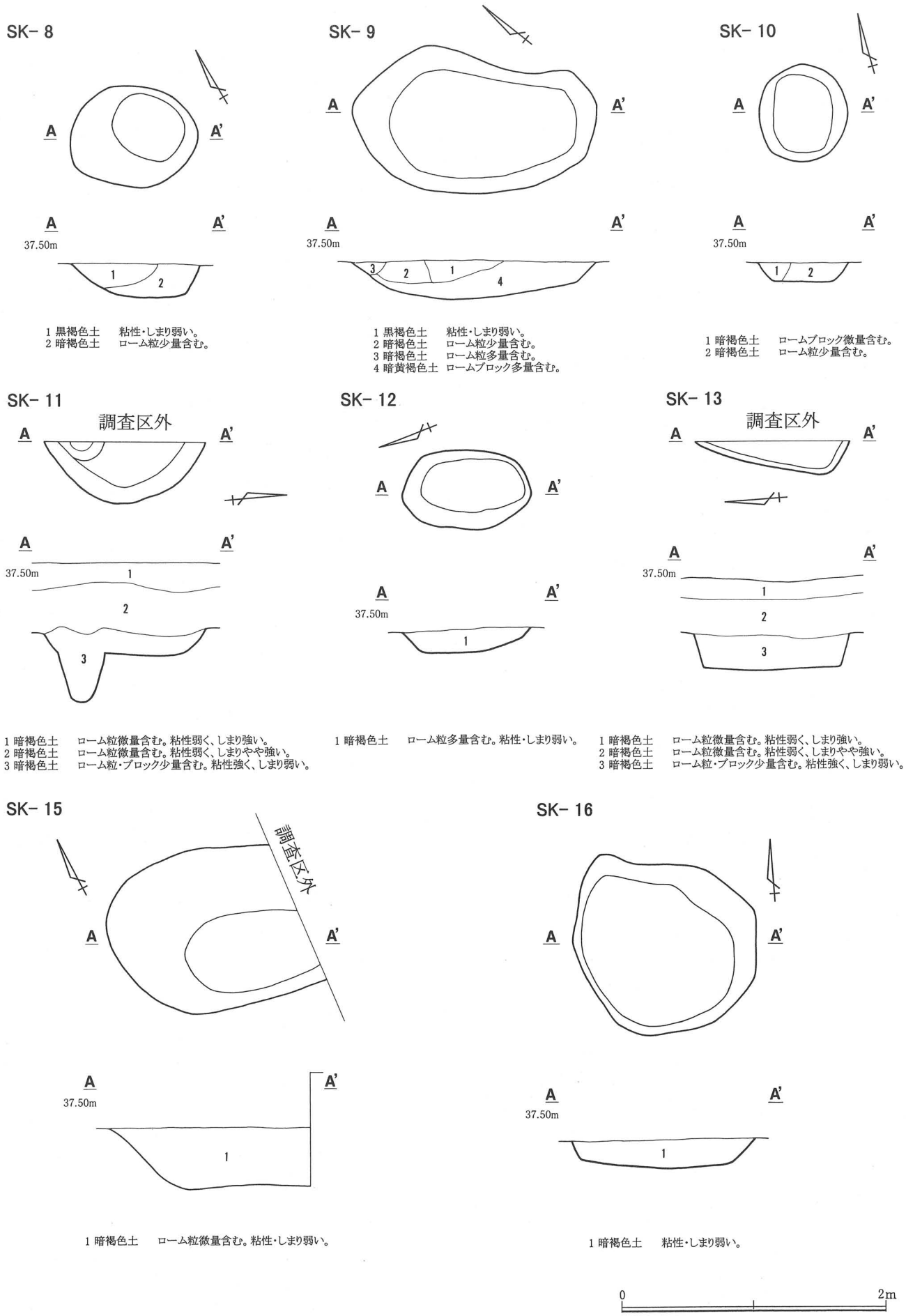
1 暗黄褐色土　ローム粒少量含む。粘性強く、しまりやや強い。
2 暗褐色土　ローム粒少量含む。粘性・しまり弱い。

SK－6

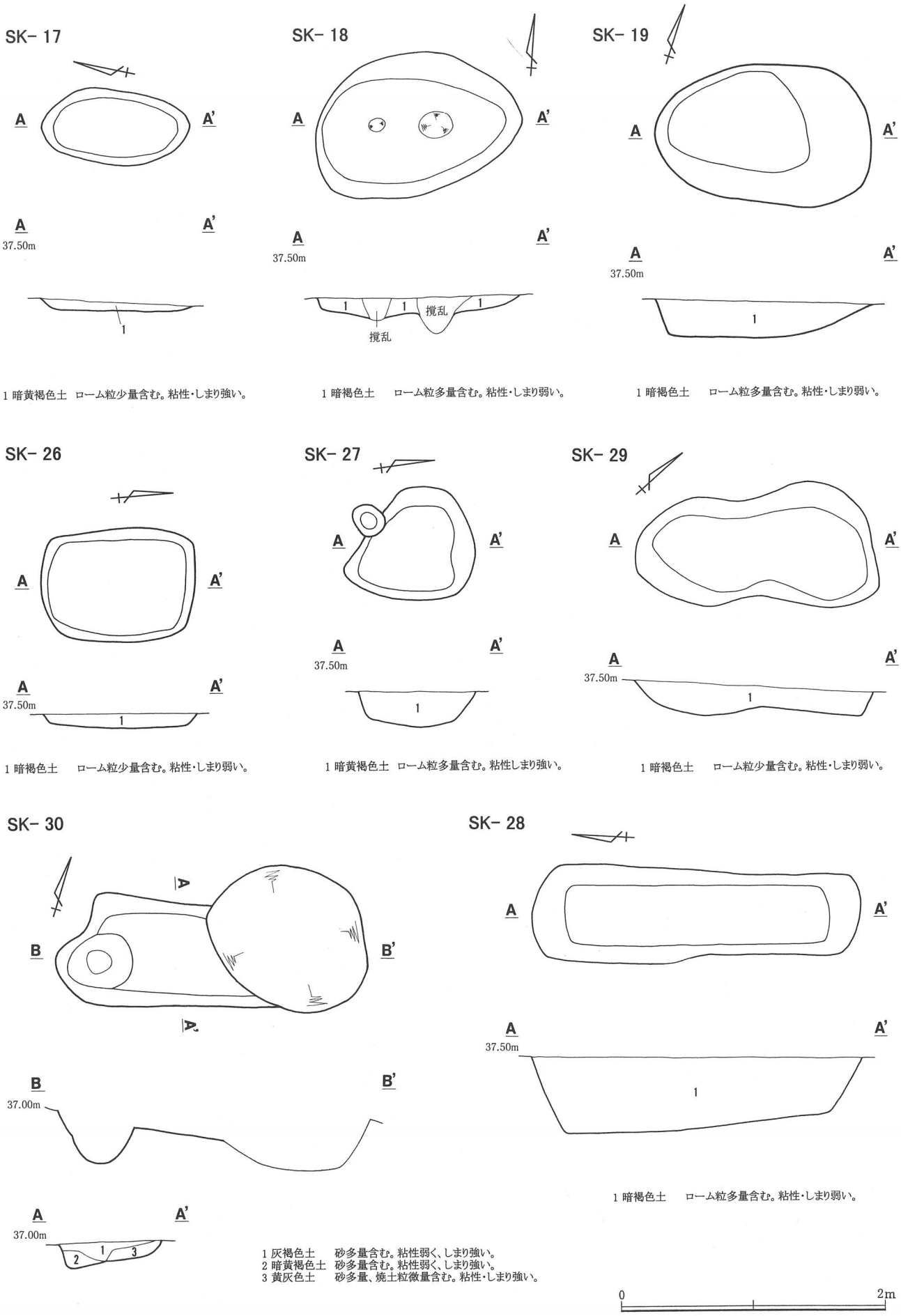


1 暗褐色土　ローム粒少量含む。粘性・しまり弱い。

第10図　SK－1・2・3・4・5・6・7・P 122 実測図

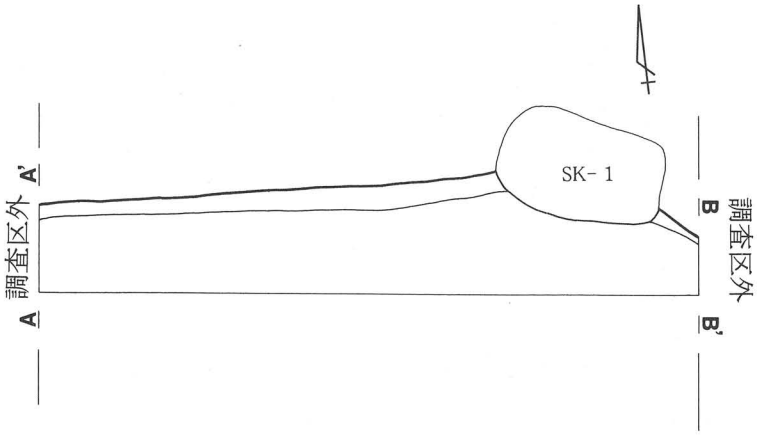


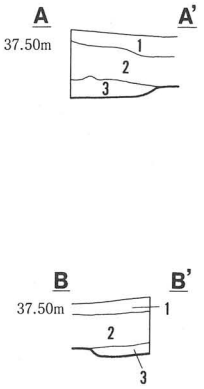
第11図　SK－8・9・10・11・12・13・15・16 実測図



第12図　SK－17・18・19・26・27・28・29・30 実測図

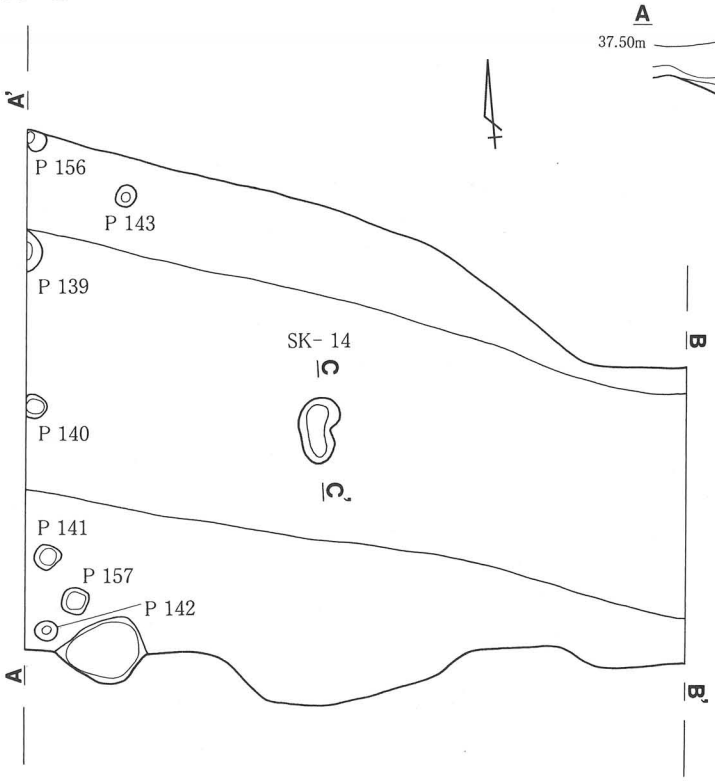
SD－1

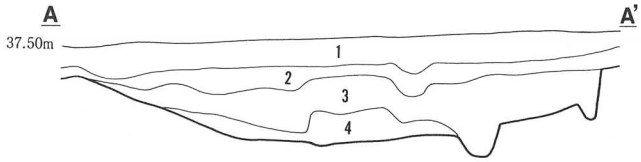


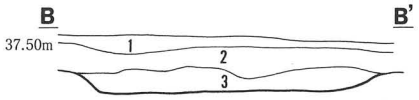


1 暗褐色土　ローム粒微量含む。粘性弱く、しまり強い。
2 暗褐色土　ローム粒微量含む。粘性弱く、しまりやや強い。
3 暗褐色土　ローム粒・ブロック少量含む。粘性強く、しまり弱い。

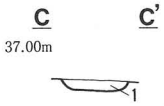
SD－2



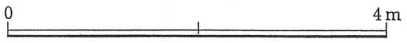




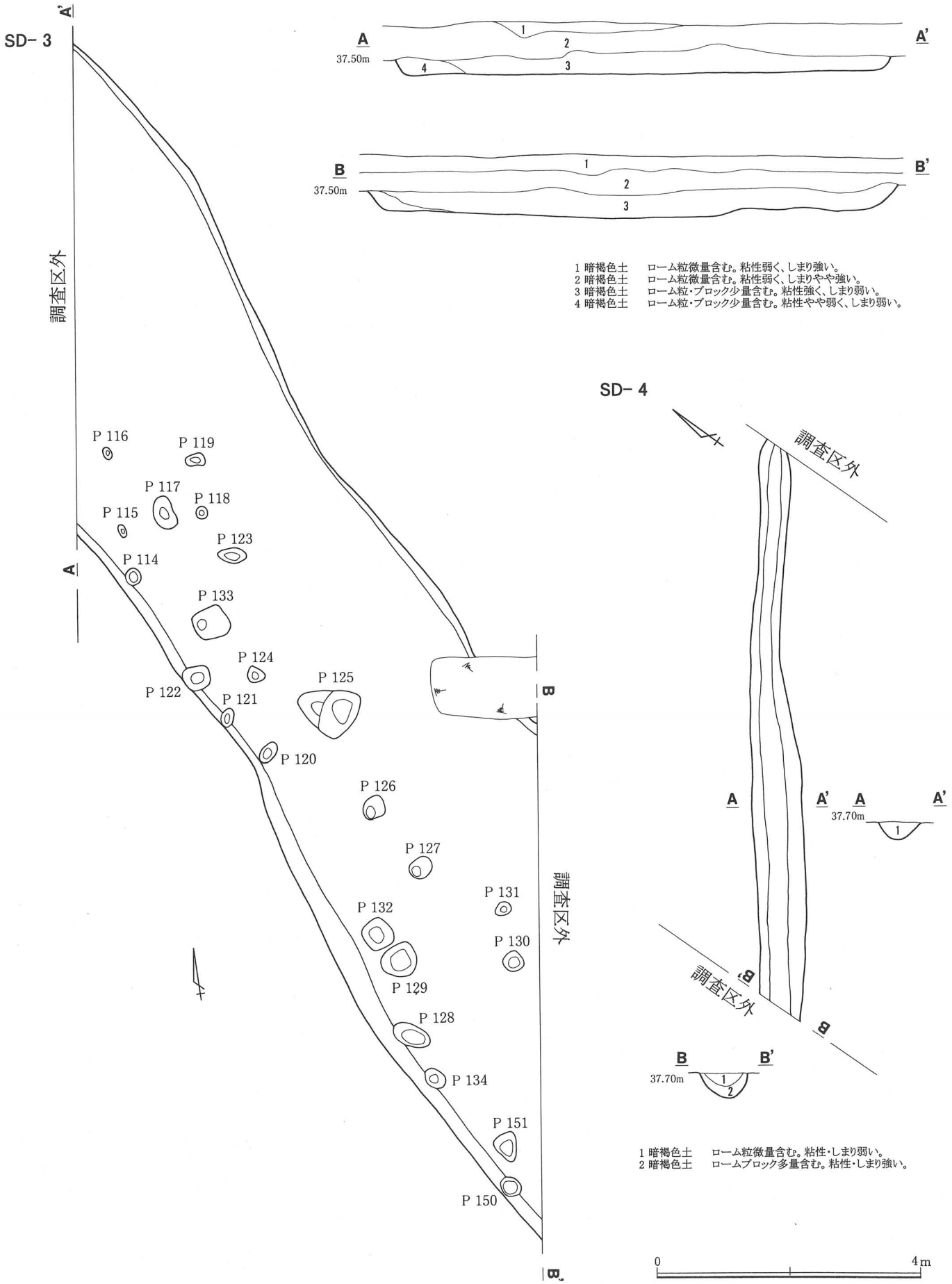
1 暗褐色土　ローム粒微量含む。粘性弱く、しまり強い。
2 暗褐色土　ローム粒微量含む。粘性弱く、しまりやや強い。
3 暗褐色土　ローム粒・ブロック少量含む。粘性強く、しまり弱い。
4 暗褐色土　ローム粒・ブロック少量含む。粘性やや弱く、しまり弱い。



1 暗褐色土　ローム粒少量含む。粘性やや弱く、しまり弱い。ボソボソしている。

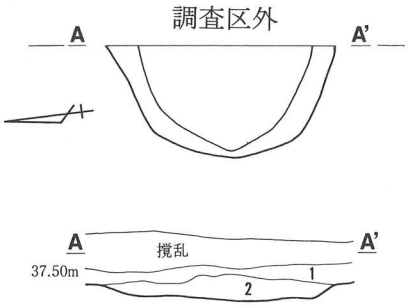


第13図　SD－1･2、SK－14 実測図



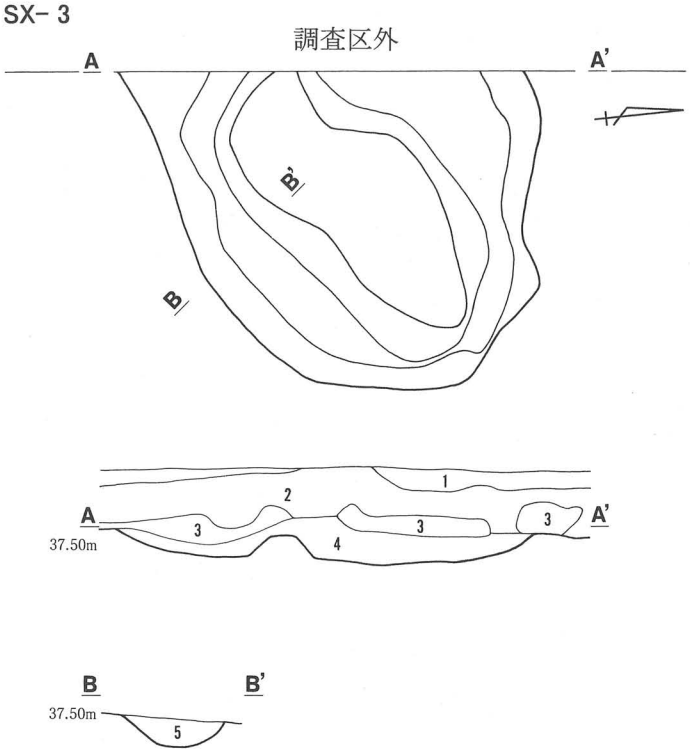
第14図　SD－3・4 実測図

SX－1



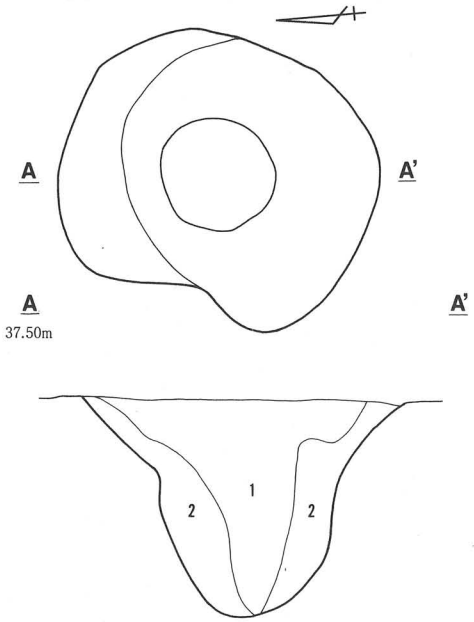
1 暗褐色土　ローム粒微量含む。粘性弱く、しまりやや強い。
2 暗黄褐色土　粘性強く、しまりやや弱い。

SX－3



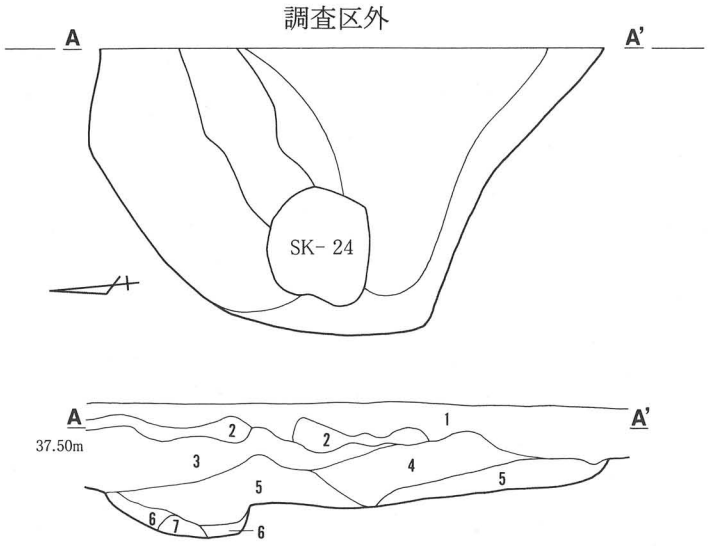
1 暗褐色土　粘性弱く、しまりやや強い。表土。
2 暗褐色土　ローム粒微量含む。粘性・しまり弱い。
3 暗褐色土　ローム粒少量含む。粘性・しまりやや強い。
4 暗黄褐色土　ローム粒・ブロック多量含む。粘性強く、しまり弱い。
5 黒褐色土　ローム粒微量含む。粘性弱く、しまりやや強い。

SK－24



1 黒褐色土　ローム粒微量含む。粘性なく、しまり強い。
2 暗黄褐色土　ローム粒少量、炭化粒微量含む。粘性・しまり強い。

SX－2



1 暗褐色土　粘性弱く、しまり強い。表土。
2 暗褐色土　ローム粒微量含む。しまりやや弱い。
3 暗褐色土　ローム粒少量含む。しまりやや弱い。
4 黒褐色土　ローム粒微量含む。粘性なく、しまり強い。
5 暗黄褐色土　ロームブロック多量含む。
6 暗黄褐色土　ローム粒・ブロックを少量含む。粘性強い。
7 黒褐色土　粘性強く、しまりやや弱い。

0　2m　　0　4m

第15図　SX－1・3、時期不明遺構 SK－24・SX－2 実測図

Ⅲ　出　土　遺　物

本調査によって出土した遺物のほとんどは土器で、それらは住居跡・土坑及び発掘区内から出土しているが、量的には多くない。ここではこれらの遺物について時期別に概観する。なお、その他に特記すべき遺物として、弥生時代後期のSI-2から出土した紡錘車がある。

（1）縄文時代

SK-20　出土土器（第17図1）

土坑の覆土上層から1点のみ出土した。口縁部から胴部にかけて器形を復元できる、口径28cm、現高20cmを測るキャリパー状をなす深鉢形土器の大形破片である。口縁部文様帯は隆帯による渦巻き文で区画されており、区画内には横位のＲＬ縄文が充填されている。縄文時代中期後半の加曾利ＥⅡ式前半に比定される深鉢である。胴部には同じ原体のＲＬ縄文を縦位に施している。胎土には金雲母を多く含んでいる。

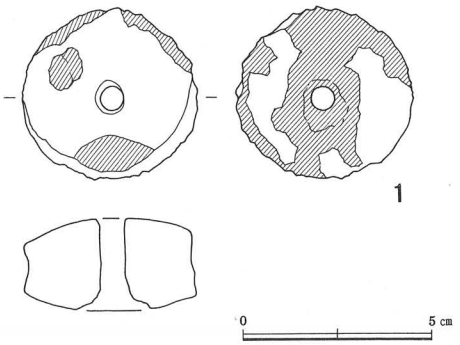
（2）弥生時代

SI-2　出土土器・紡錘車（第16図1・第17図2～9）

弥生土器の壷・甕の破片が床面から出土している。いずれも北関東地方の弥生時代後期十王台式の土器である。生活道路のために住居面積の6割方が未調査となったため、量としてはごく限られているが、特徴的なものを図示すると次のようである。

2は口唇部・口縁部にＬＲの縄文が施され、口縁下にイボ状突起が貼り付けられている上稲吉式で、複合口縁を呈する。3は口唇部にヘラ状工具によるキザミが施され、頸部にヘラ状工具により押圧された隆帯が2条めぐらされている。隆帯の下は3本の櫛歯状工具で縦区画され、区画内も櫛歯状工具で施文されている。4は壷形土器の頸部破片である。3本の櫛歯状工具で縦区画され、区画内には波状文が施されている。5～7は胴部破片で、5も壷形土器で6も同一個体と思われる。胴部上位は4本の櫛歯状工具により縦区画されており、区画内施文の横位には波状文、縦位にはＹ字状に施されている。胴中位は付加条2種（付加1条）の縄文が施され、羽状構成をとる。下位には逆に1種の縄文が施文されている。7も付加条2種（付加1条）の縄文が施されている。8は2と同一個体かＬＲとＲＬの縄文が羽状構成をとっている。9は底部付近の破片で、上部の破損部は粘土帯の接合からの剥脱による。平底で胴部は外傾しながら立ち上がる。付加条2種（付加1条）の結節縄文が施され、羽状構成をとっている。底部はヘラ削りで整形している。

第16図1は土製の紡錘車である。表裏内外に剥脱箇所が目立ち（スクリーントーン表示）、側面ともに施文はないと思われる。形状は側面に浅い凹みが巡り、糸巻形を呈している。最大径4.4cm、最大幅3.9cm、最大厚2.4cm、中央に直径0.65cm孔が開けられている。側面には撚りをかけた糸を更に巻きつけた痕跡は見られない。紡錘車の形状は、断面形が長方形になるものが多く、台形になるもの、中央部が膨らみ断面形が弧状を描くものがある。また、特殊な形態としてソロバンの玉状や当遺跡



第16図　SI-2 出土遺物実測図

から出土した糸巻形をしたものがある。これらは製作するのも複雑で大量生産には向かず、糸を巻きとるにも機能的な形状ではないため、何か明確な意図により製作されたと思われる。

（3）古墳時代

SI-1　出土土器（第17図10・11・第18図1～13・第19図1～20）

土師器・弥生土器が出土している。土師器は古墳時代前期の五領式、弥生土器は弥生時代後期の十王台式である。図示した遺物土師器36点、弥生土器8点である。弥生土器は本住居に伴うものではなく、覆土に流れ込んだ資料である。そのため便宜的に（4）遺構外（第20図1～8）で扱うこととする。

第17図10・11・第18図1～13は土師器の壷である。第17図10は胴部上位から口縁部にかけての破片である。北西偶から出土した。球形の胴部は頸部ですぼまり、強く屈曲してほぼ垂直に立ち上がる。口縁部は一度外反し、この部分で稜を作った後、さらに長く上方へのびている。口縁端部は尖り気味である。全体的に丁寧なヘラ磨きがされ、胎土・焼成ともに良好である。内外面は赤色塗彩が施されている。いわゆる二重口縁壷として分類される。第17図11も口縁部破片である。口縁部は外傾して立ち上がり、口縁は折り返しで成形され、内外面に赤色塗彩がされている。第18図1は口縁部と胴部が一部欠損しているがほぼ完形である。北東壁のやや北側の床面から出土した。底部は小さな平底で、胴部はやや潰れた球形を呈している。中央より下位に最大径をもつ。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾しながら高くのびる。器面は全体的に丁寧なヘラ磨きが施され、胎土・焼成ともに良好である。2は底部が欠損しているが、口縁・胴部3/4ほどの資料である。胴部は球形で内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾して立ち上がり、口唇部はやや外反する。口縁部から肩部にかけてはヘラ磨きが施されているが、胴部中位以下ヘラ削り痕を残す。内面は外面よりやや太目のヘラ磨きで整形されている。3は口縁部・底部が欠損する大形の壷である。南北壁南側の床面から出土した。胴部は楕円形で内彎して立ち上がり、中位に最大径をもつ。器面は全面ヘラ削り後、ヘラ磨きがされているが、一部ヘラ削り痕を残す。4は底部から胴部にかけての破片である。北西偶の床面から出土した。底部は平底で、胴部は内彎して立ち上がる。5～12は底部破片である。これらはすべて平底で、胴部は外傾して立ち上がる。7は底部に木葉痕を残し、10は底部の張り出させた台形底であり、11同様小形壷となるものである。13は胴部下位破片である。外面にゆるい段をもち、外傾して立ち上がる。

第19図1～3は土師器の坩である。1は底部から口縁部にかけての破片で、底部は3㎜ほど凹んでいる。胴部は内彎して、口縁部は内彎気味に立ち上がった後、口唇部にかけてわずかに外傾する。胴部内外面に赤色塗彩が施されている。2は胴部破片である。内彎して立ち上がり、胴部下位に最大径をもつ。内外面はヘラ磨きにより調整され、焼成は良好である。3は胴部から口縁部にかけての破片である。胴部は内彎し、口縁部は内彎しながら大きく開く。外面は赤褐色の塗彩が施されている。

4は異形高坏形器台である。器受部下位に周縁が突き出し、坏部は小さく、内彎して立ち上がる。脚部はラッパ状に大きく開き、4つの円孔を穿つ。器面を入念にヘラ磨きで整形しており、胎土・焼成ともに良好である。

5～11は高坏である。5は脚部が欠損している。坏部は外傾して立ち上がり、坏部外面下位に明瞭な稜をもち、外面に刷毛目痕を明瞭に残す。6は坏部破片で、外傾して立ち上がり、薄手で内外面ともに丁寧にヘラ磨きされ、焼成は良好である。外面下位に弱い稜をもつ。7は坏部破片で、外傾して立ち上がり、内外面に赤色塗彩が施されている。8は坏部が一部欠損している略完形の高坏である。脚部は中空で柱状を呈し、ラッパ状に大きく開く。坏部はやや内彎しながら大きく開く。下位に不明瞭な稜をもち非常に薄手である。器面は入念なヘラ磨きにより平滑にされ、胎土・焼成ともに良好である。脚部中空内以外の器面に赤色塗彩が施されている。9は脚部破片で裾部はラッパ状に大きく開く。脚部に2つ円孔が穿たれているのが確認でき、おそらく4孔であると思

われる。10は坏部部を欠く高坏脚部。住居南南隅のピット内から出土・細長い柱状の脚部は中空で短い裾部がつく。外面はヘラ磨きを施し、内面にはしぼり目が認められる。11は脚部破片で漏斗状に開き、裾部内面に稜をもつ。裾部に４つの円孔を穿つと思われ、坏部との接合面に坏部の差込用の孔が穿たれている。

12～20は甕および類似器種を一括した。12・13は頸部から口縁部破片で、頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外傾して立ち上がる。12は外面に赤色塗彩が施されている。14は口縁部破片で外傾して立ち上がる。15は口縁から胴部下半での破片で球形に近い胴部に「く」の字状にするどく外反する口縁部がつく。器体の外面は刷毛目整形の後、丁寧なヘラナデが加えられている。内面もナデによる調整がみられる。色調は赤褐色を呈する。16は胴部下位から頸部にかけての破片。胴部はやや内彎気味に立ち上がり、頸部は「く」の字状に屈曲している。17は胴部から頸部にかけての破片である。胴部は内彎して立ち上がり、外面に刷毛目痕、内面には指頭痕を残す。壷形を呈するが、甕の機能を持つものであろう。18は口縁部破片である。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反する。19は口縁部破片。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は強く外反して立ち上がる。内外面に刷毛目痕を非常に強く残す。20は胴部から口縁部にかけての破片。胴部は内彎気味に立ち上がり、頸部は「く」の字状に屈曲して、口縁部は強く外反しながら短く立ち上がる。

（４）遺構外の出土遺物（第20図１～15）

弥生時代の遺構に伴わない遺物を一括して遺構外とする。

１～６は弥生土器の壷・甕の小破片で、いずれも弥生時代後期十王台式である。１・２は口縁部破片で、口唇部にはヘラ状工具によるキザミが、口縁下には押圧された隆帯が２条ある。２は内面に円管状工具による刺突が認められる。３・４は壷形土器の頸部破片で、櫛歯状工具により縦区画され、３には波状文と横走文が、４には横走文が施され、ヘラ状工具による押圧のある隆帯が１条ある。５・６は胴部破片で付加条２種（付加１条）の縄文が施され、羽状構成をとる。７・８は土器底部破片で、底部外面に細かい布目痕が見られる。８は底径が推定8.9㎝で約1/2弱残存している。平織した織布で、１㎝角の中に経糸８本、緯糸８本を数え、間隔は密である。

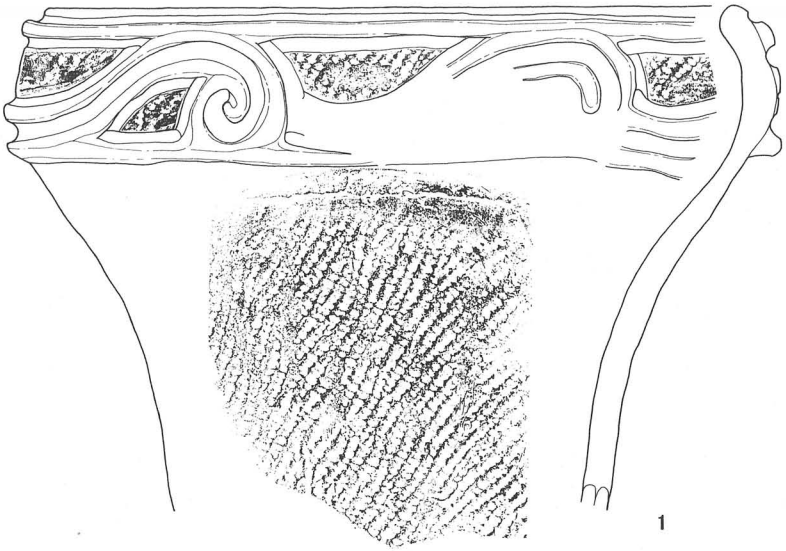
遺構に伴わない遺物は遺構外とし、特徴的な遺物の拓影図・実測図を掲げる。

９～13は十王台式の弥生土器の壷である。９は頸部破片である。櫛歯状工具により縦方向に施文されている。10～12は胴部破片で、付加条２種（付加１条）の縄文が施されている。13は底部破片で、ヘラ削りで整形している。以上は北関東地方の十王台式に比定される資料である。

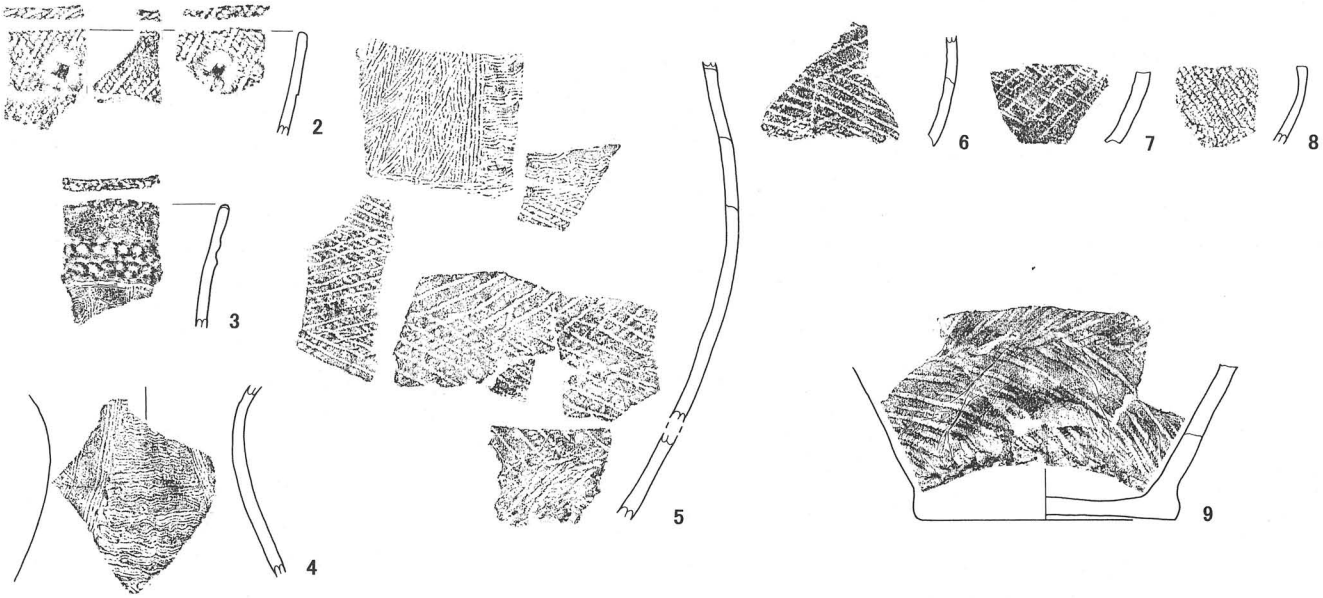
14・15は平安時代の土器である。14は土師器坏の口縁部の破片。外面はヘラ削り整形がなされ、口縁部内外面は横ナデ調整される。15は土師器の埦で、高台部から胴部にかけての破片である。内部にヘラ磨き痕が放射状に残り、暗文風である。全面に丁寧にヘラ磨きが施されている。「ハ」の字状に開く足高の高台がつく。

当遺跡から、時代は違うがSI-2糸を紡ぐ為の紡錘車と、そのような道具を使用して織られた布を敷いて作られた弥生土器が出土している。このことから、小原遺跡の周囲には糸の原料となるアサ・カラムシなどの草木系の植物が生育していたのであろう。茨城県内では当該期に紡錘車の出土例が多く、土浦市原田遺跡群（４遺跡）からだけでも130個の出土があり、布の生産が盛んに行われていたことが報じられている（江幡．1995）。布を織るのに必要な他の道具は出土しなかったが、おそらく本集落でも紡錘車を使い、糸を紡ぎ、機織が行われていた可能性が高い。出土した紡錘車の損傷は長期にわたる使用に負うものと考えられる。　（小野　真美）

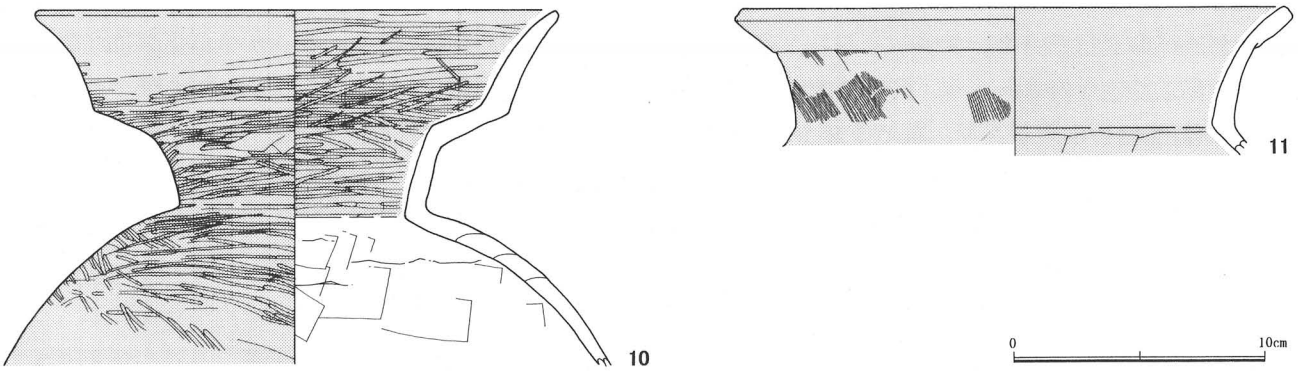
SK-20



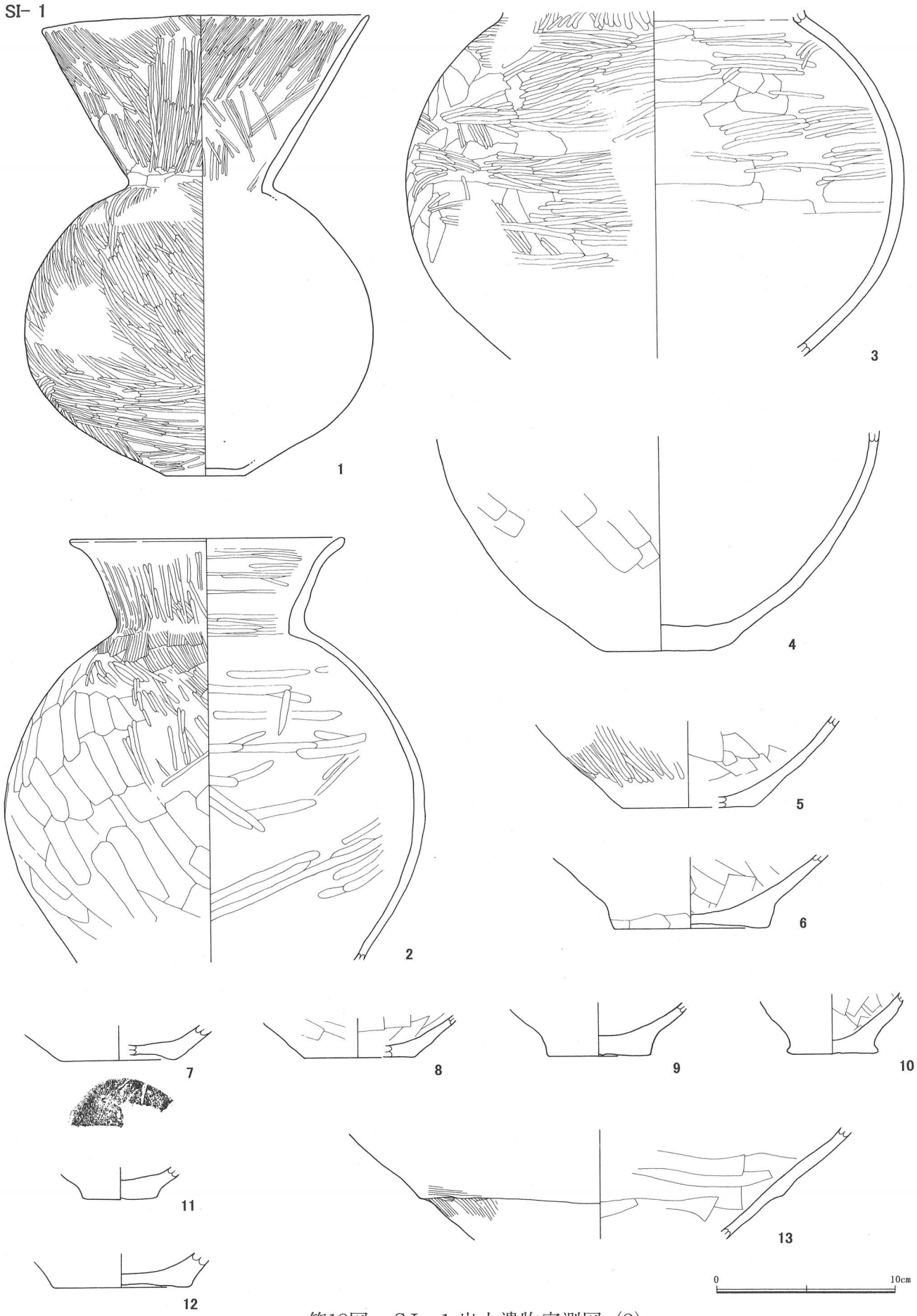
SI-2



SI-1

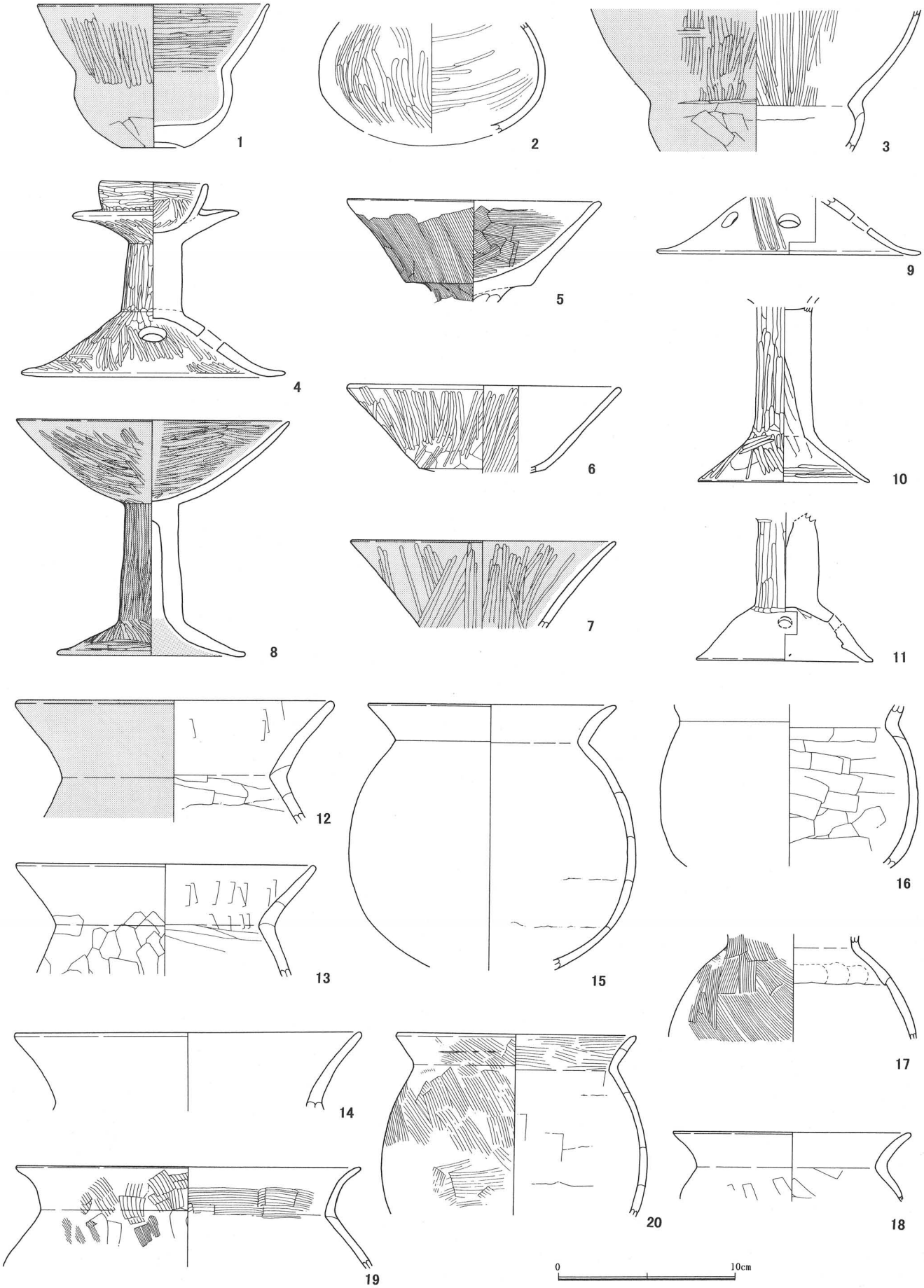


第17図　SK−20、SI−2·1 出土遺物実測図（1）

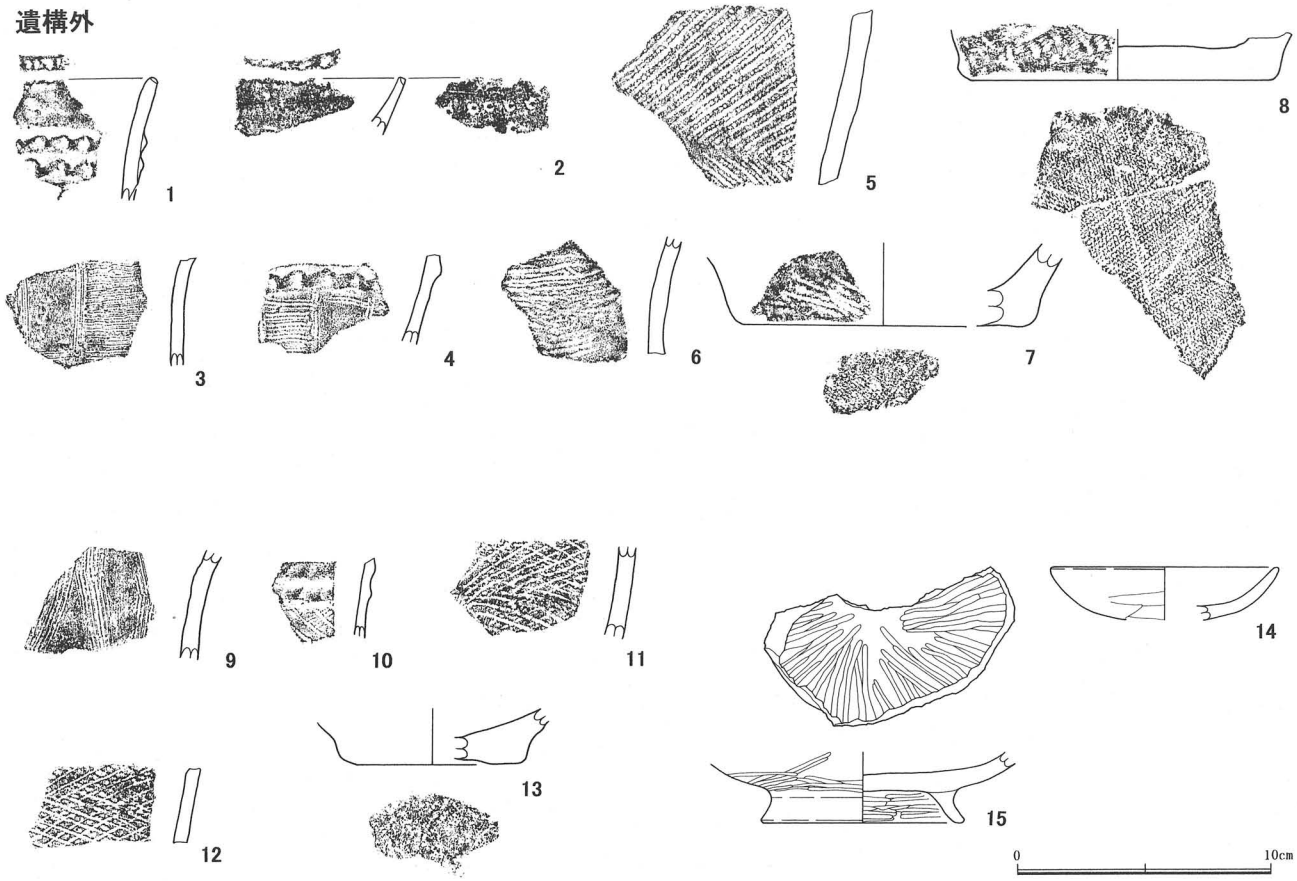


第18図　SI－1 出土遺物実測図（2）

SI- 1



第19図　SI－1 出土遺物実測図(3)



第20図　遺構外の出土遺物実測図

第４表　観察表（１）

遺構名	遺物番号	挿図番号	図版番号	種　別	器　種	最大径	最大幅	最大高	孔径	胎土	焼成	色調	備考
SI-2	一括	16-1	16-10	土製品	紡錘車	4.4	3.9	2.4	0.65	砂粒を若干含む。	普通	赤褐色	

第５表　観察表（２）

遺構名	遺物番号	挿図番号	図版番号	種　別	器　種	口径	器高	底径	器形および文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
SK-20	一括	17-1	16-1	縄文土器	深鉢	(27.2)	<20.0>		口縁部はキャリパー状をなし、隆帯により渦巻文で区画。区画内は横位のＲＬ縄文、胴部は縦位のＲＬ縄文を施している。	金雲母を含む。	普通	暗褐色	
SI-2	一括	17-2	16-2	弥生土器	壷・甕	－	－	－	口縁部破片。口唇部・口縁部にはＲＬ縄文が施され、突起が２つ付けられている。	良好	良好	暗褐色	
SI-2	一括	17-3	16-3	弥生土器	壷・甕	－	－	－	口縁部破片。口唇部にヘラ状工具によりキザミが施され、口縁部は無文。頸部との境に隆帯が２条、ヘラ状工具により押圧されている。櫛歯状工具で２本１単位で縦区画により分割され、区画内は櫛歯状工具で施文されている。	砂粒を若干含む。	普通	黄褐色	
SI-2	一括	17-4	16-4	弥生土器	壷・甕	－	－	－	頚部破片。３本の櫛歯状工具で縦区画に分割されている。区画内は波状文が施されている。	砂粒を含む。	良好	黄褐色	
SI-2	一括	17-5	16-8	弥生土器	壷・甕	－	－	－	胴部破片。胴部上位は４本の櫛歯状工具により縦区画で分割されている。区画内は波状文とＹ字が施されている。中位は付加条２種（付加１条）の縄文が施され、羽状構成をとる。下位は縄文が押圧されている。	金雲母を含む。	普通	黄褐色	
SI-2	一括	17-6	16-7	弥生土器	壷・甕	－	－	－	胴部破片。付加条２種（付加１条）の縄文が施され、羽状構成をとる。５と同一個体と思われる。	小石を若干含む。	普通	黄褐色	
SI-2	一括	17-7	16-6	弥生土器	壷・甕	－	－	－	胴部破片。付加条２種（付加１条）の縄文が施されている。	砂粒を若干含む。	普通	暗褐色	

第６表　観察表（３）

遺構名	遺物番号	挿図番号	図版番号	種　　別	器　　種	口径	器高	底径	器形および文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
SI-2	一括	17-8	16-5	弥生土器	壷・甕	－	－	－	胴部破片。付加条２種(付加１条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。	小石を若干含む。	普通	黄褐色	
SI-2	一括	17-9	16-9	弥生土器	壷・甕	－	－	－	底部から胴部にかけての破片。平底で胴部は外傾しながら立ち上がる。付加条２種（付加１条）の結節縄文が施され、羽状構成をとっている。底部はヘラ削りで整形している。	小石を若干含む。	普通	黄褐色	
SI-1	一括	17-10	17-1	土師器	壺	20.7	＜14.0＞	－	口縁部、内･外面　横位のヘラ磨き。頸部・胴部外面ヘラ削り後、横位・斜位のヘラ磨き。胴部内面　横位のヘラ削り。口縁部・頸部内・外面、頸部外面赤色塗彩。	小石を若干含む	良好	赤色	
SI-1	一括	17-11	——	土師器	壺	22.0	＜5.9＞	－	口縁部内面ヘラ削り。外面ハケ目。内･外面ヨコナデ、内外面赤色塗彩。	小石を少量含む。	良好	赤色	
SI-1	一括	18-1	17-3	土師器	壺	(18.5)	25.7	4.3	口縁部外面ヘラ削り後、ヘラ磨き。内面斜位のヘラ磨き。胴部外面斜位・横位のヘラ磨き。	精良	良好	黄褐色	ほぼ完形
SI-1	一括	18-2	17-2	土師器	壺	15.4	＜23.7＞	－	口縁部内面縦位のヘラ磨き。外面横位のヘラ磨き。胴部外面上位ハケ目、中位斜位のヘラ削り、ヘラ磨き、下位ヘラ削り胴部内面ヘラ磨き。	砂粒を含み良好。金雲母を含む。	良好	黄褐色	ほぼ完形
SI-1	一括	18-3	17-4	土師器	壺	－	＜19.5＞	－	胴部内･外面ヘラ削り後、ヘラ磨き。	砂粒を含む。	良好	黄褐色	
SI-1	一括	18-4	17-5	土師器	壺	－	＜12.1＞	6.0	胴部内面斜位ヘラ削り。	砂粒を含む。	普通	黄褐色	
SI-1	一括	18-5	——	土師器	壺	－	＜5.0＞	＜7.2＞	胴部外面縦位のヘラ磨き、内面ヘラ削り。	砂粒含む。金雲母少量含む。	普通	黄褐色	
SI-1	一括	18-6	——	土師器	壺	－	＜4.0＞	8.6	胴部外面下位横位ヘラ削り、胴部内面ヘラ削り後ヘラナデ。	小石・砂粒を若干含む。	普通	黄褐色	
SI-1	一括	18-7	——	土師器	壺	－	＜1.9＞	(6.3)	胴部下位ヘラ削り、底部木葉痕。	砂粒を含む。	普通	赤褐色	
SI-1	一括	18-8	——	土師器	壺	－	＜2.2＞	(6.4)	胴部内･外面底部ヘラ削り後ヘラナデ。	砂粒を含む。	普通	赤褐色	
SI-1	一括	18-9	——	土師器	壺	－	＜2.9＞	5.6	胴部内面ヘラナデ、外面ナデ。底部ヘラ削り。	砂粒を少量含む。	良好	黒褐色	
SI-1	一括	18-10	——	土師器	壺	－	＜3.0＞	5.1	胴部内面ヘラナデ、外面ナデ。	精良	普通	赤褐色	
SI-1	一括	18-11	——	土師器	壺	－	＜1.8＞	4.2	胴部外面ナデ、内面ヘラナデ。	砂粒を少量含む。	普通	赤褐色	
SI-1	一括	18-12	——	土師器	壺	－	＜1.95＞	(7.8)	胴部外面ナデ。底部ヘラ削り。	小石を若干含む。	普通	赤褐色	
SI-1	一括	18-13	——	土師器	壺	－	＜6.2＞	－	胴部外面ハケ目、内面横位のヘラ削り。	小石・砂粒を含む。	普通	赤褐色	
SI-1	一括	19-1	17-6	土師器	坩	(13.1)	8.1	3.5	口縁部内面横位のヘラ磨き、外面縦位のヘラ磨き、胴部下位縦位のヘラ削り。胴部内外面赤色塗彩。	小石・砂粒を含む。	良好	暗赤褐色	
SI-1	一括	19-2	——	土師器	坩	－	＜6.3＞	－	胴部内面ヘラナデ、外面横位縦位のヘラ磨き。	小石を含む。	良好	褐色	
SI-1	一括	19-3	——	土師器	坩	－	＜8.0＞	－	口縁部内外面縦位のヘラ磨き。胴部外面のヘラ削り。輪積み痕あり。口縁部外面赤色塗彩。	良好	良好	暗褐色	
SI-1	一括	19-4	18-2	土師器	高坏型器台	6.1	11.1	14.8	器受部･脚部内外面ヘラ磨き。口縁部・裾部横ナデ。	砂粒含み良好。金雲母を少量含む。	良	黄褐色	ほぼ完形
SI-1	一括	19-5	18-1	土師器	高坏	14.4	＜5.7＞	－	坏部外面ハケ目整形後軽くナデ。内面ハケ目整形後ヘラナデ。口縁部内・外面横ナデ。	砂粒を含み良好。	普通	黄褐色	
SI-1	一括	19-6	——	土師器	高坏	(15.6)	＜4.9＞	－	坏部内面斜位のヘラ磨き、外面ヘラ削り後縦位のヘラ磨き。口縁部　横ナデ。	金雲母を含み精良。	良好	褐色	
SI-1	一括	19-7	——	土師器	高坏	(15.0)	＜4.9＞	－	坏部内･外面ヘラ磨き。口縁部横ナデ。内外面赤色塗彩。	良好	良好	赤褐色	
SI-1	一括	19-8	18-5	土師器	高坏	(15.4)	13.3	10.6	坏部内・外面。脚部・裾部外面ヘラ磨き。坏部内･外面、脚部外面赤彩塗彩。	精良	良好	赤褐色	
SI-1	一括	19-9	——	土師器	高坏	－	＜3.2＞	(15.0)	脚部外面斜位ヘラ磨き。横ナデ	砂粒多量・金雲母を含む。	普通	黄褐色	

表７　観察表（４）

遺構名	遺物番号	挿図番号	図版番号	種　別	器　種	口径	器高	底径	器形および文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
SI-1	一括	19-10	18-3	土師器	高坏	－	<9.9>	(9.7)	外面ヘラ磨き。脚部内面しぼり痕あり。裾部内面ヘラナデ、ヘラ磨き。	砂粒を含む。	普通	橙色	
SI-1	一括	19-11	18-4	土師器	高坏	－	<8.5>	(10.0)	脚部外面縦位ヘラ磨き。	砂粒を含む。	普通	黄褐色	
SI-1	一括	19-12	——	土師器	壷・甕	(18.0)	<6.9>	－	口縁部・頸部内面ヘラ削り、横ナデ。外面赤彩塗彩。輪積み痕あり。	金雲母を含む。	普通	赤褐色	
SI-1	一括	19-13	——	土師器	壷・甕	(17.0)	<6.3>	－	口縁部内面ヘラナデ、内・外面横ナデ、　頸部外面ヘラ削り。	砂粒・金雲母を含む。	普通	赤褐色	
SI-1	一括	19-14	——	土師器	壷・甕	(19.5)	<4.45>	－	口縁部内・外面横ナデ。	砂粒を少量含む。	普通	黄褐色	
SI-1	一括	19-15	18-7	土師器	壷・甕	(14.0)	<14.95>	－	口縁部内・外面横ナデ。胴部外面ハケ目後ヘラナデ。胴部内面ヘラナデ。	砂粒を含む。	普通	暗赤褐色	
SI-1	一括	19-16	——	土師器	壷・甕	－	<9.1>	－	胴部内面ヘラ削り、外面ヘラナデ。頸部輪積み痕あり。	小石・金雲母を含む。	普通	暗褐色	
SI-1	一括	19-17	——	土師器	壷・甕	－	<5.85>	－	胴部外面斜位、　頸部縦位のハケ目、内面指頭痕・輪積み痕あり。	砂粒少量・金雲母を含む。	良好	灰黄褐色	
SI-1	一括	19-18	——	土師器	壷・甕	(13.5)	<3.8>	－	胴部内外面ヘラ削り。口縁部・内外面横ナデ。	砂粒多量・金雲母を含む。	普通	にぶい橙色	
SI-1	一括	19-19	——	土師器	壷・甕	(10.4)	<5.7>	－	口縁部内面横位ハケ目。外面ヘラ削り後斜位ハケ目。内外面横ナデ。輪積み痕あり。	金雲母を少量含む。	普通	赤褐色	
SI-1	一括	19-20	18-6	土師器	壷・甕	(13.5)	<10.2>	－	口縁部内・外面ハケ目。胴部内面ヘラ削り。外面ハケ目。口縁部内外面粗いヨコナデ。輪積み痕あり。	砂粒・金雲母を含む。	普通	赤褐色	
遺構外	一括	20-1	18-8	弥生土器	壷・甕	－	－	－	口縁部破片。口唇部にはヘラ状工具によりキザミが施され、口縁部は無文である。頸部との境に隆帯が2条、ヘラ状工具により押圧されている。	良好	普通	黄褐色	
遺構外	一括	20-2	18-9	弥生土器	壷・甕	－	－	－	口縁部破片。口唇部にヘラ状工具によりキザミが施され、内面には筒状工具により刺突が２段施されている。	砂粒を若干含む。	普通	黄褐色	
遺構外	一括	20-3	18-14	弥生土器	壷・甕	－	－	－	頸部破片。櫛歯状工具により縦区画に分割。区画内にはゆるい波状文と横走文が施されている。	金雲母を少量含む。	良好	暗褐色	
遺構外	一括	20-4	18-10	弥生土器	壷・甕	－	－	－	頸部破片。隆帯が１条、ヘラ状工具により押圧されている。櫛歯状工具により縦区画に分割され、区画内は横走文が施されている。	砂粒を少量含む。	普通	黄褐色	
遺構外	一括	20-5	18-12	弥生土器	壷・甕	－	－	－	胴部破片。付加条２種(付加１条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	小石を若干含む。	良好	黄褐色	
遺構外	一括	20-6	18-11	弥生土器	壷・甕	－	－	－	胴部破片。付加条２種(付加１条)の縄文が施され、羽状構成をとる。	砂粒を少量含む。	普通	黄褐色	
遺構外	一括	20-7	18-13	弥生土器	壷・甕	－	－	(7.4)	底部から胴部かけての破片。平底で胴部は外傾しながら立ち上がる。胴部には付加条２種（付加１条）の縄文が施されている。底部に布目痕。	小石を若干含む。	普通	黄褐色	
遺構外	一括	20-8	18-15 a 15 b	弥生土器	壷・甕	－	－	(8.9)	底部から胴部かけての破片。胴部には縄文が施されている。底部に布目痕。	小石を若干含む。	普通	黄褐色	
遺構外	一括	20-9	18-16	弥生土器	壷・甕	－	－	－	頸部破片。櫛歯状工具により縦方向に施文されている。	小石を若干含む。	普通	黄褐色	
遺構外	一括	20-10	18-17	弥生土器	壷・甕	－	－	－	胴部破片。隆帯が２条、ヘラ状工具により押圧され、付加条２種（付加１条）の縄文が施されている。	砂粒を若干含む。	普通	にぶい黄褐色	
遺構外	一括	20-11	18-18	弥生土器	壷・甕	－	－	－	胴部破片。付加条２種(付加１条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。	砂粒を少量含む。	普通	赤褐色	
遺構外	一括	20-12	18-19	弥生土器	壷・甕	－	－	－	胴部破片。付加条２種(付加１条)の縄文が施され、羽状構成をとっている。	金雲母を含む。	普通	黄褐色	
遺構外	一括	20-13	18-20	弥生土器	壷・甕	－	－	(4.2)	底部破片。ヘラ削りで整形している。	小石を若干含む。	普通	赤褐色	
遺構外	一括	20-14	——	土師器	坏	(9.0)	－	－	胴部から口縁部にかけての破片。底部ヘラ削り。口縁部内外面横ナデ。	良好	良好	暗褐色	
遺構外	一括	20-15	18-21	土師器	埦	－	<2.8>	(8.0)	高台部から胴部にかけての破片。底部内部にヘラ磨き痕が放射状暗文に残る。全面丁寧にヘラ磨きが施されており、「ハ」の字状に開く足高の高台がつく。	金雲母を含む。	良好	黄褐色	

Ⅳ　まとめ

今回の小原遺跡の調査は道路敷の約1.200m²に限られたが、「遺跡地図」に記載されている範囲外でありながらも住居跡、土坑、溝などの遺構が検出され、小原遺跡の広がりがさらに拡大していることなど重要な成果が得られた。

検出された遺構は次のとおりである。

住居跡　　２軒（弥生後期　１・古墳前期　１）
土　坑　　30基（縄文中期　５・近世　24・不明　１）
　溝　　４条（近世　４）
ピット　　162個（近世）
その他　　３基（近世　２・不明　１）

162個の時期および性格の分かりにくいピット群をのぞき、他の遺構や遺物については前節までに説明を加え、多少の見解を示してきた。この近現代･近世に属すると思われる溝、不定形な土坑などについては、なお類例を集成し検討しなければ、性格、機能などの明確な解答を出すことはむずかしい。また、農業遺構のあり方についても知識が必要であろうと思われる。ここでは、縄文時代の土坑群と弥生後期･古墳前期の住居跡出土土器群についてふれておくことにしたい。

縄文時代中期の土坑群

合計５基が検出されたが、このうちSK-20上層から加曾利ＥⅡ式深鉢形土器が出土していることから、これら土坑群が縄文中期の所産であることが明らかになった。形状は長楕円形プランで掘削面からの深さは1.6mを測り、他のSK-21.22.23もほぼ同様の形態である。こうした形態の土坑は縄文時代の丘陵地内遺跡で数多くみられ、狩猟用の陥穴遺構と考えられてきたものである。今回の調査で検出された土坑は北側の傾斜変換点に並ぶように構築されており、計画的に設けられた陥穴と考えられよう。その時期もSK-20と同様の中期に考えてよいと思われる。住居SI-2に切られたSK-25は弥生時代に先行することだけは分かるが、その詳細な時期と用途は不明である。

弥生時代の遺構と遺物

周辺の弥生時代遺跡との関わり　『友部町史』（友部町1990）によれば、町内には弥生時代の遺跡が８ヵ所で確認されている。しかしながらこの時点では正式な発掘調査がなされていないようで、遺跡の内容や性格などの実態がはっきりしなかった。その後、総合流通センター整備事業にともなう長兎路地区の久保塚遺跡群および向原遺跡の調査により、弥生時代の住居跡が発見され（茨城県教育財団　2000）、さらに北関東自動車道友部―水戸線の建設にともなう下賀田地区の高平遺跡などから弥生土器の出土が報じられた（茨城県教育財団　2000）。

これらの弥生時代遺跡はほとんどが後期十王台式期に形成されたものである。茨城県教育財団弥生時代研究班は、「茨城後期弥生式土器編年の検討（Ⅱ）」（1993）として当該期の主要59遺跡をリストアップし分布図を掲げているが、この中に友部町管内の遺跡はない。あたかもこの地域周辺が弥生時代後期には空白だったように見える。また、十王台式土器制定60周年記念シンポジュウムにおける弥生時代後期50遺跡（茨城県考古学会　1999）でも、友部町管内は空白化のままである。

このように従来、友部町では弥生時代遺跡の存在は確認されているものの良好な資料が提示されなかったため、この地域が文化的に立ち遅れている観が否めなかった。

2003年に至り、われわれが調査担当した小原地区の県営畑地帯総合整備事業にともなう三本松遺跡の発掘調査が行われた。ここで3,400m²の調査範囲から古墳時代および奈良・平安時代の住居群とともに、弥生時代住居跡が15軒ほどまとまって発見され、土器などの遺物も大量に出土した（友部町三本松遺跡調査会2003）。かくしてそれまでは希薄とされてきた友部町の弥生時代の文化も、充実した遺跡が存在することが確認されたのである。この度の小原遺跡の調査地点は、ＪＲ常磐線をはさんで三本松遺跡の西方700mほどに位置している。両遺跡は同じ台地の連なりで立地的にも共通することから、弥生時代住居跡の存在も期待されていたといえよう。そして期待に違わずSI-2住居跡が検出された。このことは両遺跡を包括する相当に大規模な集落がこの地に営まれていたらしい。今後の調査の進捗により、遺跡の実態がしだいに明らかにされていくはずである。

弥生時代の住居跡と遺物　Ｊ区とＫ区との境界でSI-2の住居跡が確認された。この境界にはちょうど幅2.5mほどの地元住民の生活道路が横断しており、諸般の事情がからみ完掘調査には至らず、住居範囲の５割ないし６割方を掘残してしまった。つまり、道路は方形の住居プランに斜めに通じており、住居の一端は道路範囲に収まって向こう側までは広がっていない。また、床中央に地床炉があり、南隅から１mの位置に柱穴が、南東壁下を二分する位置に小ピットが存在する。この小ピットは住居内に昇降する梯子でも据えた施設なのであろう。このことは一辺が4.5mの範囲に収まる住居規模ということであろう。

住居から出土した遺物にはまとまったものがない。おそらく住居が機能していたときの遺物ということではなく、住居が廃絶された後の投げ込みか流れ込みによるであろう。

この中で注目される遺物に、土器底面に認められる織布痕と紡錘車がある。この双方の資料からは、つぎのような光景が浮かんでくる。この土地では苧麻（カラムシ）とか大麻（アサ）が栽培されており、その表皮である繊維を紡いで紐状の糸にするのが紡錘車であり、糸にされた繊維は手織器を使って織布に織られたことであろう。その織布が貫頭衣などに仕立て上げられたことである。これら一連の作業は、この遺跡に住み着いた女たちが行っていたようである。

古墳時代前期の土器

古墳時代前期の住居跡は、１軒検出されている。１辺５m前後の略方形を呈する住居で、この時期の規模としては一般的である。残念ながら上部が削平を受けて浅く、遺構の遺存状態は良好とは言えない。中央よりやや北寄りに炉が設けられ、住居の四隅には浅いピットが認められる。深さから推定して柱穴ではないであろう。この住居からは床面上に押しつぶされた多量の土器が出土している。その微細の１部は第９図に示したが、これ以外にも各種の器種が出土している。合計33個体を図示した。これらの器種の組合せおよび器形の特徴は当該期の様相をよく示している。以下に概観しておくことにする。

器種は壷・坩・器台・高坏・甕の大別５種があり、おのおの器形、法量によって細別が可能である。

壷Ａ　有段口縁の大型壷（第17図10）

壷Ｂ　折返し口縁の大型壷（第17図11）

壷Ｃ　外反口縁壷（第18図２）

壷Ｄ　球形胴に直口縁壷（第18図１）

この他に胴部・底部破片が数多くあるが、ほぼ壷Ｃの範疇であり、大・小の法量変化は認められる。

坩Ａ　丸底で大きく開く口縁部をもつもの（第19図２）

坩Ｂ　凹底をもつ小形扁平な胴部と内湾する口縁部をもつもの。法量差からＢ$_1$・Ｂ$_2$に分けられる（第19図１・３）

器台　いわゆる異形器台（第19図４）

高坏Ａ　坏部が稜をもち、直線的に開くもの（第19図５～７）

この脚部は円筒状にのび、第19図－９のような裾部になると思われる。またやや異形なものは第19図11のような脚部であるが、別器種とまで言い切れない。

高坏Ｂ　長い円筒形脚部に内湾気味の坏部をのせる（第19図８・10）

甕Ａ　くの字に外反する長い口縁部（第19図12～14）

甕Ｂ　くの字に外反する短い口縁部、刷毛目整形（第19図19・20）

甕Ｃ　くの字に外反する短い口縁部、小形甕（第19図15・18）

その他、甕には球形胴部にヘラ削り、刷毛目整形を施すものがあるが、破片であって明確に分類することができない。

以上によって壷４類、坩２類、器台１類、高坏２類、甕３類に分けられ、貯蔵、煮炊、供献のそれぞれ機能・用途をもつものであったと考えられる。これらは高坏の割合が高い組成で、とくに本遺跡を含む茨城中央部の当該期の共通した様相である。とくに茨城町南小割遺跡の126棟にも達する大集落の住居群には比較できる類例は多く認められる（茨城県教育財団1998）。

次に異形土器について触れておきたいが、前述の南小割遺跡の中にも第99号住などに散見され、この土器が必ずしも特異なものではないことを示している。かつて熊野正也氏は、これらの器台形土器を集成分析され、その特徴を述べている（熊野1974・1977・1980）。それによれば分布の集中は関東地方に偏っており、古墳以上に集落の住居跡内からの出土が多いことを指摘している。器形のもつ雰囲気から、祭祀的遺物として、あるいは特殊な供献具として考えられがちだが、住居跡に多いという事実は一般的な生活什器の範疇であるべき点を示唆する。

さて以上の器種組成をもつ土器群の編年的位置を確認しておこう。特徴的なのは壷Ａの有段口縁壷である。また高坏Ａ・Ｂについても高い円筒状に伸びる脚部の特徴は、五領式土器の新段階の指標となっており、坩Ｂの器形もそのことを補強している。甕には刷毛目整形が存在していても台付甕になるものは少ないようであり、これも新期様相であろう。茨城県教育財団が行った当該期の編年枠組のⅣ段階に相当すると考えられる（茨城県教育財団1997）。

（服部）

引用参考文献

諸星政得他1999『茨城県における弥生時代研究の到達点－弥生時代後期の集落構成から－』茨城県考古学協会

大成エンジニアリング株式会社埋蔵文化財調査部2003『茨城県友部町三本松遺跡』三本松遺跡調査会

高根信和、大森信英他1990『友部町史－第二編－』友部町

長岡正雄、仲村浩一郎2000『茨城県教育財団文化財調査報告162　総合流通センター整備事業地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団

平松孝志2000『茨城県教育財団文化財調査報告168　北関東自動車道（友部－水戸）建設地内埋蔵文化財調査報告書』茨城県教育財団

弥生時代研究班2002・2003・2004「茨城後期弥生式土器編年の検討（1）（2）（3）」『考古学ノート』1・2・3　茨城県教育財団

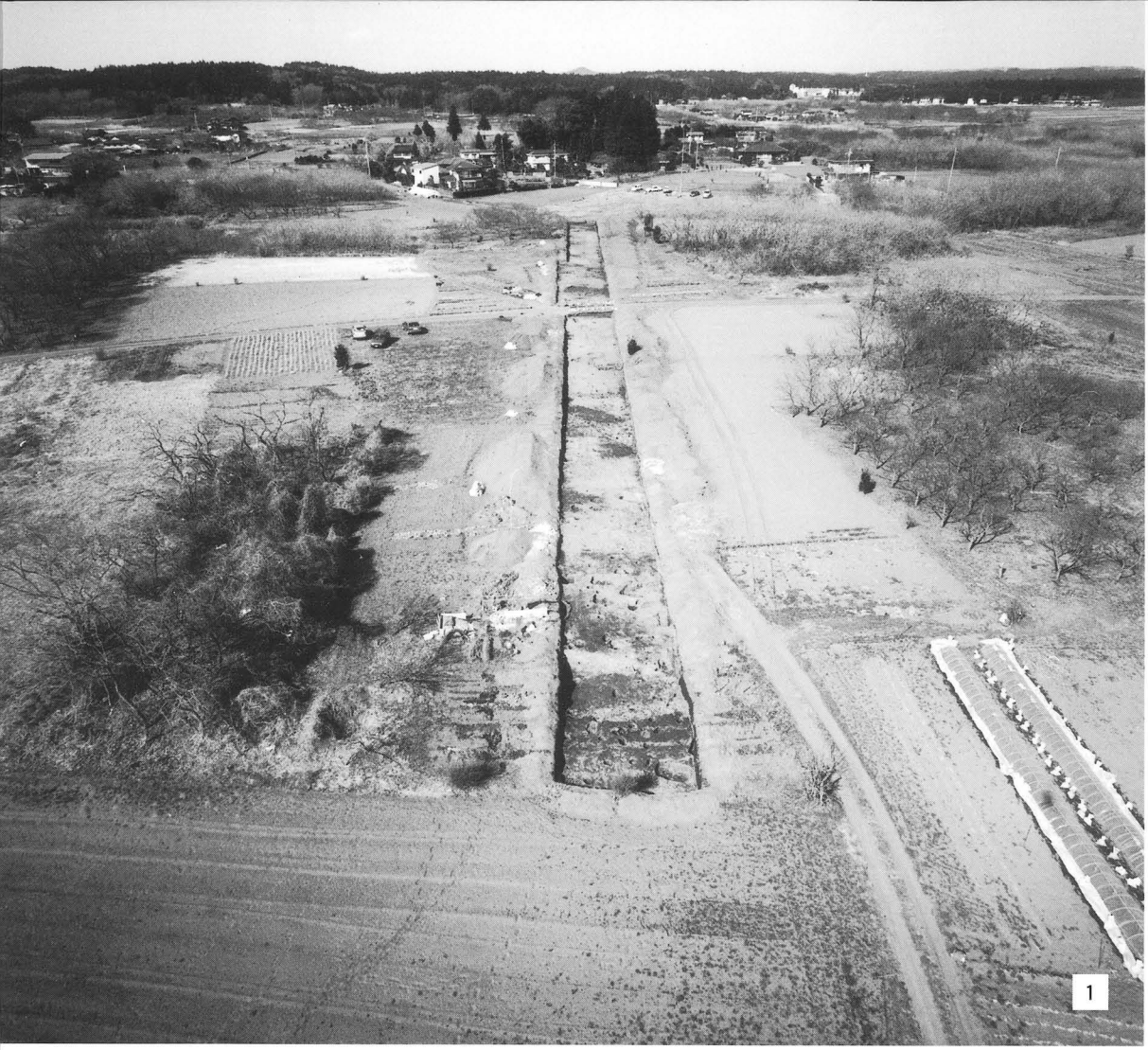
熊野正也1974・1977・1980「特殊な器台形土器について（1）（2）（3）」『史館』第3・8・12号

写 真 図 版

図版1

1．調査区遠景
（東から）

2．調査区遠景
（西から）



1．調査区近景
（南から）

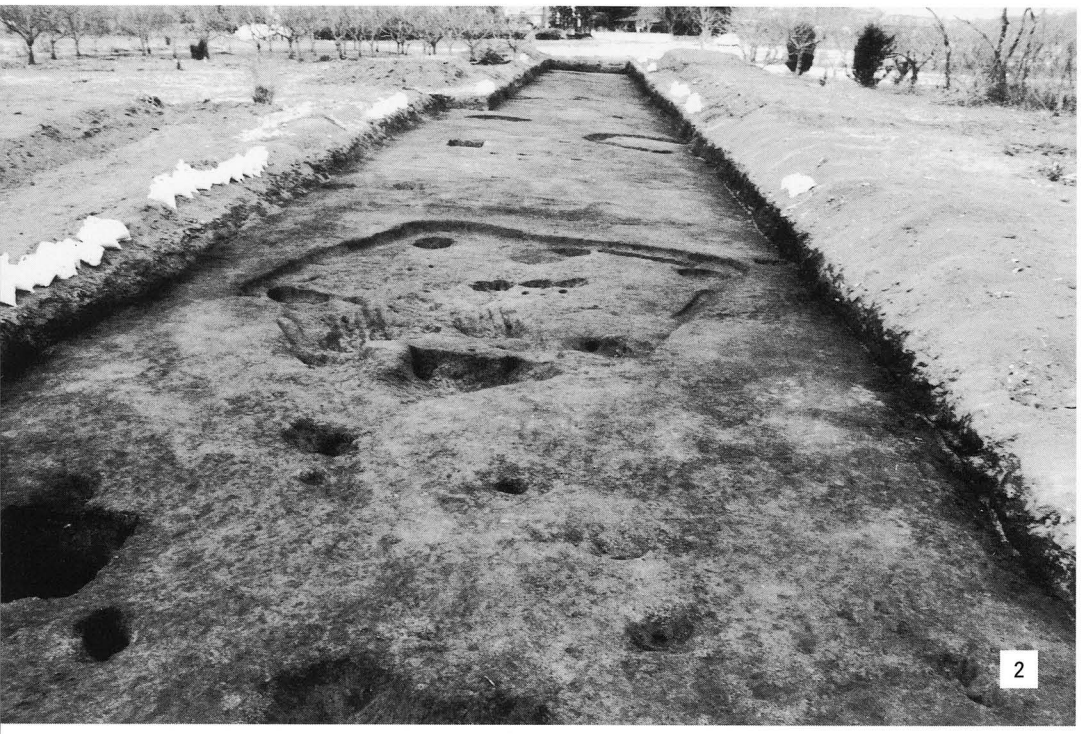
2．調査区近景
（北から）

図版 3

1．調査区北部
（真上から）

2．調査区南部
（真上から）

1．調査区北部
（北から）



2．調査区北部
（南から）

3．調査区南部
（北から）

図版 5

1．作業風景

2．作業風景

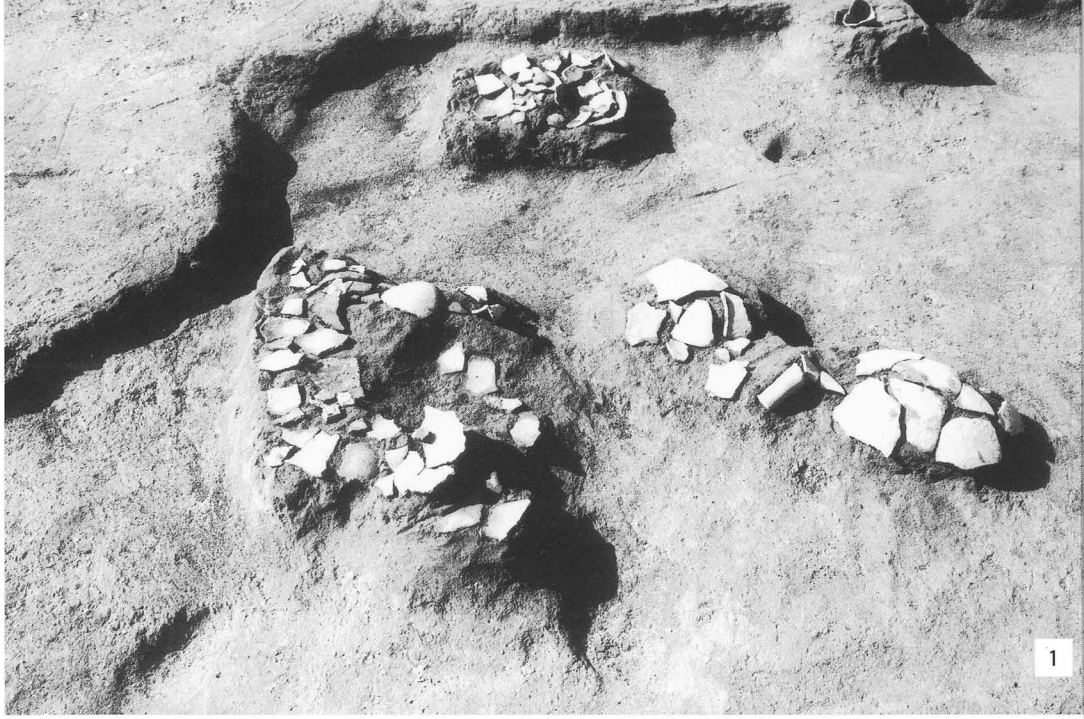
3．作業風景

1．SI-1全景
（東から）

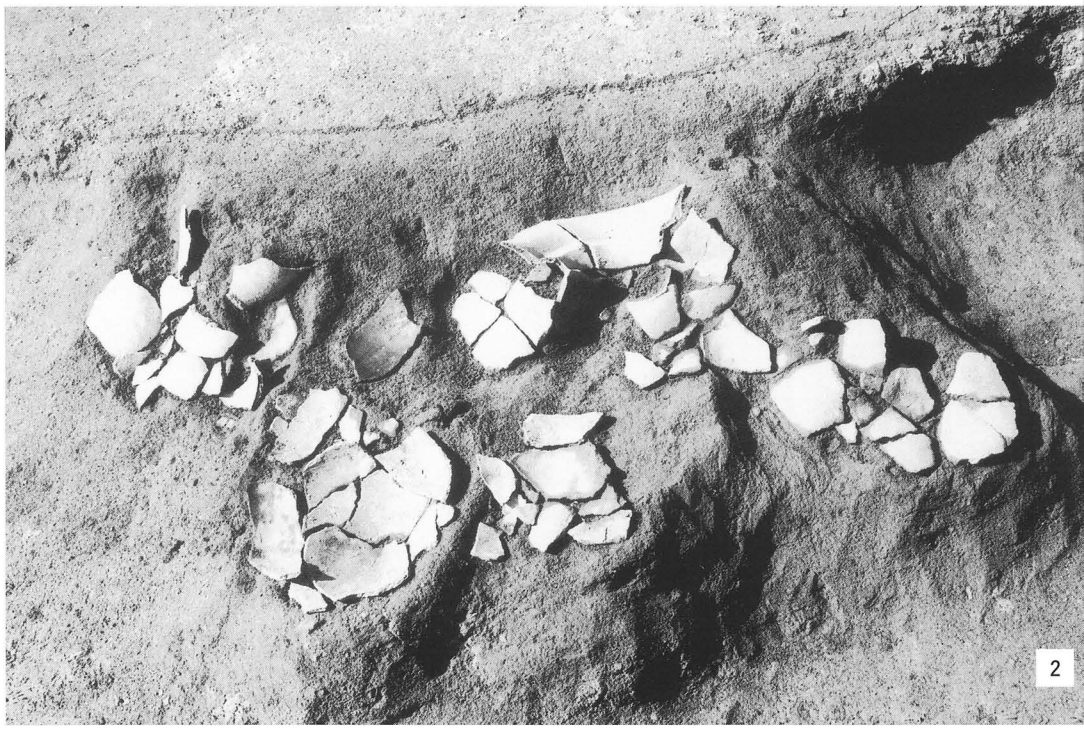
2．SI-1全景
（南から）

3．SI-1全景
（東から）

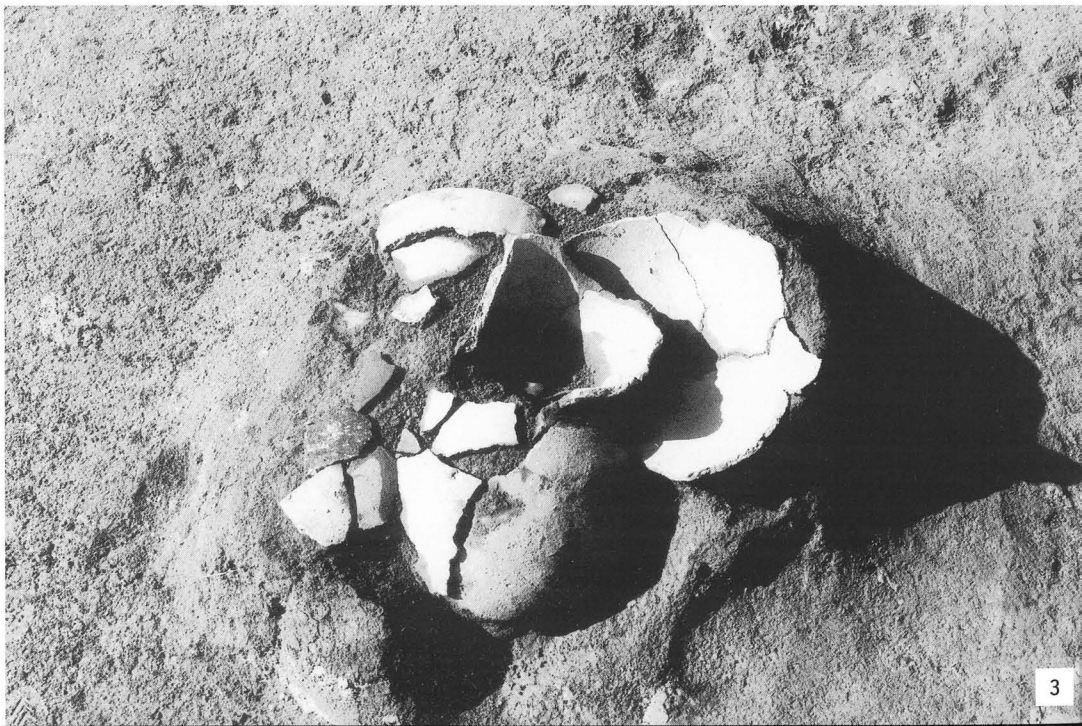
図版 7



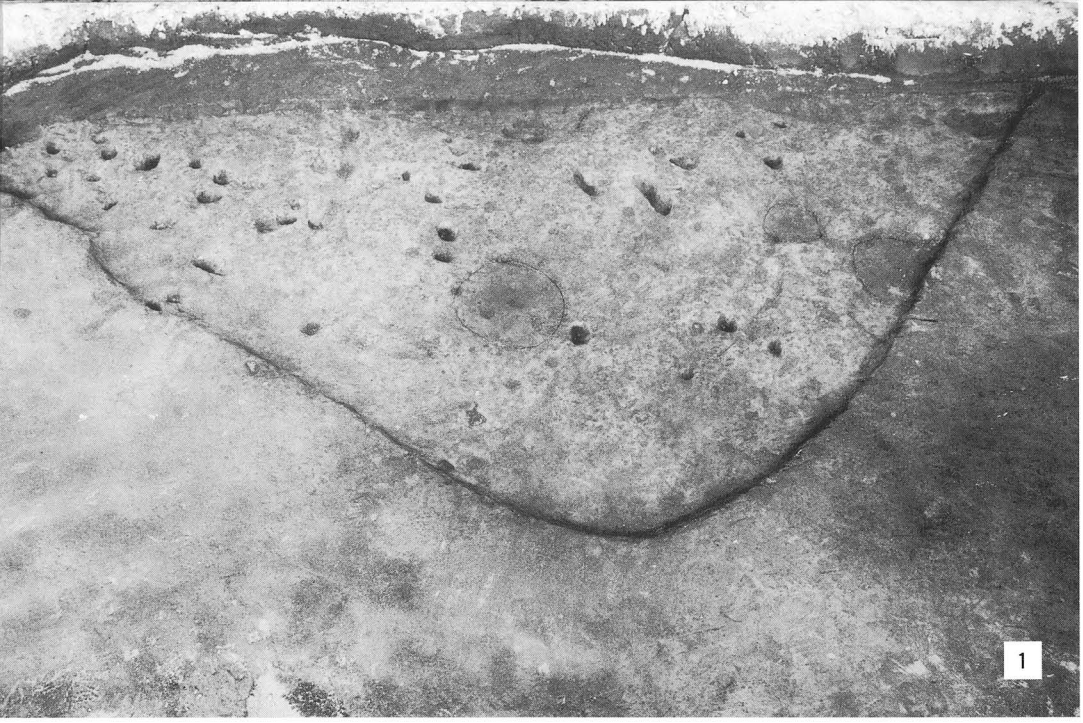
1．SI-1遺物出土状況
（東から）



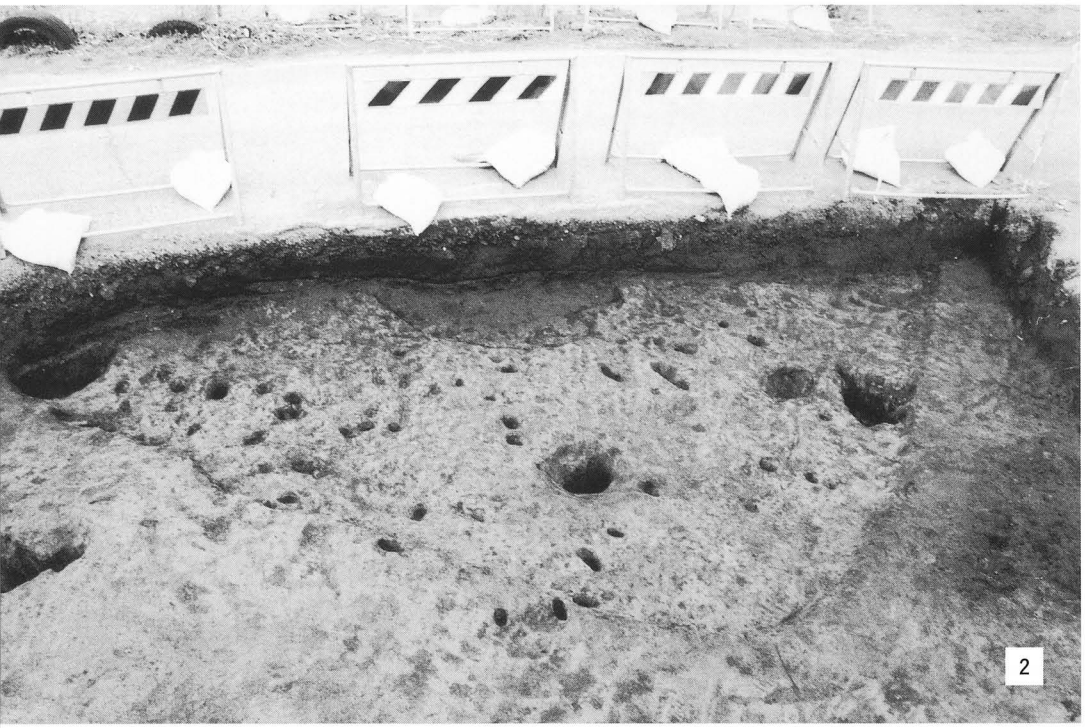
2．SI-1遺物出土状況
（東から）



3．SI-1遺物出土状況
（東から）



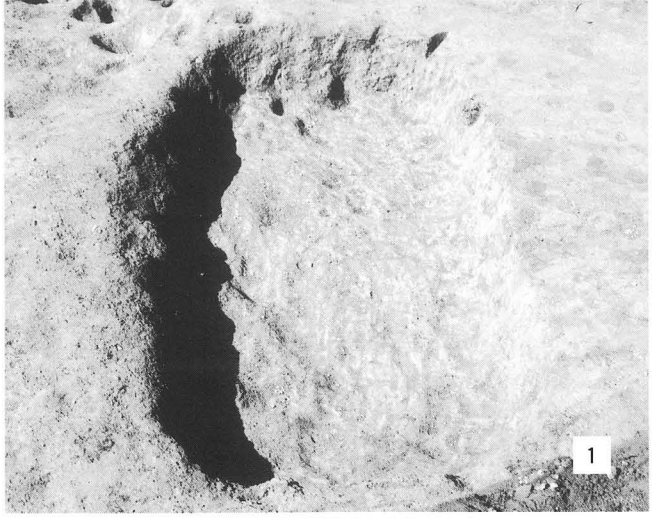
1．SI-2全景
（南から）



2．SI-2全景
（南から）

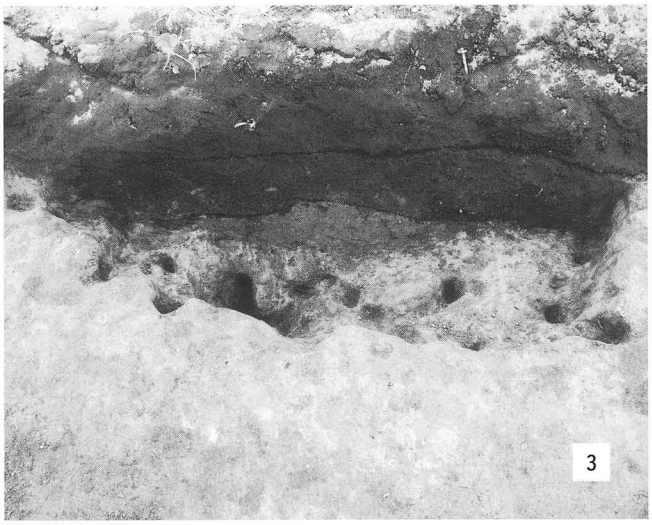
3．SI-2
炉跡土層断面使用面
（南から）

図版 9



1．SK-1完掘状況（東から）

2．SK-2完掘状況（北から）

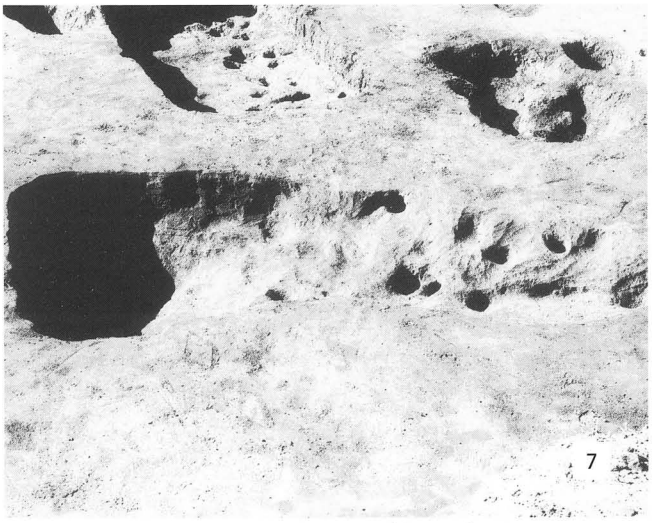


3．SK-3完掘状況（東から）

4．SK-4完掘状況（北から）

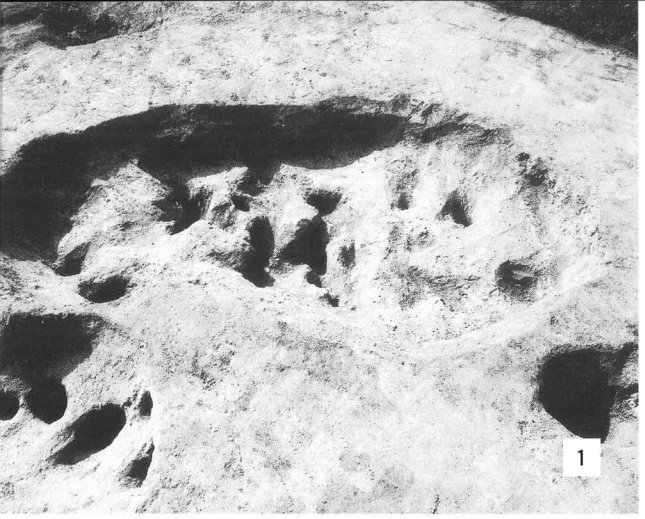
5．SK-5完掘状況（北から）

6．SK-6完掘状況（北から）



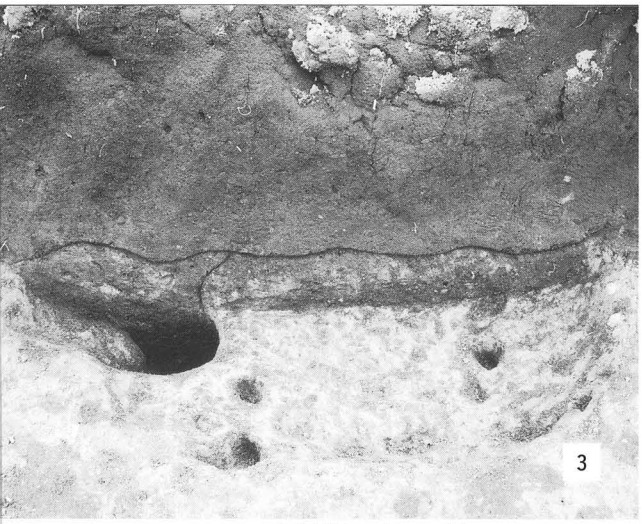
7．SK-7完掘状況（東から）

8．SK-8完掘状況（北から）



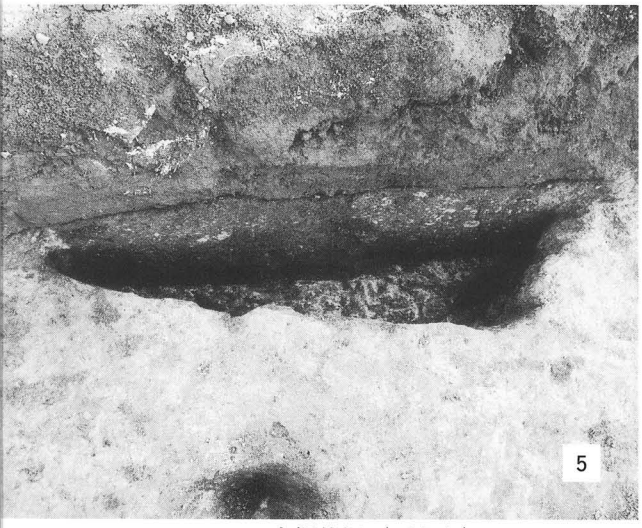
1．SK-9完掘状況（北から）

2．SK-10完掘状況（北から）

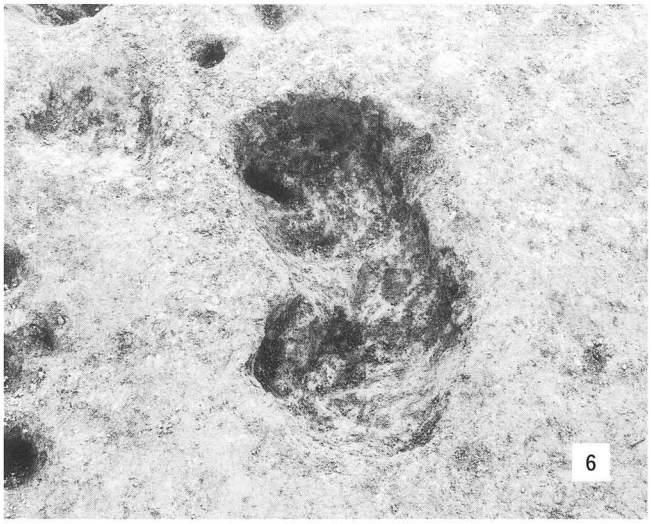


3．SK-11完掘状況（東から）

4．SK-12完掘状況（北から）

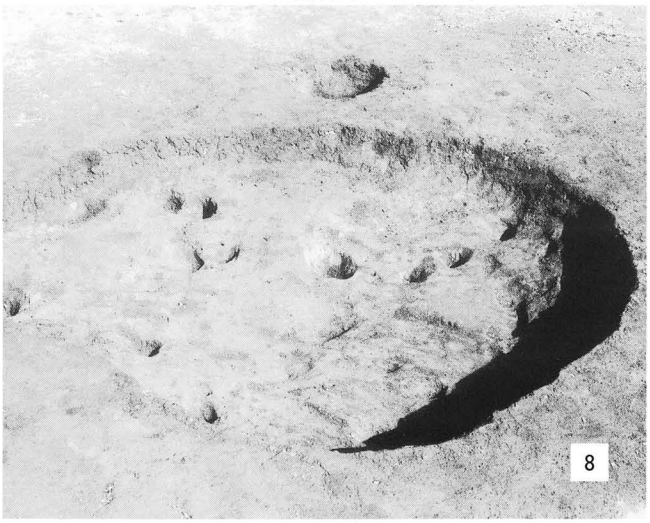


5．SK-13完掘状況（西から）



6．SK-14完掘状況（北から）

7．SK-15完掘状況（南から）

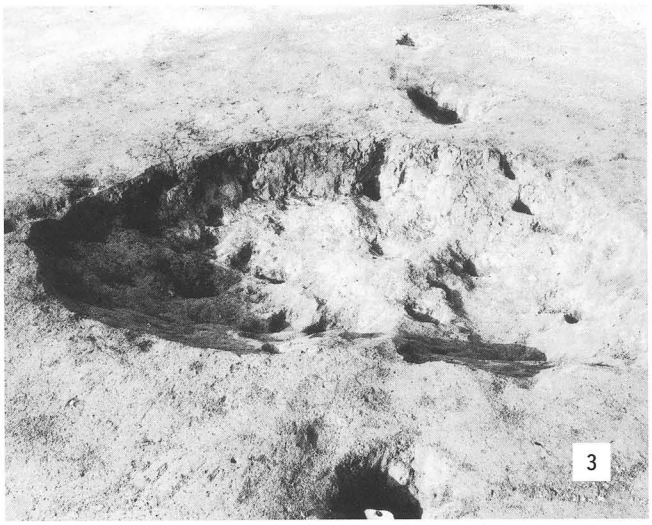


8．SK-16完掘状況（南から）

図版11

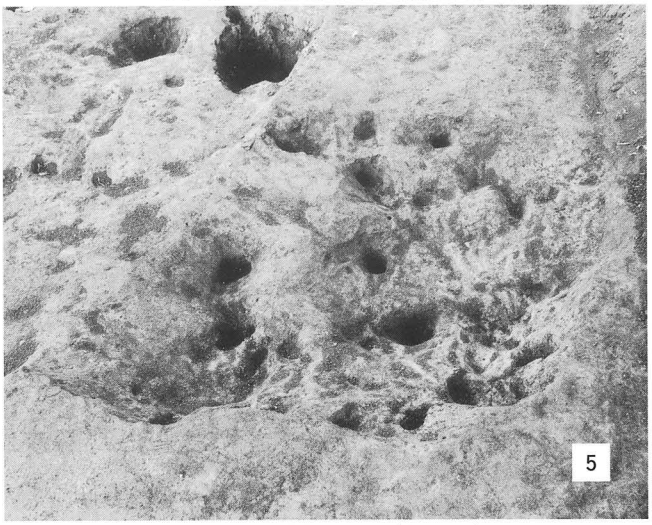
1．SK-17完掘状況（南から）

2．SK-18完掘状況（南から）

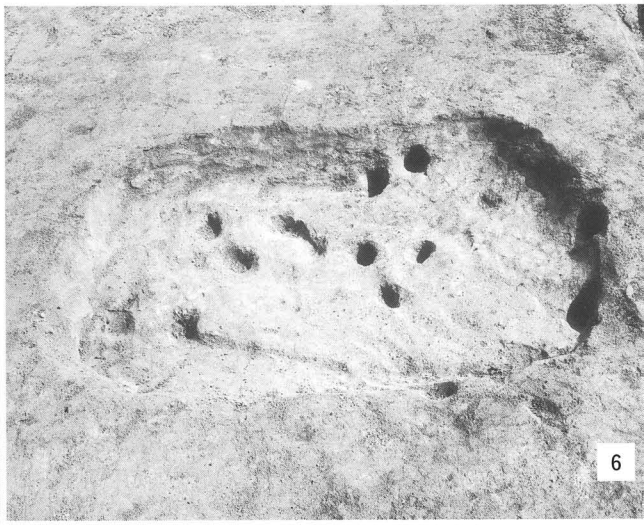


3．SK－19完掘状況（南から）

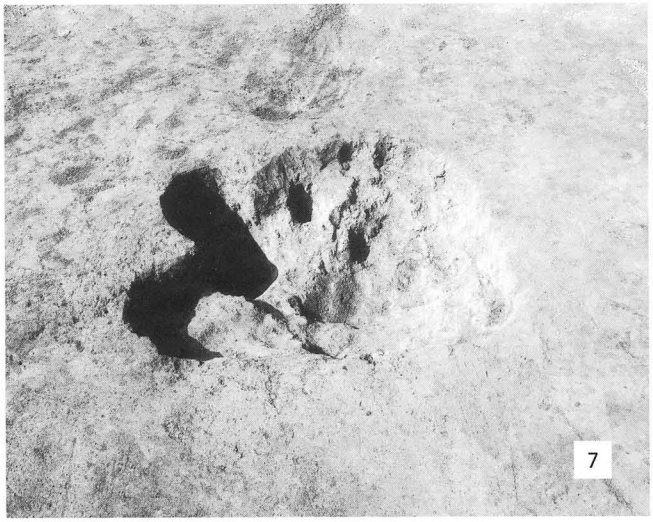
4．SK-24完掘状況（東から）



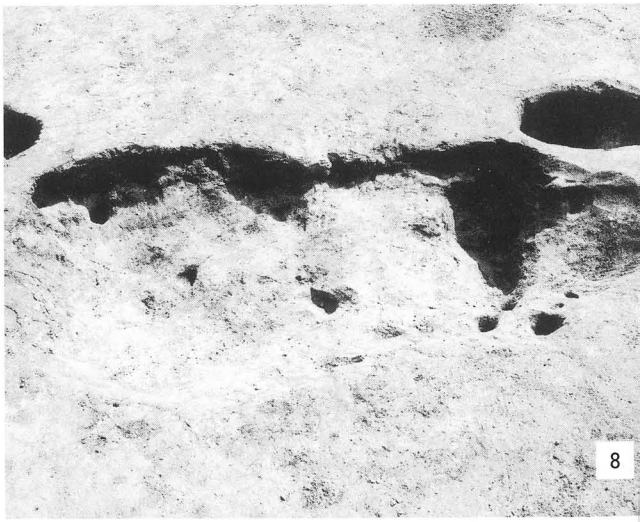
5．SK-25完掘状況（南から）



6．SK-26完掘状況（西から）



7．SK-27完掘状況（東から）

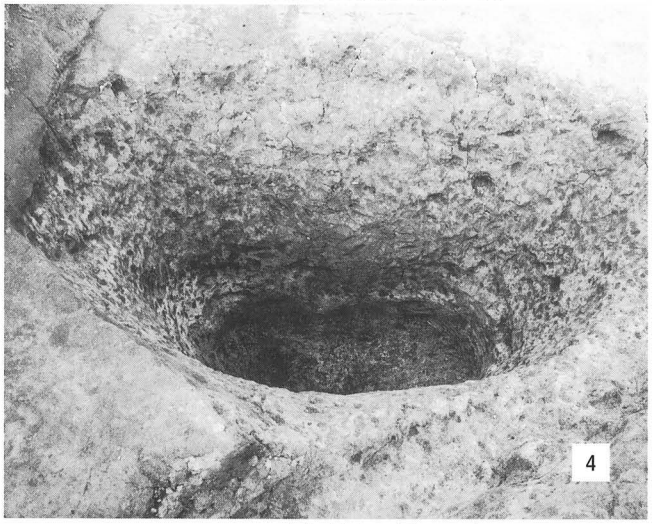


8．SK-29完掘状況（西から）

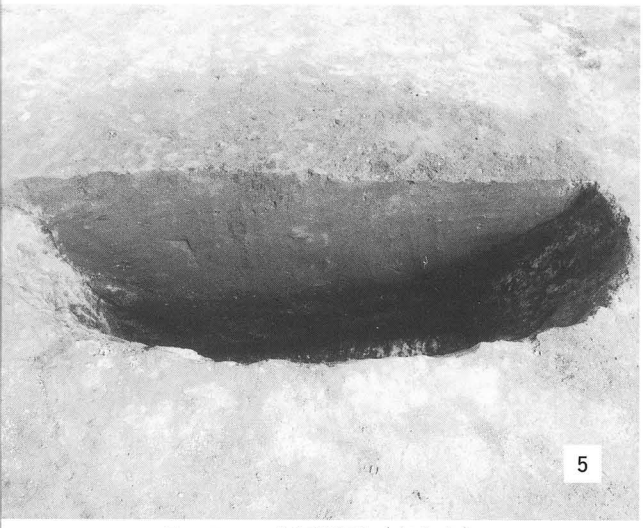
1． SK-20土層断面（南から）

2．SK-20遺物出土状況（東から）

3．SK-21土層断面（南から）

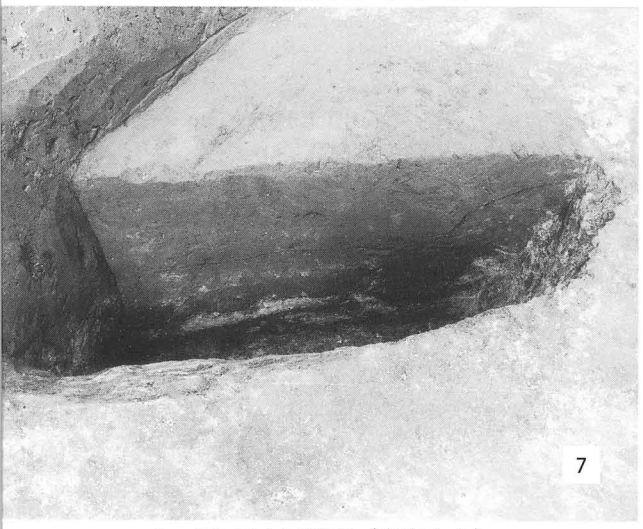


4．SK-21完掘状況（南から）



5．SK-22土層断面（南から）

6．SK-22完掘状況（南から）



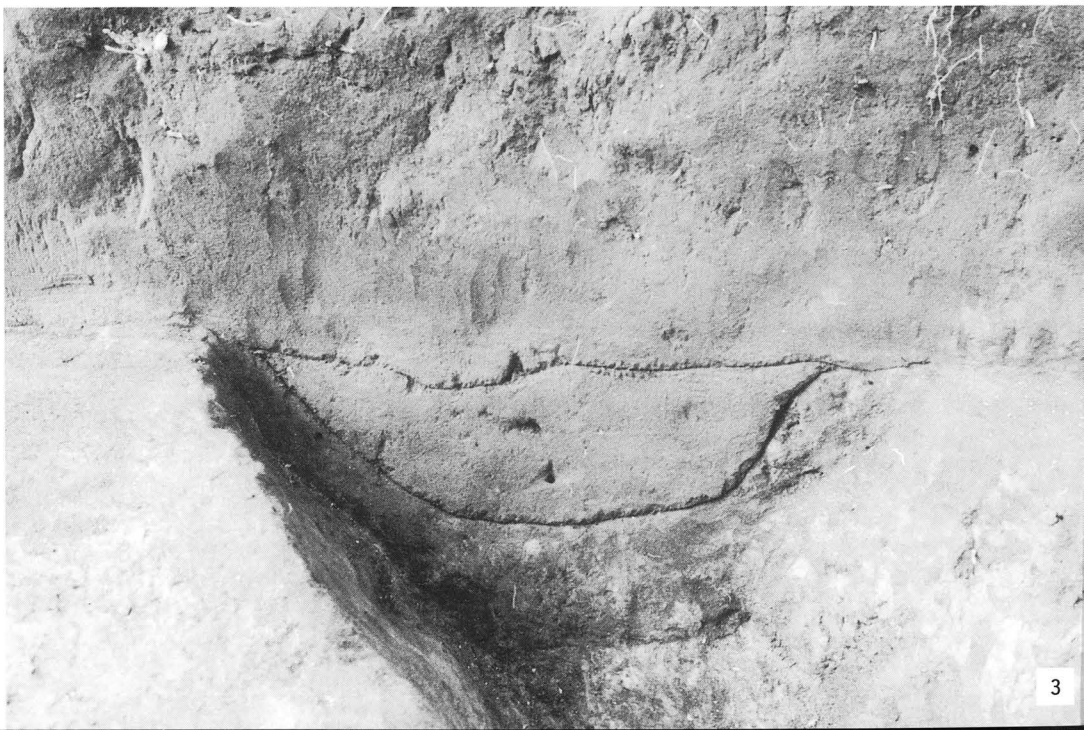
7．SK-23土層断面（南東から）

8．SK-23完掘状況（南から）

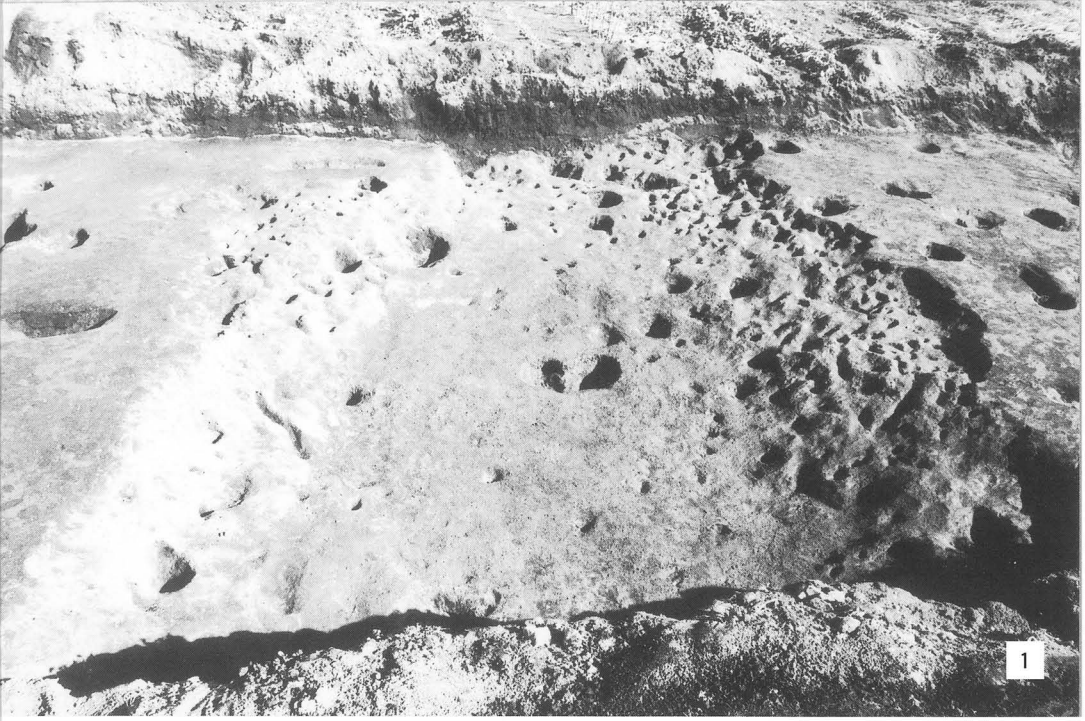
図版13

1．SD-1完掘状況
（西から）

2．SD-3完掘状況
（西から）



3．ＳＤ－４
西壁土層断面
（東から）



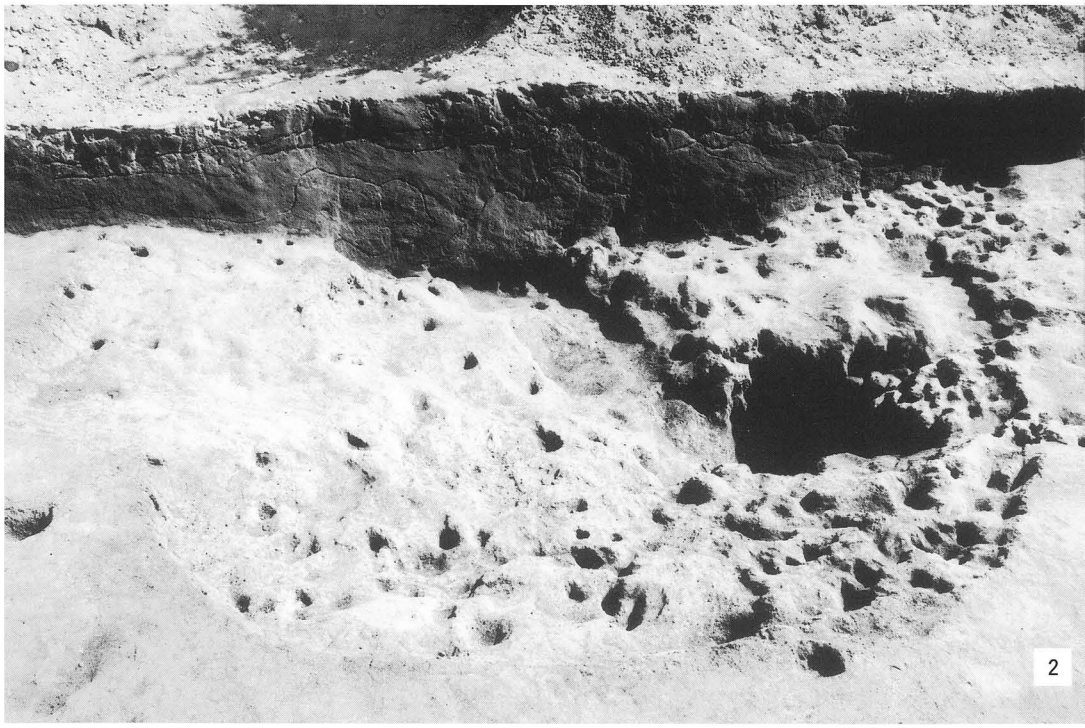
1．SD-2完掘状況
（西から）

2．SD-2
西壁土層断面
（東から）

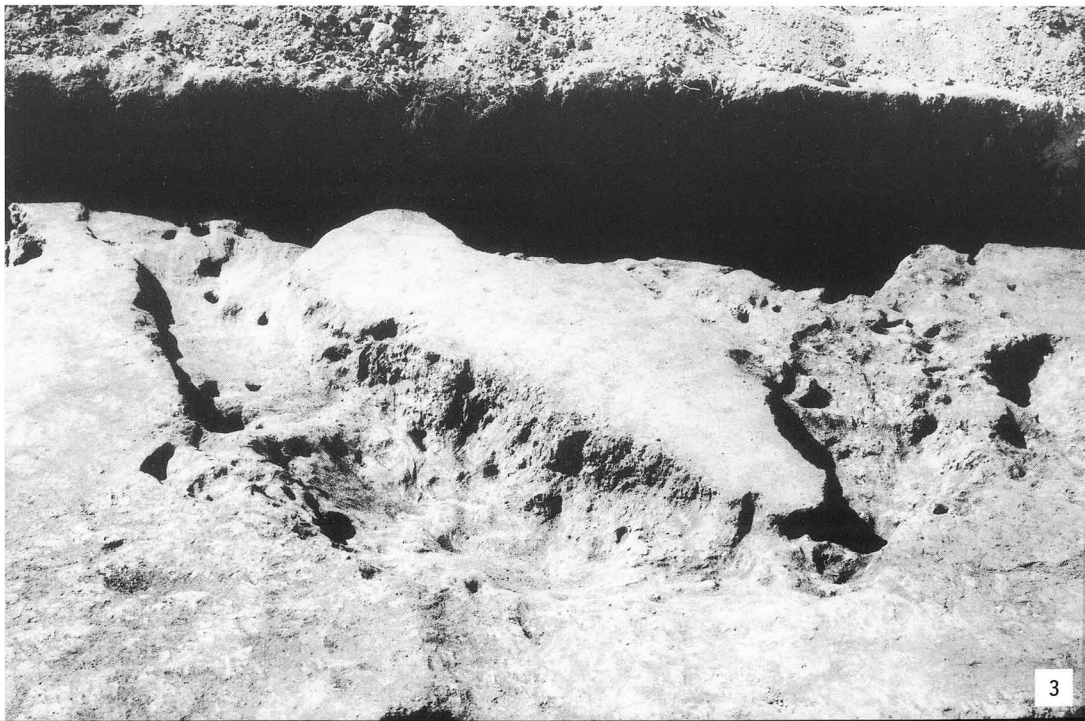
3．SD-2
東壁土層断面
（西から）

図版15

1．SX-1完掘状況
（西から）



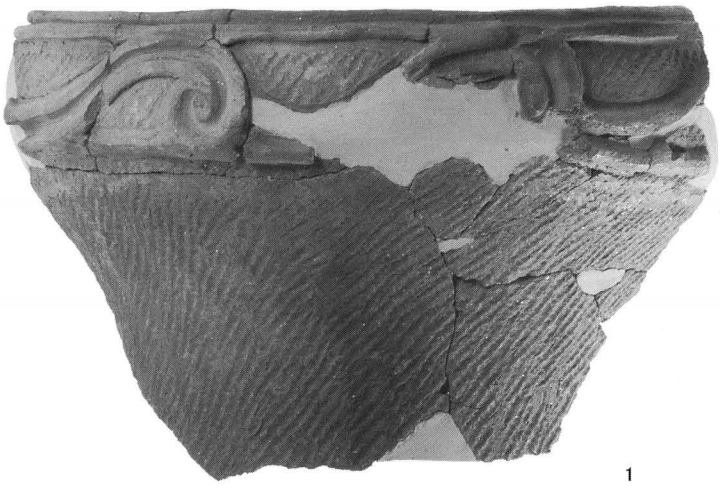
2．SX-2完掘状況
（西から）



3．SX-3完掘状況
（東から）

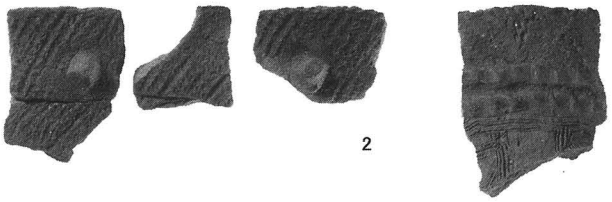
図版 16

SK-20

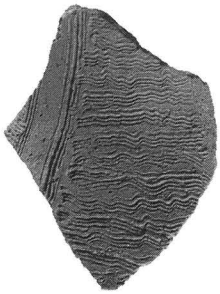


1

SI-2



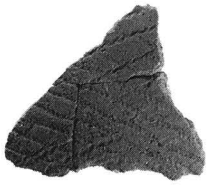
2 3



4

6

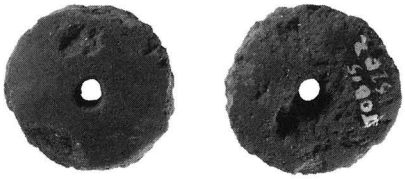
5



7

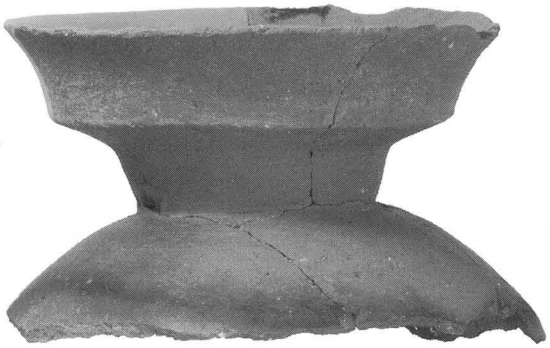
8

9



10

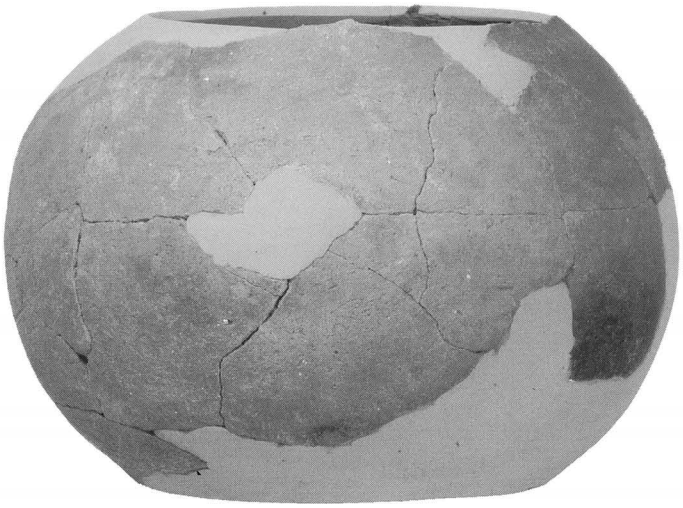
SK-20・SI-2出土遺物



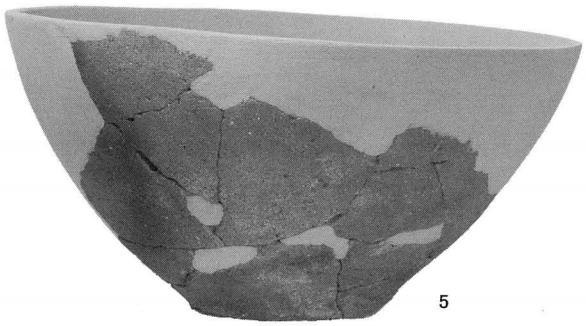
1

2

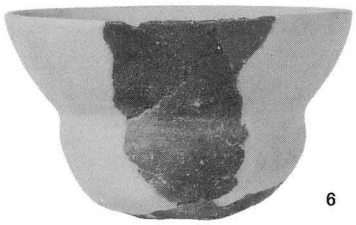
3



4



5

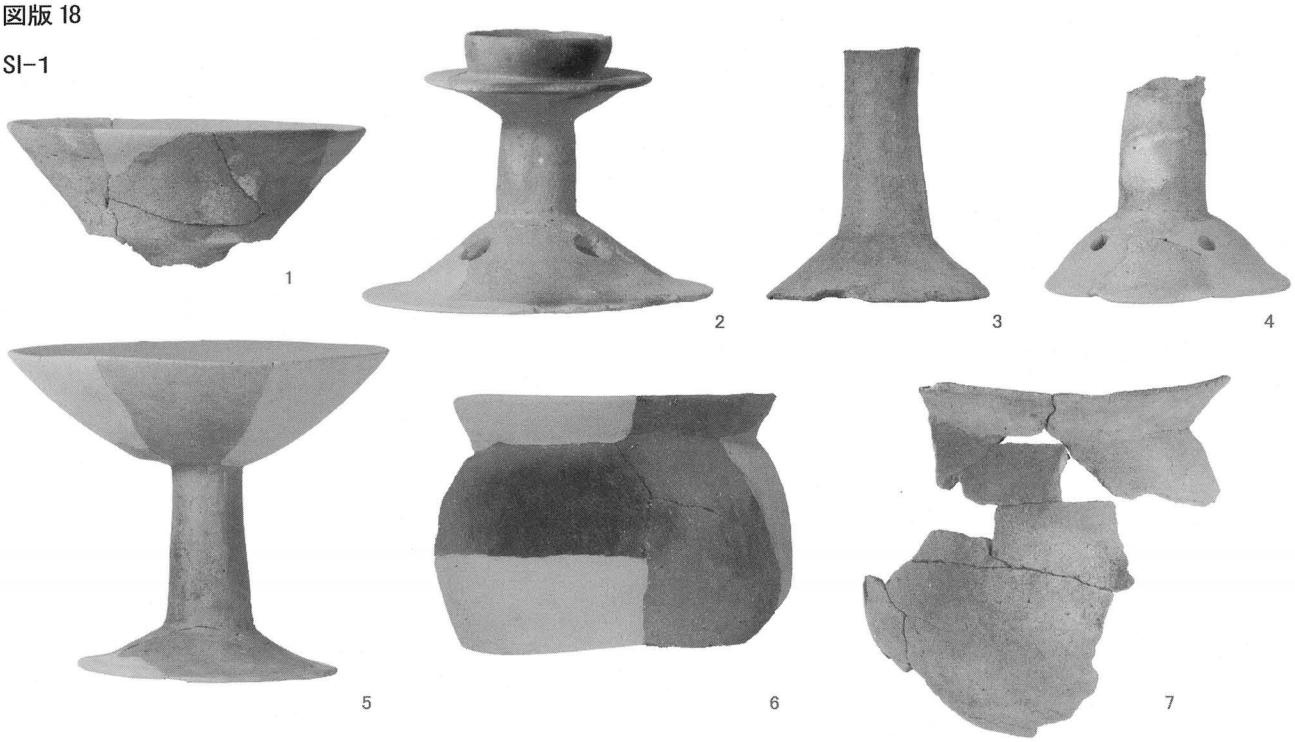


6

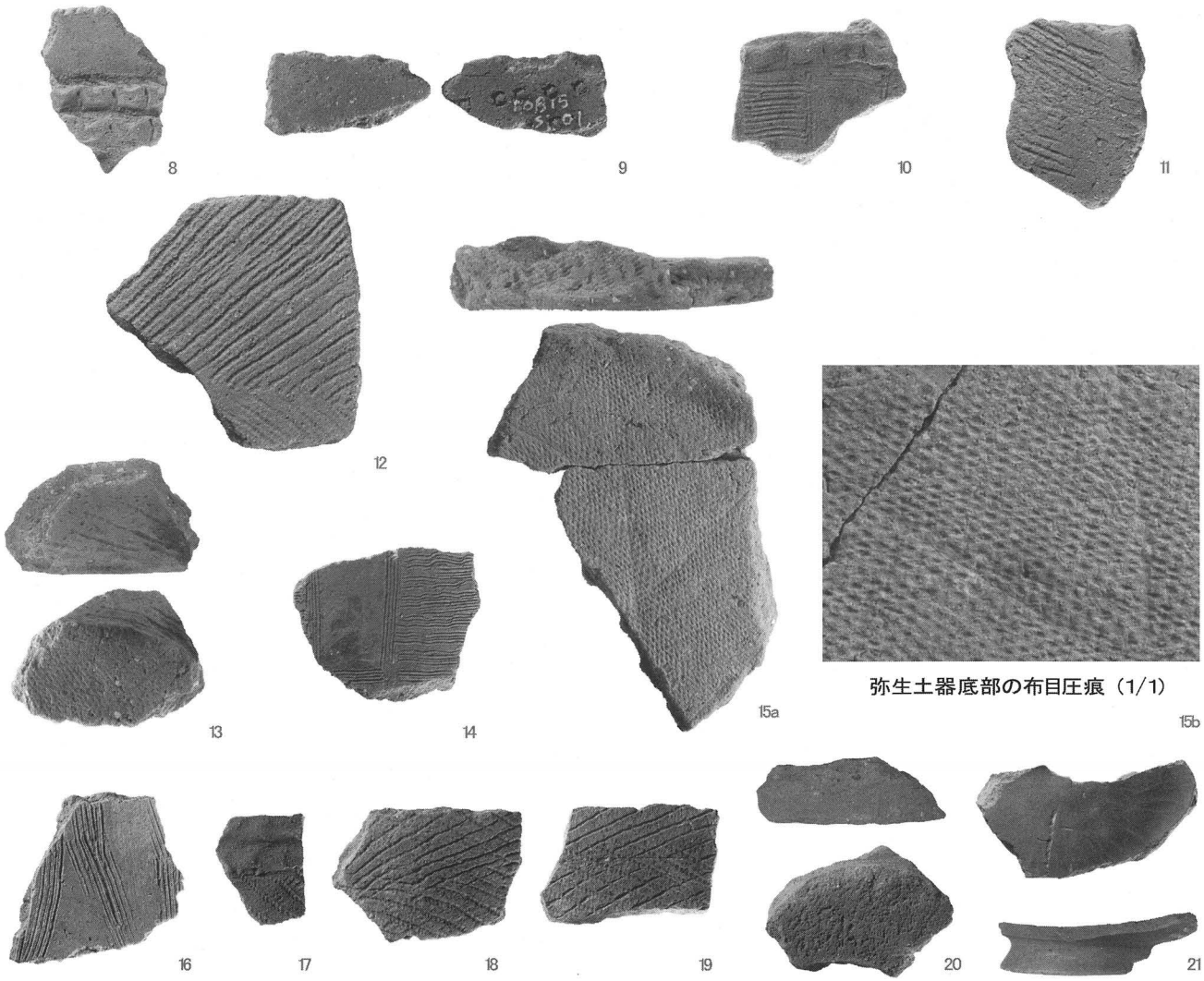
SI-1 出土遺物

図版 18

SI-1



遺構外



弥生土器底部の布目圧痕（1/1）

SI-1・遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	おばらいせき
書名	小原遺跡
副書名	県営畑地総合整備事業小原地区北区　平成15年度調査報告
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	服部敬史　小野真美　萩原明美　山本　久
編集機関	大成エンジニアリング株式会社　埋蔵文化財調査部
所在地	〒162－0045　東京都新宿区馬場下町1－1　日本生命早稲田ビル8F
発行年月日	2004年(平成16年)3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
おばらいせき 小原遺跡	いばらぎけんにしいばらぎぐん 茨城県西茨城郡 ともべまちおおあざおばら 友部町大字小原 ばんほか 1159番外	8321	11	36度 21分 42秒	140度 19分 45秒	2004年 1月15日 ～ 2004年 3月25日	1,260	県営畑地帯総合整備事業（一般型）に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	検出遺構	主な遺物	特記事項
小原遺跡	集落	縄文	土坑　5基	弥生土器・土師器	古墳時代前期の住居跡が検出された。
		弥生	住居　1軒		
		古墳	住居　1軒		
		近世	土坑　24基 溝　4条 不明遺構　2基 ピット　162基		
		時期不明	土坑　1基 不明遺構　1基		

茨城県友部町　小原遺跡

—県営畑地総合整備事業小原地区北区　平成15年度調査報告書—

平成16年3月25日

編集・発行　大成エンジニアリング株式会社
〒162－0045　東京都新宿区馬場下町1－1
日本生命早稲田ビル8F
電話　03－5285－3155
印刷・製本　松涛印刷株式会社